

如何にして、或一物に一の假想的價值なるものを附與し得るか。…又は此假想的價值なるものは如何にして、維持され得るか」と。然し彼れ自身が、此の問題に就て如何に理解する所少なかりしかは、次の言葉によつて明かである。「銀は其有する使用價值に準じて、隨つて其現實の價值に準じて交換された。而して貨幣として採用されることによつて、更らに一の追加的價值⁽¹⁸⁾を受けた。」ジョン・ロー著『通貨及び商業に關する研究』デール編(ギョーマン全集)『第十八世紀財政的經濟學者集』第四七〇頁⁽²²⁾]

(四十七)『貨幣は表章(商品)のである。』(ド・フォルボネー著『商業要論』新版ライデン一七六六年刊第二卷一四三頁⁽¹⁸⁾)。『貨幣は表章として商品に吸引される』(前掲書第一五五頁)『貨幣は或物の表章であつてそれを代表する』(モンテスキュー著『法の精神』全集倫敦一七六七年刊第二卷第二頁⁽¹⁹⁾)。『貨幣はそれ自身が富であるから、單なる表章ではない。それは價值を代表するものでなく、價值と等位にある。』(ルトローヌ前掲書第九一〇頁⁽²⁰⁾)。『價值の概念を觀察するときは、物それ自體は單に一の表章と見做され、物は物そのものとしてでなく、その價するものとして通用する。』(ヘーゲル前掲書第一〇〇頁⁽²¹⁾)。經濟學者よりもズット以前に法學者等は、王權に詣びんが爲めに羅馬帝國の傳統とパンデクテンの貨幣概念とに基き、全中世紀を通じて、貨幣は單に表章に過ぎず、又貴金屬の價值は單に假想的のものに過ぎぬとの見解を流行らして、國王の鑄貨偽造權を擁護した。其の從順なる門生たるフキリツブ・ド・アラア⁽²²⁾は、一三四六年一布告の中に言つた。「何人も次の事を疑ふことは出來ぬ、又疑つてはならぬ。貨幣の製造・制定・供給、其他

貨幣に關する一切の處置、一切の流通、及び我が思ふ通りの又宜しと信ずる價格をば、それに附與することは、單り我等と我等の王としての權限に屬することを。」皇帝の布告が貨幣價值を定めるとは、ローマ法の定説であつた。貨幣を商品として取扱ふことは明文を以て禁止されてゐた。「貨幣を賣買することは、何人にも之を許さず。それは公の使用の爲めに制定せられたるものは、之を商品とす可きものにあらざればなり。」パニニは其著『物の正當なる價值に關する論文』(クストヂ編伊太利經濟名著集近世篇第二卷⁽²³⁾)にて、此の問題に關し適當なる説明を與へた。彼は特に其の第二篇に於て、法學者先生たちを論駁してゐる。⁽²³⁾

一商品の等價形態が其商品の價值の大小の分量決定を含まないことは既に述べた通りである。金が貨幣であること、隨つて他の總ての商品と直接交換し得るものであることを知つても、それは、例へば十封度の金が何れだけに價するかを知つたことにはならぬ。他の總ての商品と同じく、貨幣は自身の價值の大小を只だ相對的に他商品に於て表章し得るのみである。貨幣自身の價值は、其生産に要したる労働時間に依つて決定せられ同じ分量の労働時間が凝結してゐる所の、他の各商品の分量に於て表章される(四十八)。貨幣の相對的價值の大小の斯様な確定は、其產出場所に於て直接の生産物交換に依つて行はれる。斯くて貨幣が貨幣とし

て流通界に入る時に、其價值は既に與へられてゐるのである。十七世紀の最後の數十年に於て、既に貨幣の商品たることを知り得る程に貨幣分解は進んでゐたが、然しそれでもまだ僅かに初期に過ぎなかつた。困難は、貨幣が商品であることを理解する點にあるのでなく、商品が如何にして、何故に、又何に依つて、貨幣であることを理解することに存してゐるのである(四十九)。(24)

(四十八)若し或人が一ブシエルの穀物を生産し得る其同じ時間で一オンスの銀をベルの地中から倫敦に運び來ることが出來るならば、一オンスの銀は即ち一ブシエルの穀物の自然價格(23)である。所で今一層採掘の容易な新鑛山の見出された爲に從來一オンスを獲得したと同じ容易さを以て二オンスの銀を獲得することが出來るとすれば、穀物は一ブシエルに付き十志であつても他の事情に變化なき限り、從來一ブシエルに付五志であつた時と同じ安さであらう。(ウキリアム・ベター著『租税及貢納論』倫敦一六六七年刊第三一頁)(25)

(四十九)貨幣に關する諸々の誤れる定義は、之を二箇の重要分類に大別することが出來る。即ち貨幣を商品以上と見做すものと商品以下と見做すものと是れてある。『ロツシア』教授は斯く我々に教へた後、貨幣の本質に關する幾多の著書文章の雜然たる目錄を擧げてゐるが、貨幣理論の眞の歴史に於て最遠の理解すらもほのめかして居らぬ。

而して彼れは此れに續いて斯う説明してゐる。『兎に角、大多數の近時の經濟學者は、貨幣を他商品と區別する(それなら貨幣は商品以上、或は以下ではないか)所の、諸特質を充分念頭に置かなかつたとは、拒み難き事實である。……此點から見れば、ガニール等の半重商主義的反動も必ずしも全然根據の無いものではない。』(ロツシア著『國民經濟學原理』第三版、一八五八年刊第二〇七—一〇頁)(26) 以上——以下——充分なかつた——此點から見れば——必ずしも全然!何と言ふ概念限定だ。而かも此種の折衷的な大學教授式謬言を、ロツシア先生は謙遜にも經濟學の『解剖生理學的研究方法』(27)と呼んでゐる。然し彼れも一の發見をした功はある。それは即ち貨幣が「一の快き商品」だと云ふことは是れである。

我々は既に A 商品 $= B$ 商品なる最も單純な價值表章に於て他の一商品の價值の大小を表現する物が此の關係からは獨立に、此の等價形態を社會的自
然性質として具備して居るように見へることを知つた。我々は、此偽の外觀の確定される跡を辿つた。此の外觀は、普遍等價が一の特殊な商品種類の自然形態と合體すると同時、即ち貨幣形態に結晶すると同時に、完成されるものである。一商品は、それに依つて他の總ての商品が其の價值を表現するが故に始めて貨幣となるとは見えないで、寧ろ反對に、此の一商品が貨幣であるが故に、他商品はそれに依

つて普遍的に自身の價値を表現するように見える。中間の行程は其自己の結果の中に消滅して何等の痕跡をも止めない。諸商品は自分からは何もしないで、自身の價値姿容が自身の外部に又自身と並んで存する一の商品體として完成されてゐることを見出す。此等の物、即ち金銀は、大地の胎内から出ると同時に、既に總ての人間労働の直接の化身である。そこに貨幣の魔術性がある。社會的生產行程に於ける人類の單に原子的なる動作、随つて彼等の管理及び意識的なる個人的行為から獨立な、彼等自らの生産事情の物的姿容は先づ、彼等の労働生産物が一般に商品形態を取ることに現はれる。されば貨幣魔術の謎は、要するに商品魔術の可見的になつて、人の目を射る所の謎に外ならぬ。⁽²⁷⁾

第三章 貨幣、即ち商品流通

(一) 價値の尺度

簡明の便を圖り、本書を通じて、予は金を以て貨幣商品と前提する。⁽¹⁾金の第一の職分は、商品界に其價値表章の材料を供給すること、換言すれば、諸々の商品價値を同分母の大きさ、即ち互に質を等しくし、量を比較され得る大きさとして表現することである。金は斯くして、諸々の價値の普遍尺度として働く。此職分に依つてのみ、特殊の等價商品たる金が、先づ貨幣となるのである。⁽²⁾

諸商品は、貨幣に依つて、通約され得るものになるのではない。否、正反對である。總ての商品は價値として實現された人間労働であり、随つて其れ自體に於て通約され得るものであるが故に、其價値を共通的に同一の特殊商品で測り、之れに依つて此特殊商品を自身の共通的價値尺度、即ち貨幣に化するとが出来るのである。價値尺度としての貨幣は、商品の内在的價値尺度、即ち労働時間の、必然的現象形態である。⁽⁵¹⁾⁽³⁾

(五十)貨幣が何故直接に労働時間その者を代表し(例へば一枚の紙幣が労働時間を表示すると云ふように)ないかと云ふ問題は結局、商品生産の基礎に於て、諸々の労働生産物は何ゆゑ商品として表現されねばならぬかと云ふ問題に歸着する。なぜならば斯様に商品として表現されると云ふことは、即ち労働生産物が商品と貨幣商品とに二重化することを意味するからである。或は又、此問題は、私的労働が何ゆゑ其反對物たる直接社會的な労働それ自體として取扱はれ得ないかと云ふ問題に歸着する。かの商品生産の基礎の上に立つ「労働貨幣説」の、淺薄なる空想主義に就ては、予は之れを他の所で(前掲拙著第六一頁以下)究明した。茲では例へばロバート・オーウエンの「労働貨幣」が劇場切符などが「貨幣」でないと同じく、矢張り「貨幣」でないことだけを言ふて置こう。オーウエンは商品生産と正反對の一生産形態なる、直接社會化した労働を前提してゐる。労働券は共同労働に對する生産者の個人的分け前、及び共同生産物のうち消費に定められたる部分に對する、其の個人的請求權を確證するものに過ぎぬ。が、商品生産を前提しないで、而も貨幣の手に依つて商品生産の必要條件を避けんとするが如きは、オーウエンの思ひも寄らぬ所であつた[4]

金に於ける一商品の價值表章即ち $\text{貨幣} \equiv \text{商品}$ 或は $\text{貨幣} \equiv \text{商品}$ の如き單一の方程式は、今や鐵價格を社會的に妥當に表現するに充分である。此方程式は最早、他の諸商品の價值方程

式と並んで整列するを要しないのである。なぜならば金と云ふ等價商品は、既に貨幣の性質を具備してゐるから。かくて諸商品の普遍的相對的價值形態は、今や再び其本來の單純なる、或は個別的なる相對的價值形態の姿容を具へる。他方に於て、擴大したる相對的價值表章、換言すれば諸々の相對的價值表章の限りなき連系は、貨幣商品特有の相對的價值形態となるが、此連系は、今や既に諸々の商品價格に於て社會的に與へられてゐる。試みに物價表を右端から左方に向つて逆に讀んでゆくならば、我々は貨幣の價值の大小が有らゆる可能の商品に表現されてゐるのを發見する。之に反して、貨幣には何等の價格がない。他の諸商品の斯くの如き統一的な相對價值形態に與かる爲には、貨幣は自分自身の等價としての自分自身に繫依せしめられねばならぬであらう。[5]

諸商品の價格即ち貨幣形態は諸商品の價值形態一般と同じく、其有形的な現實的な具象的形態とは異り、隨つて單に觀念的或は假想された形態である。鐵、リンネル、小麥等の價值は目に見えないが、それらの物自體の中に存してゐる。それはそれらの物が金と等しき事に依つて、表象される。此の金と等しいと云ふ事は、謂

はゞ只それらの物の頭の中にのみ存する、金との一關係である。そこで商品所有者はそれらの物の價格を外界に告げ知らせる爲に、自身の舌を彼等に貸すか、或は紙札を彼等にブラ下げてやらなければならぬ。⁽⁵¹⁾

(五十一)野蠻人若しくは半野蠻人は之とは別様に舌を使ふ。例へばバリー大佐は、パフィン灣(一)西岸の住民に就て斯う云つてゐる。「此場合即ち生産物交換に際して、彼等はそれを(即ち彼等に渡された物品)二度舐めた。斯して後、彼等は其取引が満足に結了したと考へたらしかつた。」同様に東部エスキモー人の間にあつても亦、交換者は品物を受取る都度それを舐めた。斯くの如く北方に於ては舌が物品占有の器官として使用されるに對し、南方に於ては腹が蓄積された所有物の器官と見做され、そしてカフアール人が富の大小を腹の肥え具合で評價する事は、決して怪むに足らない。カフアール人は、隅に置けない者共である。なぜならば一八六四年の英吉利の公式健康調査報告は労働階級の大部分が脂肪營養の不足に悩んでゐることを訴へてゐるのに、恰も其年ドクトル・ハーヴェーなる人(但し血液循環の發見者とは別人)はブルヂオア及び貴族階級の脂肪過度を癒やすと云ふイカサマ處方箋を廣告して大に儲けたからである。(7)

⑤ 金に依る商品價値の表章は觀念上のものであるから、此の目的の爲にはまた單に假想された或は觀念上の金(8)を使用することが出来る。夫々の商品所有者は

⑤ 假想された或は觀念上の金(8)を使用することが出来る。夫々の商品所有者は

⑤ 假想された或は觀念上の金(8)を使用することが出来る。夫々の商品所有者は

其商品の價値に、價値の形態即ち假想の金形態を附與する時、其商品がマダ／＼金に化されて居らぬことを知る。又幾百萬マルクの商品價値を金で評價するには、實際の金を一片も要せざることを知る。されば貨幣は、價値尺度としての其職分に於ては、單に假想された或は思想上の貨幣として役立つ。此の事情は奇怪極まる諸説を生ぜしむる動機となつたのである。(五十二)。(8)

(五十二)拙著『經濟學批評』中の一節『貨幣の尺度單位に關する諸説』第五三頁以下。(9)單に假想された貨幣は價値尺度としての職分に役立つけれども、價格は全く實際の貨幣材料に繋つてゐる。價値即ち例へば一噸の鐵に含まれてゐる人間の労働分量は、それと同じ分量の労働を含む所の、一の假想的の貨幣商品量に依つて表章される。斯くて金、銀或は銅のいづれか、價値尺度に使用されるに従つて、一噸の鐵の價値は全く異つた價格表章を受ける。換言すれば、全く異つた分量の金なり、銀なり、銅なりで表象される。(10)

故に二の異つた商品例へば金と銀とが、同時に價値尺度として役立つ場合には、總ての商品は二通りの異つた價格表章、即ち金價格と銀價格とを有するようになる

ので、此双方は、金と銀との價值比例不變である限り、例へば「 $1:1$ 」に止つてゐる限り、穩かに並んで行くのであるが、此の價值比例に變動ある都度諸商品の金價格と銀價格との比例は攪亂される。斯くて價值比例の此變動は、價值尺度の複本位制が價值尺度の職分と矛盾するものであるとを事實上證明するのである(五十三)。(11)

(五十三) 第二版註。『金と銀とが貨幣として、即ち價值尺度として法律上併存する所にあつては、それらと同じ物質として取扱はうとする無益な試みが常になされてゐる。同一の労働時間が常に同一比例の金と銀とに體現されねばならぬと假定するのは、事實上、金銀が同一物質であること、及び價值の低い方の金屬、即ち銀の一定量が、一定量の金の不變の一部であることを假定することになる。エドワード三世の治世よりジョージ二世の時代に至る間、英國の貨幣史は金銀の價值比例の法律上の確定と、其事實上の價值動搖との衝突から生じた絶えまなき混亂に終始してゐる。或時は金、或時は銀が其實際の價值よりも高く評價された。そして其實際の價值よりも低く評價された方の金屬は、流通界より引取られ鑄造されて輸出された。然る後、兩金屬の價值比例は、法律によつて再び變更されたが、新規の名目價值は總て元と同じく、實際の價值比例と衝突を始めた。——我々の時代に於ては、印度及支那の銀需用に胚胎する所の、銀に對する金の價值の甚だ微弱な一時的の低落は銀の輸出、及び金の爲に銀が流通界から驅逐されると云ふ、右と同一の現象を、極めて大仕掛に佛蘭西に生ぜしめた。一八五五年、五六年

五七年の間に佛蘭西に於ける金の輸出に對する其輸入超過は四千一百五十八萬磅であつたが、同時に銀の輸入に對する其輸出超過は一千四百七十萬四千磅に上つた。實に金銀が法定價值尺度であり、隨つて双方とも支拂に於て、受取られねばならぬが、然し誰れも隨意に其一方を以て支拂ひ得る諸國に於ては、價值の實際増騰した方の金屬は打歩を生じ、他の總ての商品と同じく、實際の價值よりも高く評價されてゐる方の金屬に於て其價格を測る。斯くて後者のみが専ら價值尺度として役立つ。此の方面に於ける總ての史的經驗は、結局次ぎの一點に歸着する。即ち法律上二の商品が價值尺度の役目を盡くす所に於ては、事實上常に、其一方のみが價值尺度たる地位を占めるものである。』前掲拙著第五二及五三頁(12)

價格の定まつた商品は總て、 a 商品 $A \parallel a$ 金、 b 商品 $B \parallel b$ 金、 c 商品 $C \parallel c$ 金等の形で表現される。右の中 a, b, c は商品種類 A, B, C の一定量であり、 a, b, c は金の一定量である。斯くて諸々の商品價值は、種々なる大さの假想金量に轉化されてゐる。隨つて諸商品體の種々雜多なるにも拘らず、同分母の諸々の大さ、即ち金の諸々の大さに轉化されてゐる。斯くの如き種々なる金分量として諸々商品價值は互に比較され、計量される。斯くて、それらの商品價值を其測度單位としての一定の金に繫依せしめやうと言ふ必要が技術上生じて來る。此測度單位その者は

更に割り切れる部分數に區分されるとに依て測度標準(3)となる。金、銀、銅等は、それが貨幣化する以前に、既に其金屬の中に斯の如き測度標準を有してゐる。故に例へば、一封度は測度單位として役立ち、一方では更にオンスなどに區分され、他方では、ハンドレットドウェイトなどに總合される(54)。されば總ての金屬流通に於て、既存の重量標準名は又、貨幣標準即ち價格標準の最初の名稱となるのである(13)。

(54) 第二版註。英吉利に於て一オンスの金が貨幣標準の單位として、割り切れる部分數に區分されないと云ふ、奇異なる現象は、次の如く説明されてゐる。「我國の幣制は其初め専ら銀の使用にのみ適合せしめられたものであつた。——隨つて銀一オンスは常に之れを一定の適當なる鑄貨數に分つことが出来る。然るに金は後に至り、其初め専ら銀に適合せしめられた幣制内に持込まれたものであるから、金一オンスは之れを一定の適當なる箇數に鑄造することが出来ぬのである。」マクラーレン著『通貨史』倫敦一八五八年刊第一六頁(14)。

價值の尺度として及價格の標準として貨幣は二の全く異つた職分を盡くす。即ち、人間労働の社會的體化としては價值の尺度であり、固定したる金屬重量としては價格の標準である。價值尺度としては、種々雜多なる商品の價值を、價格即ち諸々の假想金量たらしめることに役立ち、價格の標準としては、それらの金量を計

價值の尺度として
價格の標準として

る。價值の尺度に於ては、諸商品は價值として計量される。之れに反して價格の標準は、諸々の金量を一の金量で測り、一の金量の價值を他の金量の重量で測るのではない。價格の標準は、一定の金重量が測度單位として確定されねばならぬ。此の場合には、同分母の諸容積を測度する他の總ての場合に於けると同じく、尺度關係の確定と言ふことが決定的の條件となる。されば同一分量の金が測度單位として不變的に役立てば役立つ程、價格の標準は益々宜しく其職分を果すのである。然るに金は、其れ自體が労働生産物であるが故にのみ、隨つて可能的に一の可變的價值であるが故にのみ、價值の尺度として役立ち得るのである(55)。(15)

(55) 第二版註。英吉利の著書文章に於ては、價值の尺度(5)と價格の標準(6)とに關する混亂は名狀すべからざるものである。双方の職分、隨つて双方の名稱は絶えず混同されてゐる。(16)

金の價值變動が價格標準としての其職分を決して侵害せざることは先づ明瞭である。金價值は如何に變動しても、種々なる金分量は常に、相互同一の價值比例を保つてゐる。金の價值が假令一千パーセントだけ下落しても、十二オンスの金は一オンスの金に比べて依然十二倍の價值を有してゐるであらう。そして價格

に於ては、只種々なる金量の相互比例のみが問題である。他方に於て、一オンスの金は其價値の騰落と共に決して其重量を變じないのであるから、其割り切れる數に區分された諸部分の重量も同様に變化しない。斯くて金は其價値が如何に變動しても價格の固定尺度としては常に同一の職分を盡すのである。(17)

金の價値變動は又價値尺度としての其職分をも妨げぬ。それは總ての商品に同時に影響する。随つて他の事情に變化なき限り、それらの商品相互の諸々の相對的價値を不變のまゝにして置くのである。それらの價値が今やみな、金價値の變動の結果として、從來に比べて或は高き或は低き金價格によつて表章されようとも。一商品の價値が他の何等かの一商品の使用價値で表現される場合と同じく、諸商品が金で評價される場合にも亦、與へられたる時に於て一定の金量の生産が與へられたる勞働量を要すると言ふことだけが假定されてゐる。商品價格一般の運動に就ては、曩に説いた單純なる相對的價値表章の諸法則が行はれる。(18)

商品價格は、貨幣價値が變らないでゐる時には、商品價値の昂騰する場合にのみ、又商品價値が變らないでゐる時には、貨幣價値の低落する場合にのみ、一般的に昂

騰することが出来る。之れと反對に、商品價格は貨幣價値が變らないでゐる時には、商品價値の低落する場合にのみ、又商品價値が變らないでゐる時には、貨幣價値の昂騰する場合にのみ、一般的に低落することが出来る。随つて、貨幣價値の昂騰は、それに比例した商品價格の低落を來たし、貨幣價値の低落はそれに比例した商品價格の昂騰を來たすと言ふことには決してならぬ。之は只、價値の變らぬ商品に對してのみ行はれる事である。例へば貨幣價値と同様に、又同時に、自身の價値の昂騰するような諸商品は、同じ價格を保つてゐる。其れらの商品の價値が貨幣價値よりもより、緩漫に、或はより、迅速に昂騰する場合には、それらの商品の價格の騰落は、其價値運動と貨幣の價値運動との差額に依つて決定される。以下之に準ず。(19)

次に價格形態の考察に戻る。

金屬重量の貨幣名は次第に、其本來の重量名から分離する。それは色々の理由によるものであるが、とりわけ歴史的に最も重要なものは左の通りである。(一)發達程度により、低い民族に外國貨幣の輸入されると(例へば古代羅馬に於て金銀

貨が其初め外國商品として流通したるが如き。斯の如き貨幣の名稱は、國內の重量名とは異つてゐる。(二)富の發達と共に、比較的下級の貴金屬は比較的高級の貴金屬に依て即ち銅は銀に依り、銀は金に依つて、價值尺度たる職分を奪はれる。——此の順序は總ての詩的年代順と、いかほど衝突する者であつても(五十六)。例へば磅は元來、實際の一封度の銀に對する貨幣名であつた。然るに金が價值尺度としての銀を驅逐すると同時に、此同じ名稱は金對銀の價值比例次第で、多分十五分の一の封度の金に、或は其他の重量の金につけられてゐる。斯くて今では、貨幣名としての磅と金の通常の重量名としての封度とは、分離してゐるのである(五十七)。(三)數世紀に亘つて繼續した王侯の貨幣變造。之れが爲に、鑄貨の本來の重量のうちから、事實上只その名稱のみが残されることになつた(五十八)。(20)

(五十六) 此順序はまた一般に、歴史的にも當嵌らないのである。

(五十七) 第二版註。斯くて英吉利の磅の示す所は、其本來の重量の三分の一にも當らざ聯合以前のスコットランドの磅は、僅かに其本來の重量の三十六分の一に過ぎなかつた。又佛蘭西のリーヴルは其本來の重量の七十四分の一、スペインのマラウエヂは一千分の一以下、ポルチユガルのレイはそれよりも更らに一層小比例である。(21)

(五十八) 今日に於て單に觀念的名稱たるに過ぎぬ種類の貨幣こそ、諸民族間に於て、最古の貨幣である。此等は何れも、一度は現實の貨幣たりしものである。而して此等は現實のものであつたが故に、計算貨幣として用ゐられたのである。(ガリアニ著『貨幣論』第一五三頁(22))

斯くの如き歴史的諸過程は、金屬重量の貨幣名が其通例の重量名より分離せらるゝ事を、一箇の國民的習慣たらしめる。元來貨幣標準は一方に於て、純然たる傳統的のものであり、他方に於て又一般的効力を要するものであるから、結局それは法律に依つて規定されることになる。斯くて一定重量の貴金屬例へば一オンスの金は、公に何箇かの割り切れる部分數に區分され、これらの部分は磅弗等の法定名を受ける。斯くて貨幣の眞の測度單位として働く所の之等の部分は、更に志片等の法定名を持つた割切れる數の諸部分に小分される(五十九)。一定の金屬重量は依然として金屬貨幣の標準たるを失はない。變つたのは、小分けされたこと、名稱を付せられたこと、である。(23)

(五十九) 第二版註。デヅキッド・アーカート氏は、其著『通語集』(?)に於て、今日英吉利の貨幣標準單位なる一磅が約四分の一オンス金に等しいと言ふ、驚くべき(!)事柄に就て述べ

て曰く、『之れ尺度を贖造する者であつて、標準を設定する者ではない』と。彼は金重量の此『贖造名稱』に於て、其他至る所に於けると同じく、文明の贖造作用を認めてゐる。⁽²⁴⁾斯くて價格、即ち諸商品の價值が其中に觀念的に轉化されてゐる金の分量は、今や貨幣名若しくは金標準の法律上有効なる計算名を以て表章される。かくて英吉利では、一クオターの小麦は一オンスの金に等しいと云ふ代りに、三磅十七志十片半に等しいと云ふであらう。斯くの如くにして、諸商品は其貨幣名に於て、自身が幾許に値してゐるかを言ひ現はす。そして貨幣は、一の物を價值として、即ち貨幣形態に於て確定することが問題である場合には、いつでも計算貨幣として役立つのである。⁽⁶⁰⁾、⁽²⁵⁾

⁽⁶⁰⁾ 第二版註、或人『ヘラス人は貨幣を何に使用するかと問ふたら、アナカルシスは、計算にと答えた。』(アテネウス著『學者の晩餐』シユヴァイグホイゼル編、第二版、一八〇二年刊) ⁽²⁶⁾

物の名稱は、其性質に取つては全く外部的のものである。予は或る人の名がヤコーブだと言ふことを知つても、其人間に就て何も知らないのである。それと同じやうに、磅、弗、フラン、デウカート等の貨幣名に於て、價值關係は跡型もなく消え失

せてゐる。之等の幽玄なる表章の、隠れたる意味に關しての錯亂は、貨幣名が商品の價值と同時に、一の金屬重量の、即ち貨幣標準の割り切れる數に分たれた諸部分を表章するので、いよ／＼益々甚だしくなる。⁽⁶¹⁾。他方に於て價值が、商品界の種々雜多なる自然體と異り、斯くの如き概念なく物的なる、而かも單純に社會的なる形態⁽⁹⁾に發展しゆくことは必要である。⁽⁶²⁾、⁽²⁷⁾

⁽⁶¹⁾ 第二版註。價格の標準としての貨幣は商品價格と同じ計算名で現はれる故に、隨つて例へば一オンスの金は、一噸の鐵の價值と同じく三磅十七志十片半で表章される故に、貨幣の此計算名は貨幣の鑄貨價格⁽¹⁰⁾と呼ばれた。かくて金は(隨つて銀も)それ自身の實質に於て評價せられ、他の總ての商品と異り國家に依つて固定の價格を與へられると解する驚くべき見解が生じた。之れ畢竟、一定の金重量の計算名の確立を此重量の價值の確立と感違ひしたものである。(前掲拙著、第五二頁) ⁽²⁸⁾

⁽⁶²⁾ 拙著『經濟學批評』第五三頁以下の『貨幣の測定單位に關する諸説』を参照せよ『鑄貨價格』の引上げ或は引下げ(それは法律上確定された重量の金或は銀に對する法定貨幣名を、國家の手で從來よりも一層大きな或は一層小さな重量に引移し、之れに従つて又四分の一オンス金を二十志貨でなく、將來は四十志貨に鑄造すると言ふ様な點に存してゐる)に關する空想に就ては、それが公私債權者に對する拙劣な財政上の遺縁りを目的とするものでなく、經濟上の『奇跡療法』を目的とする限りに於ては、ペテーが

其著『貨幣問答、ハリファックス侯へ、一六八二年刊』²⁹⁾の中で餘す所なく之を論じ盡した。それ故、彼れの直接の祖述者(後年の祖述者は扱て措き)たるサー・ダドレー・ノース及びジョン・ロック等でさへも、只彼れの説を平凡化し得るに過ぎなかつた程である。彼れはとりわけ斯う言つてゐる。『若し一國の富を一片の布令に依つて十倍し得るならば、斯くの如き布令が我が長官等に依つて既に久しき以前から發せられて居らなかつたと云ふことは不思議であらう。』(右書第三六頁)³⁰⁾

價值は商品の體現した勞働の貨幣名である。されば商品と、自身の名稱が、其商品の價格である所の貨幣分量とが等價であると云ふことは、一般に一商品の相對的價值表章が常に二商品の等價である事を表章する如く、一の重語である(六十三)。然し價格は商品の價值の大小の代表者として、貨幣に對する其交換比例の代表者であるが、其反對に、貨幣に對する商品の交換比例の代表者が、必ず其商品の價值の大小の代表者だと云ふ事にはならぬ。假りに、同じ大きさの社會的に必要なる勞働が、一クオターの小麦と二磅(約半オンスの金)とに表現されるものとせよ。二磅は一クオターの小麦の價值大小の貨幣表章即ち其價格である。所で若し事情が此價格を三磅に引上げるとを許すか、或は一磅に引下げるとを餘儀なくするか

するならば、此一磅と三磅とは、小麦の價值の大小の表章として餘りに小さく或は餘りに大きい。而かも其れは共に同じ小麦の價格である。なぜならば第一に、其れらは小麦の價值形態即ち貨幣であり、第二に、貨幣に對する小麦の交換比例の代表者であるから。生産諸條件或は勞働の生産力が變らなるとすれば、一クオターの小麦の再生産には、依然として同じ分量の社會的勞働時間が支出されねばならぬ。此事情は小麦生産者の意志にも、他の商品所有者の意志にも支配されなす。³¹⁾

(六十三)『斯くて銀百萬フランの價值は、普通商品の一百萬フランの價值以上に價するこ
とを承認しなくてはならぬ』(ル・トロイヤ前掲書第九二二頁)に、即ち『一の價值が一の
同等價值以上に値する』と云ふことになる。³²⁾

されば商品の價值の大小は、社會的勞働時間に對する、其商品の形成行程に内在する一の必然的關係を表章する。そして價值の大小が價格に變ずると同時に、此必然的關係は、一商品と其外部に存する貨幣商品との交換比例として現はれる。然し此交換比例に於ては、其商品の價值の大小が表章され得ると共に、又與へられ

たる事情のもとに其商品が譲渡される所の、其眞の價值よりも一層大きな若しくは一層小さな價值が表章され得る。されば價格と價值の大小との量的不一致或は前者が後者と異なることの可能性は、價格形態その者の中に存してゐる。之れは決して價格形態の缺點ではなく、却つてそれを、規律が單に無規律性の、盲目的に働く平均的法則としてのみ自己を貫徹し得る所の、一の生産方法の適當なる形態たらしめるのである。⁽³³⁾

然し價格形態は單に、價值の大小と價格との間の、即ち價值の大小と其れ自身の貨幣表章との間の量的不一致の可能性を許すのみでなく、又一の質的矛盾をも宿し得るのである。かくて貨幣は諸商品の價值形態に外ならざるものであるのに、價格は一般に價值表章で無くなるほどである。例へば良心、名譽等の如き、それ自體としては何等の商品でない物でも、其所有者は貨幣を得る爲にそれを販賣に對することが出来る。

斯くしてそれらの物は、其價格に依つて商品形態を受けることが出来る。されば一物は一の價值を有することなしに、形式的に一の價格を持つことが出来る。

此場合、價格表章は、數學上の一定容積と同じく假想的なものとなる。他方に於て何等の人間労働が體現されて居らぬ故に何等の價值を有せざる未墾地の價格の如き假想の價格形態も亦、一の事實上の價值關係、若しくは其れより派生したる關係を宿し得るものである。⁽³⁴⁾

相對的價值形態一般と同じように、價格は、一商品例へば一噸の鐵の價值を、一定量の等價例へば一オンスの金が、直接鐵と交換し得られると云ふことに依つて表章するが決して其反對に鐵の方が直接金と交換し得られると云ふ事に依つては表章しない。かくて實際に一の交換價值の作用をなす爲には、商品は其自然體を剥ぎ捨て、單なる假想上の金から事實上の金に轉化しなければならぬ。よし商品に取つて斯くの如き變質作用は、ヘーゲルの『概念』に取つて必然から自由への推移が、或は又ウミサリ蟹に取つて其甲の裂壞が、また或は教父ヒエロニムスに取つて古きアダムの脱ぎ棄てが^(六十四)、辛いよりも、より、辛いとであるにしても。⁽³⁵⁾

(六十四) ヒエロニムスは若き時、物質の肉と苦闘しなければならなかつた(其の沙漠に於ける想像の美女との闘争が示す如く)が、老いてはまた精神的の肉とも苦闘しなければ

ならなかつた。例へば彼は斯う言つてゐる。予は心の中に世の審判人の前に立つたと信じた。『汝は誰人ぞ』と一の聲は問ふた。『予はキリスト信者なり』と答へた。すると審判人は大喝して『欺く勿れ。汝はシセロ信者に過ぎぬ』と。^[36]

商品は其現實の姿容(例へば銀の如き)と並んで、價格に於て觀念的の價值姿容、或は假想の金姿容を有する事が出来る。然し商品は同時に事實上鐵でもあり、又事實上金でもある事は出来ぬ。商品の價格賦與には、假想の金をそれと等位に置けば十分である。商品が其所有者に取つて一の普遍等價の役を盡し得る爲には、其れは金に依つて代はられなければならぬ。例へば鐵の所有者が或る浮世的商品の所有者の許に至り、鐵價格を指して貨幣形態であると言ふならば、浮世的商品の所有者は恰も、天上で聖ペテロが彼れに向つて信仰箇條を讀み上げた所のダシテに答へたように答へるであらう。曰く

『彼の錢の純分と目方は十分能く吟味してある。さり乍ら云へ、君は猶ほ其を囊中に藏するかを。』^[37]

價格形態は、商品が貨幣と引換へられ得ること及び引換へられねばならぬことを含む。他方に於て、金は既に交換行程に於て貨幣商品として活動するが故にの

み觀念上の價值尺度として働くのである。故に觀念上の價值尺度の中には硬貨が伏在してゐるのである。^[38]

(2) 流通要具⁽³⁾

a 商品の轉形

我々は商品の交換行程が矛盾し且つ互に排斥し合ふ諸關係を含むことを知つた。商品の發展は之等の矛盾を除去するものではないが、それらが運動し得る形態を造るものである。之れ一般に、實際の矛盾が依つて融和される方法である。例へば、一の物體が絶えず他の物體へ落ち掛り(求心)同時に又絶えずそれから飛び去る(遠心)と云ふことは一の矛盾である。そして楕圓形は、此矛盾が實現されると共に融和される所の運動形態の一である。^[39]

交換行程は、商品をばそれが非使用價值として存する人の手から、使用價值として存する人の手に移轉せしむる限りに於て、社會的の代謝機能である。一の有用な勞働方法の生産物は、他の有用な勞働方法のそれに代る。商品は一度び使用價值として役立つ場所に達すると、商品交換の範圍から消費の範圍に入り込むので

ある。茲ではたゞ交換の範囲のみが我々の興味を引く。されば我々は此行程の全體を形式的方面から観察しなければならぬ。即ち社會的代謝機能を仲介する商品形態變化、即ち商品の轉形(39)のみを観察しなければならぬ。(40)

此の形態變化に對する理解の甚だ不十分なる所以は、價值概念その者に對する不明瞭によるは別として、一商品の總ての形態變化は二商品、即ち普通商品と貨幣商品との交換に於て行はれると言ふ事情から起るのである。我々が若し此の實質的要件、即ち商品と金との交換にのみ執着してゐるならば、我々は正に我々が注意しなければならぬ事柄、即ち商品の形態の上に生ずる事柄を看過することになる。即ち金は單なる商品としては貨幣でない事、及び他の諸商品は其價格に於いて自身の貨幣姿容としての金に、みづからを關係せしめることを、看過することになる。(41)

商品は最初金を着せられず砂糖を付けられず、其有りのまゝの姿で(42)交換行程に入り込む。交換行程は商品を商品と貨幣とに二重化せしめる、即ち商品が依つて其使用價值と價值との内在的對立を表現する一の外部的對立を造り出す。此

の對立に於て使用價值としての商品は、交換價值としての貨幣と對向することになるのである。(43)

他方に於て、此對立の兩側は商品である、即ち何づれも使用價值と價值との一體である。然し異つた物の此一體は、兩極のそれ／＼に於て逆に現はれ、それに依つて同時に兩極の相互關係を表現する。商品は現實的には使用價值である。其價值性は只だ觀念的のみ價格に於て現はれ、價格は商品を其現實の價值姿容として對立した金に關係せしめる。之れに反して、金物質は單に價值體現物、即ち貨幣として働くに過ぎぬ。故にそれは現實的に交換價值である。その使用價值は只だ觀念的のみ、諸々の相對的價值表章の連系に於て現はれるに止まり、之等の相對的價值表章に於て、金物質は自身の諸々の現實的な使用形態の總體として對立した諸商品に關係する。商品の斯くの如き對立的形態は、其交換行程の實際の運動形態である。(43)

我々は今何等かの商品所有者、例へばお馴染みのリンネル織工に従つて交換行程の舞臺、即ち商品市場に赴かう。彼れの商品なる二十ヤールのリンネルは、其價

格が豫め定まつてゐる。其の価格は二磅である。彼れは右のリンネルを二磅と交換する。そして彼は舊式な男であるから、此二磅を更らに同價格の家庭用バイブルと交換する。即ち彼に取つて單に商品であり價値の負擔者であるに過ぎないリンネルは、其價値姿容である金と引換へられ、此形態から更に他の一商品バイブルと引換へられる。所が此バイブルは、使用對象として織工の家庭内に入り込み、其處で敬虔の欲望を満さなければならぬ。⁽⁴⁴⁾

かくて商品の交換行程は二の對立した、そして互に補ひ合ふ所の轉形⁽⁴⁵⁾、即ち商品から貨幣への轉形と、貨幣から商品への再轉形とに於て行はれる⁽⁶⁵⁾。「此商品轉形の要素はいづれも商品所有者の取引である。即ち販賣、換言すれば商品を貨幣と交換すること、購買即ち貨幣を商品と交換すること、及びその兩行為の一體、即ち購買するための販賣である。⁽⁴⁵⁾

(六十五) 『ヘラクライトスの説によれば、萬有は火より、火は萬有より轉化して生ずる。恰かも金が商品に轉化し、商品が再び金に轉化する如くに。』(フェルヂナンド・ラサルレ著『昧者ヘラクライトスの哲學』伯林一八五八年刊第一卷第二二二頁⁽¹⁷⁾。ラサルレは此箇所への註(右書第二二四頁註三)、不當にも貨幣を單なる價値表章だと言つてゐる。⁽⁴⁶⁾

そこでリンネル織工は其取引の最後の結果を見ると、リンネルの代りにバイブルを持つてゐる。即ち其初の商品の代りに、同じ價値ではあるが、然し有用性の異なる他商品を持つてゐる。之れと同じようにして彼れは、其他の生活資料及び生産機關を收得するのである。彼の立場からすれば、此の全行程は只、彼れの勞働生産物と他人の勞働生産物との交換、即ち生産物交換を仲介するものに外ならぬ。斯くて商品の交換行程は、左の形態變化に於て行はれる。

商品——貨幣——商品

W — G — W

其の實質的方面から觀察すれば、此運動は $M—M$ 即ち商品と商品との交換であり、社會的勞働の代謝機能であつて、此代謝機能の結果に於て、全行程その者が消滅してしまふのである。

W—G(商品の第一轉形、即ち販賣)。商品價値が、商品體から金へ飛躍するのは、予が他の何處かでも言つた如く商品の命がけの飛躍⁽⁴⁶⁾である。若し此飛躍が失敗に終るときは、商品は害されまいが、然し商品所有者は確かに害される。⁽⁴⁷⁾

社會的分業は、彼れの欲望を多方面ならしめると同じように、また其の労働を一局面に偏せしめる。さればこそ、彼れの生産物は彼れに取つてたゞ交換價值として役立つに過ぎぬのである。然るに此生産物は、たゞ貨幣に於てのみ社會的に妥當なる普遍等價形態を受けるのである。所が貨幣は他人の懐にある。そこで貨幣を他人の懐から引き出す爲には、商品は先づ第一に、貨幣所有者に取つて使用價值でなければならぬ。随つてそれに支出された労働は、社會的に有用な形態で支出されたものでなければならぬ。換言すれば、社會的分業の一枝體たる實を現はすものでなくてはならぬ。然るに分業は、一の原生的生産有機體⁽¹⁹⁾であつて、其纖維は生産者の背後で織られたものであり、又引つゞき織られてゆくものである。恐らく、其商品は、一の新たに生じた欲望を充たすを標榜するか、或は自らの力を以つて新たなる一欲望を喚び起そうとする新らしき労働方法の産物であろう。昨日までは同一の商品生産者の多くの職分の中の一であつた特殊の一作業が、今日は多分此聯絡から分離して獨立し、而して其故を以つて其局部的生産物を獨立の商品として市場に送ることもあろう。四圍の事情は斯くの如き分離行程に對し

て熟してゐる場合もあろうが、また未熟の場合もあろう。生産物は今日、一の社會的欲望を充たしてゐるが、明日は多分他の類似の生産物種類に依つて、全然或は一部分、其地位を奪はれることもあろう。リンネル織工のその如き労働は社會的分業の公認された肢體⁽²⁰⁾であるとしても、それ丈では二十ヤールのリンネルの使用價值が端的に確保されてゐる譯ではない。若しリンネルに對する社會的欲望が、それは他の總ての欲望と同じく、一定の限度を有してゐる既に他の競争リンネル織工に依つて飽實されてあるならば、我等の友人(リンネル工)の生産物は過多となり、餘分となり、斯くして無用のものとなつて了ふ。貰つた馬なら口中を檢めぬと云ふ諺があるが⁽²¹⁾、我がリンネル織工は贈物をする爲に、市場に入り込むものではない。然し彼れの生産物が其使用價值たる實を現はし、それに依つて貨幣が商品に引寄せられるとして見よ。それにしても今度は、幾許の貨幣かと云ふ問が起る。之れが答は固より既に、商品の價格の中、即ち其價值の大小の代表者の中に豫想されてゐる。我々は商品所有者側の萬一の純主觀的な誤算を問題外に置く。それは市場で忽ち客觀的に訂正される。彼は其生産物に對して、たゞ社會的に必

要な平均分量の労働時間のみを支出した筈である。かくて商品の価格は其商品に體現してゐる社會的労働量の貨幣名に外ならぬものである。然るに我がリンネル織工の許諾なしに、又其背後に於てリンネル織業の舊來の生産諸條件は激動に陥る。昨日までは、リンネルヤーの生産に對して疑ひもなく社會的に必要な労働時間であつたものが今日は最早そうでなくなる。それは貨幣所有者が我々の馴染のリンネル織工の種々なる競争者の價格表について熱心に證明する通りである。我がリンネル織工に取つて不幸なことには、此世には彼の外に尙多數のリンネル織工が存在してゐるのである。(49)

最後に市場に存するどのリンネルも、只だ社會的に必要な労働時間のみを含むものと假定して見よ。それでも尙之れらのリンネルの總和は餘分に支出された労働時間を含み得るのである。若し市場の胃腑がリンネルの總量を一ヤーに付き二志の標準價格で吸収することが出来ないとするれば、それは詰り社會的總労働時間の餘りに大きな部分がリンネル織業の形で支出された事を證明する。其結果は取りも直さず個々のリンネル織工が其個人的生産物に對して社會的に必

要なる労働時間よりも以上のものを用ゐたのと同じである。諺に、共に捕はれた者は共に蹴られるとは、此事である。市場に存する總てのリンネルは、つまり一箇の商品として働き、リンネルの一つ一つは其割切れる個數に分たれた部分として動く。そしてまた事實に於て、夫々一ヤーの價値は、同じ種類の人間労働の社會的に一定された同じ分量の體化に外ならないのである。(50)

誠に商品は貨幣を戀してゐる。然しながら「まことの戀路は決して滑らかではない」(51)。社會的生產有機體は、其散亂せる諸肢體を分業組織に於て表現するものであつて、此の生産有機體の量的編成は其の質的編成と同じく、原生的に偶然のものである。かくて我が商品所有者等は、自身を獨立の私的生産者たらしめる、其同じ分業が又社會的生產行程及び其行程に於ける彼等相互の關係を、彼等自身より獨立ならしめること、並に人々の相互獨立性が、全般的な物的相互倚屬の一組織に於て補はれることを發見する。(51)

分業は労働生産物を商品化し、それに依つて労働生産物の貨幣化を必要ならしめる。同時にまたそれは、此變質作用(52)の成功すると否とを偶然的たらしめる。

然し茲では現象を純粹に觀察しなければならぬ。随つて我々は、其常規の進行を假定しなければならぬ。尙また此現象が兎も角進行する場合、即ち商品が賣れなく無い場合には、其形態變化に於て實體—價値の大小—は變則的に失はれたり附かへられたりするであらうが、それでも此形態變化は常に行はれるのである。⁽⁵²⁾一方の商品所有者にとつては、金が其商品に代り、他方の商品所有者にとつては商品が其金に代る。此際に於ける明白な現象は、商品と金、即ち二十ヤールのリンネルと二磅の金貨とが其所有者或は位置を換へることである。即ちそれらの物の交換である。然し商品は何と交換されるか。曰く、それ自身の普遍價値姿容と。又貨幣は何と交換されるか。曰く、其使用價値の一特殊形態と。何故に金は貨幣としてリンネルと對立するか。曰く、二磅と云ふリンネルの價格、即ちリンネルの貨幣名は既に貨幣としての金にリンネルを繫依せしめてゐるからである。商品が其本來の商品形態を脱却するのは其讓渡に依るのである。即ち其使用價値が價格に於て單に假想的にのみ存してゐた金を、實際に吸引する瞬間に於て行はれるのである。故に商品の價格即ち其單に觀念上のみの價値形態の實現は、同時に

反對に貨幣の單に觀念上のみの使用價値の實現である。即ち商品の貨幣化は同時に貨幣の商品化である。斯くて單一の行程は二重の行程である、即ち商品所有者の極からは販賣であり、貨幣所有者の反對極からは購買である。換言すれば、販賣は購買であり、W—Dは同時にD—W^(六十六)である。⁽⁵³⁾

〔六十六〕總ての販賣は購買である。』ドクトル・ケネー著『商業及び手工業者労働に關する問答』デール編フキジオクラット(ギョーマン全集)第一部、巴里、一八四六年刊第一七〇頁⁽⁵³⁾或は又ケネーが其『一般原理』⁽⁵⁴⁾に於て言つたやうに『賣ることは買ふことである。』⁽⁵⁴⁾

我々は之れ迄、商品所有者等の關係、即ち彼等が自身の労働生産物を手放すことによつてのみ他人の労働生産物を收得する關係を外にしては、人類の何等の經濟的關係を知らなかつた。即ち一方の商品所有者に對して他方の商品所有者は、其労働生産物が本來貨幣形態を具備してゐるか、即ち金などの如き貨幣材料であるか、さもなければ彼れ自身の労働生産物は、既に脱皮して其本來の使用價値形態を剥ぎ捨てたかの理由に依つてのみ貨幣所有者として對立することが出来るのである。貨幣として働く爲には、金は言ふ迄もなく、何等かの點に於て商品市場に踏

み入らなくてはならぬ。此點は金の產出場所に存し、此場所に於て、金は直接の勞働生産物として、同じ價値の他の勞働生産物と交換される。が、この時以後、金は常に實現せられたる商品價格を代表する(六十七)。(55)

(六十七)「商品の價格は、他の一商品の價格に依りてのみ支拂はれ得る。『メルシェード・ラ・リヴキエール』著『政治的社會の自然的及び必然的秩序』デール編フキジオクラット(ギョーマン全集)第二部、第五四頁(56)」

金が其の產出場所に於て他商品と交換されると言ふことは別として、金は如何なる商品所有者の掌中に於ても、彼れが讓渡した商品の外皮を脱ぎ棄てた姿容である。販賣、即ち第一の商品轉形M—Dの所産である(六十八)。他の總ての商品が金で其の價値を測り、斯くして金をそれらの商品の使用價値形態の觀念上の對抗物たらしめ、其の價値容姿たらしめたが故に、金は觀念上の貨幣、即ち價値尺度となつたのである。そして諸商品が其全般的の讓渡に依つて金をそれらの商品の實際に外皮を脱ぎ棄てた、或は轉化した使用價値形態たらしめ、斯くして其實際の價値容姿たらしめるが故に、金は現實の貨幣となる。商品は其價値姿容に於て、その原

生的使用價値及び其根原たる特殊の有用勞働の、一切の痕跡を抹殺してしまふ。それは、みづから無差別なる人間勞働の一律的な社會的體現に蛹化する爲めである。(57)

(六十八)「此貨幣を得るには、先づ賣らなければならぬ。」(右書第五四三頁)(58)

されば我々は貨幣を眺めても、それに轉形した商品が何んな風なものであるかを知ることには出來ぬ。商品は、其貨幣形態に於て、どれも之れも皆同じやうに見える。されば塵芥は貨幣ではないが、貨幣は塵芥であり得る。我がリンネル織工が其商品を讓渡して得る二箇の金貨は、小麥一クオターの轉形した姿容だと假定しよう。リンネルの販賣M—Dは、同時に其購買D—Mである。然しリンネルの販賣として此行程は、其反對即ちバイブルの購買を以て終る一の運動を始める。リンネルの購買としてそれは、其反對即ち小麥の販賣を以て始めた運動に終る。W—D—W(リンネル—貨幣—バイブル)の第一段たるW—D(リンネル—貨幣)と同時にD—W(貨幣—バイブル)即ちW—D—W(小麥—貨幣—リンネル)なる他の一運動の最終段である。一商品の第一轉形、即ち其商品形態より貨幣への轉形は、いつも同時に他

の一商品の第二の反対な形、即ち其貨幣形態より商品への再轉形である〔六十九〕。〔59〕

〔六十九〕前にも言ふ如く、金或は銀の生産者は例外である。彼れは前以て販賣することなしに、其生産物を他商品と交換するからである。〔60〕

Q—W(商品の第二若しくは最終轉形、即ち購買) 貨幣は他の總ての商品の外皮を脱したる姿容、即ちそれら諸商品の一般的讓渡の所産であるが故に、絶對無條件的に讓渡し得る商品である。それは、總ての價格を品名に向つて逆に讀み、斯くしてそれ自身の商品化に對する忠實な材料としての總ての商品體の中に自己を反映する。同時に價格、即ち商品が貨幣に向つて送る秋波は、貨幣の轉形能力の制限、即ち貨幣自身の分量を示すものである。商品は貨幣となるに及んで消滅するものであるから、我々は貨幣を見て、それが如何にして其所有者の手に歸したか、或は何がそれに轉化したかを知ることは出來ぬ。それは何處から來たものにもせよ、其出處は分らぬ。それは一方に於て販賣された商品を代表し、他方に於ては購買せらるべき商品を代表してゐる。〔61〕

〔七十〕「我々の手中にある貨幣が、我々の買はんとする物を代表するならば、それは又、此

貨幣を得る爲に我々の賣つた物を代表するのである。」(メルシエード・ドラ・リグキエール
前掲書第五八六頁)〔62〕

Q—W 即ち購買は、同時に W—Q 即ち販賣である。つまり一商品の最後の轉形は、同時に他の一商品の最初の轉形である。我がリンネル織工に取つては、其商品の生涯は彼れが二磅を再轉形せしめたバイブルを以て結了する。所が此バイブルの販賣者は、右のリンネル織工から受取つた二磅をブランドーに變へる。茲に於て、W—Q—W(リンネル織工—ブランドー—リンネル織工)の最終轉形たる Q—W は、同時に W—Q—W(ブランドー—織工—ブランドー—織工)の第一段たる W—Q である。商品生産者は單に一方に偏した商品のみを提供するので、屢々それを多量に賣る。然るに彼れの欲望は多方面であるから、彼れは實現した價格即ち賣上げ貨幣額を、常に多數の購買に分割することを餘儀なくされる。かくて一の販賣は、種々なる商品の多數の購買に流入れる。斯様にして一商品の最終轉形は、他の諸商品の第一轉形の總和を成すのである。〔63〕

そこで一商品、例へばリンネルの總轉形を觀察すると、我々は先づ之等の轉形が、

對向し且つ互に補充し合ふ二の運動、即ちM—C及びC—Mより成るを見る。此の二の對向する商品轉形は、商品所有者の二の對向せる社會的行程に於て行はれ、商品所有者の二の對向する經濟的性質の中に反映する。彼れは販賣を爲る人としては販賣者となり、購買を爲る人としては購買者となる。然るに商品の總ての轉形に於て、商品の兩形態たる商品形態及び貨幣形態が同時に、然したゞ對立した兩極に於てのみ存在すると同じように、同一の商品所有者に對し、販賣者としての場合には、他の購買者が對立し、購買者としての場合には、他の販賣者が對立する。同一商品が、二つの反對な轉形を順次に經過すると同じく、即ち商品より貨幣となり、又貨幣より商品となると同じく、同一商品所有者は、販賣者と購買者との役を取りかへる。故に此の販賣者購買者の役は、決して固定したものでなく、商品流通の内部に於て絶えず其演者を變へるものである。^[64]

一商品¹の總轉形は、其最單純なる形態に於て、四箇の極と、三名の登場人物とを假定する。先づ商品に向つて、貨幣が其價值姿容として現はれる。此價值姿容は先方なる他人の懷中に硬き實在性を有してゐる。かくて商品所有者に一の貨幣所

有者が對立して來るのである。そこで商品が貨幣に轉形するや否や、貨幣は商品の一時的の等價形態となる。此の等價形態の使用價值即ち内容は、此方に、他の諸商品體の中に存してゐるのである。第一の商品轉形の終點として、貨幣は同時に其第二の商品轉形の起點である。かくて第一取引での販賣者は、第二取引での購買者となり、此の第二取引では、第三の商品所有者が販賣者として彼れに對立して來る。^[65]

(七十一)「故に…四個の終點と三名の契約者とがあつて、其の契約者の一人は二度登場する」(ルトローヌ前掲書第九〇八頁)^[66]

商品轉形の二つの反對な運動階段は、一の循環運動⁽⁶⁷⁾を形成する。即ち商品形態、商品形態の脱棄、商品形態への復歸是れである。勿論此の場合、商品自體は對立的に決定されてゐる。起點に於ては、それは其所有者に對して非使用價值であり終點に於ては使用價值である。斯様に、貨幣は先づ商品が轉化して行く所の固き價值結晶として現はれ、後には商品の單なる等價形態として溶解してしまふのである。^[67]

一商品の循環運動を成す二つの轉形は、同時に、他の二商品の反対な部分的轉形を成すのである。同一の商品(リンネル)はそれ自身の諸轉形の列の發端をなし、他の一商品(小麥)の總轉形の結末をなす。それは其第一轉形、即ち販賣に於て、自身で右の二つの役を演ずるのである。之れに反して、それ自身が免れ難き運命として轉化してゆく所の金の蛹(5)としては、それは同時に他の第三商品の第一轉形を結了せしめる。されば各商品の轉形列が書く循環運動は、他の諸商品の循環運動と解け難く絡み合つて居る。此全行程は商品流通(6)として現はれる。[68]

商品流通は單に形式上のみでなく、本質上にも直接の生産交換と異なるものである。今其經過に一瞥を與へ見よ。リンネル織工は無條件でリンネルをバイブルと交換した。即ち自身の商品と交換した。然し此現象は只彼にのみ眞實のことである。涼しいよりも暑い方を好むバイブル屋は、恰もリンネル織工が自己のリンネルに對して小麥の交換されたとを知らないのと同じく、バイブルをリンネルと交換しようとは考へなかつた。Bの商品はAの商品と入れ換はる。然しAとBとは交互に其商品を交換するのではない。勿論A、Bが交互に買ひ合ふ場合もあ

り得る。然し斯くの如き特別の關係は、決して商品流通の一般的關係によつて條件づけられるものではない。此場合我々は、一方には、商品交換が如何に直接生産物交換の個人的及び地方的制限を打ち破つて人間労働の代謝機能を發展せしむるかを見る。他方に、當事者の統御し得ざる諸々の社會的自然關係の渾然たる一體が發展して來る。農夫が小麥を賣つたからこそ、リンネル織工はリンネルを賣ることができ、リンネル織工がリンネルを賣つたからこそ、性急屋はバイブルを賣ることが出来、性急屋が前以て永生の水(バイブル)を賣つて居ればこそ、釀酒屋は焼いた水(燒酒即ちブランデー)を賣ることができるのである。以下之れに準ず。故に流通行程は、直接の生産物交換のように、使用價值の位置或は所有者變化に依つて消失しない。貨幣は結局一商品の轉形列から脱出すると云ふ譯では消滅しない。それは絶えず、商品の去つた後の流通場所に沈澱する。例へばリンネルの總轉形ヒルミマーに於て、先づリンネルは流通行程より脱け去り、貨幣が其跡に座つて、それからバイブルは流通行程より脱出し、貨幣が之れに代る。商品を以てする商品の代置は、同時に第三者の手に貨幣商品を取附かせる(七十二)。流通

は不斷に貨幣を發汗するのである。(69)

(七十二) 第二版註。此現象は自明の事であるにも拘はらず、大抵の場合、經濟學者から、殊に自由貿易俗論者から見逃がされてゐる。(70)

總ての販賣は購買であり、總ての購買は販賣であるが故に、商品流通は賣買の必然的な平衡を條件づけると云ふ獨斷ほど愚なるはない。若し此意味が、實際に行はれる販賣の數は購買の數と同じだと云ふのであるならば、それは平凡な重語である。然し其本當の意味は、販賣者が自己の購買者を市場に伴ひゆくと云ふことを證明する點にある。所が販賣と購買とは、兩極的に對立した二人者、即ち商品所有者と貨幣所有者との間の交互關係としては同一の行爲である。之れに反して、同じ一人の行爲としては、それは兩極的に對抗した二行爲をなす。故に販賣と購買との同一性は、商品が流通の鍊金レトルト中に投ぜられてから貨幣として其處を出で來なければ、即ち商品所有者に依つて賣られ、隨つて貨幣所有者に依つて買はれなければ、其商品は無用になると云ふことを含んでゐる。右の同一性は更らに、交換行程の行はれたる場合、其れは或は長く、或は短く續き得る商品の生涯の一

節たる一の休止期を成すと云ふことを含んでゐる。

商品の第一轉形は同時に販賣であり購買であるから、此部分的行程は同時に獨立の行程である。購買者は商品を有し、販賣者は貨幣即ち其再び市場に出現する時の早い晚いに拘らず、流通可能の形態を確保する一商品を有してゐる。誰にしる、他人が買はないでは賣り得ない。然し誰れにしるみづから賣つたからとて直ちに買ふとを要しない。流通は正に、生産物交換の場合に存する自己の勞働生産物を手放すと、他人の勞働生産物を手に入れることとの間の直接の合致をば、互に對向する販賣と購買との對立に分裂せしむるとに依つて、生産物交換の時間的場所的及び個人的制限を打破するのである。獨立的に互に對向し合つた行程が一の内部的統一をなすと云ふとは、それらの行程の内部的統一が、外部的對立の中に動いてゐると云ふと、異ならない。内部的に非獨立なる互ひに補充し合ふが故に、諸行程の外部的獨立化が或る點まで進むと、右の統一は一の恐慌に依つて威壓的に自己を貫徹する。商品に内在する使用價值と價值との對立、私的勞働が同時に直接に社會的なる勞働として表章されねばならぬと云ふ矛盾特殊の具體的

労働が同時に只抽象的に一般なる労働として働くと言ふ矛盾物の人化と人の物化との對立——凡そ之等の内在的矛盾對立は、商品轉形の對立に於て、其發達したる運動諸形態を與へられる。されば之等の運動形態は、恐慌の可能を然り只その可能のみを包含する。此可能が事實に發展する爲には、單純なる商品流通の立場からは尙いまだ全く存在せざる諸關係の一體を必要とするのである(七十三)。(71)

(七十三)ゼームス・ミルに關する予の述説『經濟學批評』第七四—七六頁(72)を参照せよ。此場合、辯證的經濟學の研究方法に特徴的な二の點がある。第一は、商品流通と交換との差異を無造作に抽象し去ることに依つて、双方を同一視すること。其二は、資本制生産に従事する人々の關係を、商品流通から生ずる單純なる關係に歸せしめることに依つて、資本制生産行程の諸矛盾を否定し去らうとする企て是れである。然るに商品生産と商品流通とは種々なる範圍と重要とに於いてとはいへ、種々様々の生産方法に屬する現象である。故に之等の生産方法に共通な、商品流通の抽象的諸範疇のみを知つてゐるのでは、我々はまだく其れら生産方法の特殊の差異に就て何も知らず、隨つてそれらを批判することは出来ぬのである。經濟學以外如何なる科學に於ても、分り切つた平凡な事を、斯くまで大仰にすることの専ら行はれてゐるものはない。例へば、ジャン・バチスト・セーは、商品が生産物であることを知つてゐると云ふ譯で、敢て恐慌について審判を爲す資格ありと自任して居る。(73)

商品流通の仲介者として貨幣は流通要具たる職分を受ける。

b 貨幣の通用(74)

労働生産物の代謝機能が依つて行はれる形態變化、即ちM—D—Mは、同一の價値が商品として此行程の起點を成し、商品として同一點に轉歸することを必要とする。故に商品の此運動は循環運動である。他方に於て、此同じ形態は貨幣の循環運動を除外する。此形態の結果は、貨幣が絶えず其起點から遠ざかることであつて、其所へ轉歸することではない。販賣者が其商品の轉化したる姿容、即ち貨幣を固く握つて手放さぬ間は、商品は第一轉形の段階に止まつてゐる。即ち其流通の前半を了つたに過ぎぬのである。然し買ふ爲に賣ると云ふ行程が完了するならば、貨幣は復た其最初の所有者の手から遠ざかつてゆく。(75)

勿論、リンネル織工がバイブルを買つた後に、新たにリンネルを賣るときは、貨幣はまた彼れの手に戻つて来る。然しそれは最初の二十ヤールのリンネルの流通に依つて戻つて来るのではない。此流通に依つて貨幣は寧ろリンネル織工の手からバイブル屋の手中に遠ざかつて行つたのである。貨幣は只新たな商品に

對して前と同じ流通行程が新たになされ、或は繰返へされることに依つてのみ戻つて来て、又前と同じ結果を以て終るのである。されば、商品流通に依つて直接貨幣に與へられる運動形態は、貨幣が絶えず起點より遠ざかることである。即ち一の商品所有者の手から、他の商品所有者の手中に流れ込むことである。換言すれば其通用⁽⁷⁶⁾である。⁽⁷⁶⁾

貨幣の通用は、同一行程の不斷の單調な反覆を示す。商品は常に販賣者の側に立ち、貨幣は常に購買要具⁽⁷⁷⁾として、購買者の側に立つ。貨幣は商品の価格を實現しつゝ、購買要具として働くのである。それは価格を實現することに依つて、商品を販賣者の手から購買者の手に移轉し、同時にそれ自らは購買者の手から販賣者の手に遠ざかつてゆき、かくて他の一商品と同じ行程を繰返すのである。貨幣運動の此一面的形態が、商品の兩面的形態運動から生ずることは蔽ひ隠されてゐる。商品流通の性質そのものが反對の外觀を生ずる。商品⁽⁷⁸⁾の第一轉形は常に貨幣の運動としてのみでなく、商品自身の運動としてのみ目に見える。商品⁽⁷⁸⁾は其流通の前半に於て、貨幣と位置を換へる。それと同時に、其の使用價值形態は流通界

から脱出して、消費に入り込む⁽⁷⁴⁾。そしてその價值姿容即ち貨幣的假面が、其の後に座るのである。⁽⁷⁷⁾

(七十四) 商品が幾度も幾度も賣られる場合は、茲ではまだ存して居らぬ現象であるが、そう云ふ場合でも尙商品は最後のそれきりの販賣と共に、流通の範圍を脱して消費の範圍に入り、其處で生活資料としてなり、或は生産機關としてなり役立つのである。⁽⁷⁸⁾

其流通の後半を商品はもはやそれ自身の自然外皮に依つてではなく、其貨幣外皮に於て通過する。かくて運動の連續は全然貨幣に歸し、商品に取つて二つの對抗せる行程を含む同一の運動は、貨幣自身の運動としては常に同一の行程、即ち次々の商品との其位置轉換を含むのである。

されば商品流通の結果、即ち或る商品が他商品に取つて代ることは、それらの商品自身の形態變化に依つては、流通要具としての貨幣の機能に依つて仲介されるかに見える。其貨幣はそれ自體としては運動しない商品を流通せしめ、それを非使用價值として存する人の手から、使用價值として存すべき人の手に移轉する。そしてそれは常に、貨幣自身の運動とは反對の方向になされるのである。

貨幣は絶えず商品を流通界から遠ざけつゝみづからは絶えず商品に代つて其流通内の位置を占め、かくして自分の起點から遠ざかつてゆく。されば貨幣運動は商品流通の表章に過ぎぬものであるが、商品流通の方が、却つて貨幣運動の結果に過ぎないように見える(七十五)。(79)

(七十五)貨幣は生産に依つて刻み付られる運動の外に、何等の運動をも有して居らぬ。』
(ルトローマ前掲書第八八五頁)(80)

「他方に於て、貨幣は商品の獨立した價值であるが故にのみ、それに流通要具たる職分が屬するのである。故に流通要具としての貨幣の運動は、實は商品自身の形態變化運動に外ならぬのである。されば此事はまた貨幣の通用の中に明かに反映されなければならぬ。」

斯くて例へば、リンネルは先づ其商品形態を其貨幣形態に轉化する。然る後にリンネルの第一轉形M-Iの最後の極である貨幣形態は、その第二轉形Q-I-M即ち其バイブルの再轉形の最初の極となる。然し此二つの形態變化の各は、商品と貨幣との交換、即ち其相互の位置轉換に依つて行はれる。同一の貨幣は、商品の外

皮を脱した姿容として販賣者の手中に來たり、商品の絶對無條件に讓渡され得る姿容として其處を去る。つまりそれは二度その位置を換へるのである。即ちリンネルの第一轉形は此貨幣を織工の懷中に運び入れ、其の第二轉形は再びそれを其處から運び去る。斯くて同一商品の二つの對抗した形態變化は、互に反對の方向へ向つてする貨幣の兩度の位置轉換に反映するのである。(81)

之れに反して、たゞ一面的の商品轉形のみが、即ち單なる販賣にしる或は購買にしる、何方でもが行はれる場合には、同一の貨幣はたゞ一回だけしか位置を轉換しない。其二度目の位置轉換は、常に商品の第二轉形、即ち其貨幣からの再轉形を表章するのである。同一貨幣の位置轉換の頻繁なる反覆の中には、單一商品の轉形列のみでなく、又た商品界全般の數知れぬ轉形の纏れが反映される。但し此は總て、茲に考究する單純商品流通の形態にのみ當て嵌ることは、言ふまでもない。(82)

各商品は最初流通界に入り込む際に、即ち其最初の形態變化の際に流通から脱出し、常に新なる商品が其れに代つて流通内に入り込んで來る。之れに反して貨幣は流通要具として絶えず流通界に止まり、絶えず其内を駆け巡る。かくて、流通

界は常に幾許の貨幣を吸収するかと云ふ問題が起つて来る。(83)

一國內に於ては、日々多數の同時的な、随つて空間的に相並んで進行する一面的商品轉形が行はれてゐる。換言すれば即ち、一方からは單なる販賣、他方からは單なる購買が行はれてゐる。商品は其價格に於て既に、一定の假想された貨幣量と等しくされてゐる。所で、茲に考究した直接の流通形態は、常に商品と貨幣とを相互對立させる(一方を販賣の極に置き、他方を購買の對極に於て)ものであるから、商品界の流通行程に必要な流通要具の分量は、既に諸商品の價格の總和に依つて決定されてゐる。誠に貨幣は、諸商品の價格總額に於て既に觀念的に表章されてゐる金總額を、現實的に表現するものに過ぎないのである。されば此の二つの總額の等しいものであることは自明である。(84)

然し我々は諸商品の價值が不變のまゝである場合、其價格は金即ち貨幣材料の價值そのものと共に變動することを知つてゐる。即ち金の價值が下落すれば、それと同比例を以て騰貴し、金の價值が昂騰すれば、それと同比例を以て下落するものであることを知つてゐる。諸商品の價格總和が斯様に上るか下るかするにつ

れて、流通貨幣の分量はそれと同じ比例で上るか下るかしなければならぬ。流通要具の分量上の變化は、此場合たしかに貨幣其ものから生ずるが、然し流通要具としての貨幣の職分からではなく、價值尺度としての其職分から生ずるのである。

諸商品の價格は、先づ貨幣の價值と逆比例して變化し、それから流通要具の分量は諸商品の價格と正比例して變化する。(85)

例へば金の價值が低落するのでなくて、銀が價值尺度として金に代り、或は銀の價值が昂騰するのでなくて、金が價值尺度の職分から銀を逐ひ出す場合にも、右と全く同じ現象が生ずるであらう。即ち前の場合に於ては、從來の金よりも多くの銀が流通し、後の場合に於ては、從來の銀よりも少き金が流通せねばならぬであらう。いづれの場合に於ても、貨幣材料、即ち價值尺度として働く商品の價值は變動するであらう。随つて諸商品價值の價格表章並に之等の價格の實現に役立つ流通貨幣の分量が變動したであらう。(86)

我々は商品の流通界には一の穴があつて、其處から金(或は銀、略言すれば貨幣材料)が與へられたる價值の商品として流通界に入り込むことを知つた。此價值は

價值尺度としての貨幣の職分の、随つて價格決定の際に前提されてゐる。そこで例へば、價值尺度の價值その者が低落すると、それは先づ、貴金屬の產出場所に於て商品としてのそれらの貴金屬と直接交換される諸商品の價格變動の中に現はれる。特に、ブルジョアの社會の發達幼稚なる状態に於ては、他の諸商品の大部分は尙ほ久しい間、價值尺度の今では空幻化し陳腐化してゐる價值に依つて評價されるであらう。然し一の商品は他の商品に對し、其相互の價值關係によつて影響を及ぼすので、諸商品の金價格或は銀價格は、その價值その者に依つて決定された比例に於て次第に一致し來たり、遂には總ての商品價值が、貨幣金屬の新價值に準じて評價されるようになる。⁽⁸⁷⁾

この一致化の行程は、自身と直接に交換された諸商品に代つて流入し來たる貴金屬の不斷の増大に伴ふものである。故に諸商品の訂正された價格附與が普及し、或はその價值が金屬の低落したる、又た或點迄は引つゞき低落しつゝある新價值に準じて評價されるのと同じ度合に於て、また諸商品の價值の實現に必要なだけの其金屬の追加分量は、既に存在して居るのである。新なる金銀産源の發見に

伴ふ諸事實に對する偏した觀察は、十七世紀及び特に十八世紀に於て、より多くの金銀が流通要具として働いた故に、一般商品價格が昂騰したのであるといふ誤れる結論に導いた。以下金の價值を一定してゐるものと、價格評騰の瞬間に於て實際それが一定してゐる如く假定する。

斯くて此假定のもとに、流通要具の分量は、諸商品の實現せらるべき價格總量に依つて決定されてゐる。そこで更に各商品種類の價格を一定せるものと假定すれば、諸商品の價格總量は明かに流通内に存する諸商品の分量に懸つてゐる。例へば一クオターの小麦が二磅に價するとすれば、百クオターは二百磅に價し、二百クオターは四百磅に價すること、即ち小麦の販賣の際にそれと位置を轉換する貨幣分量は、小麦の分量と共に増大しなければならぬと云ふことを理解するには、格別腦漿を絞るにも當らないのである。⁽⁸⁸⁾

諸商品の分量が與へられてゐると假定すれば、流通貨幣の分量は諸商品の價格動搖に準じて増減する。それは、諸商品の價格總量が諸商品の價格變動の結果として増減するが故に、増減するのである。それには決して總ての商品の價格が同

時に騰落することを要しない。或場合にはいくつかの主なる商品の價格昂騰だけで、他の場合には其價格低落だけで、總ての流通商品の實現せらるべき價格總量を増減せしむるに足り、随つて又より多くの或はより少しの貨幣を流通内に運び入れるに足るのである。諸商品の價格變動が實際の價值變動を反映するにしても、或は市場價格の單なる動搖を反映するにしても、流通要具の分量に及ぼす影響は同じに止まつてゐる。⁽⁸⁹⁾

假りに何件かの聯絡なき、同時的な、随つて空間的に相並んで進行する販賣、即ち部分轉形、例へば一クオターの小麥、二十ヤールのリンネル、一冊のバイブル、四ガロンのブランドー等のそれが行はれるとせよ。今この各商品の價格が二磅、随つて其實現せらるべき價格總量が八磅とすれば、八磅と云ふ貨幣分量が流通内に入り込まなければならぬ。之に反して若し以上の諸商品が、我々に知られてゐる轉形列、即ち一クオターの小麥—二磅—20ヤールのリンネル—二磅—一冊のバイブル—二磅—四ガロンのブランドーの各部分を成すとすれば、二磅はこれらの色々な商品を順次に流通せしめ、順次其價格を實現し、随つて又其八磅と云ふ價格總量をも實

現して、結局釀酒家の手中に落ちつくことになる。これは四回の通用をするのである。同一貨幣の斯様に反覆された位置轉換は、商品の二重の形態變化即ち二の反對した流通段階を通じての其運動と、種々なる商品の諸轉形の纏れとを表現する^(七十六)。此行程が通りぬける所の、對立した互ひに補充し合ふ諸階段は、空間的に並び合ふことが出来ず、只だ時間的に前後し合ふことが出来るのみである。されば諸々の期間が此行程の繼續の尺度をなす。或は一定時間に於ける同一貨幣の通用回数が貨幣通用の速度を測るのである。今右の四商品の流通行程が例へば一日間繼續するとせよ。然るときは實現せらるべき價格總量は八磅、而して一日間に於ける同一貨幣の通用度数は四回流通貨幣の分量は二磅である。即ち、流通行程の一定期間内に對しては、
諸商品の價格總額 = 流通要具として働く貨幣の分量
同額面貨幣の通用回数

(七十六) 『貨幣に運動を賦與し、それを通用せしむるものは生産である。……運動(貨幣の)の速度は其分量を償ふ。貨幣を要する場合には、之れを一人の手から他の一人の手に片時も停滯させないで送り込ませれば宜しい』(ルトローヌ前掲書第九一五頁、及九一六頁)⁽⁹⁰⁾

此法則は一般に當て嵌る。

一定期間内に於ける一國の流通行程は固より、一方に於て、多數の分散せる、同時的な、空間的に並び合ふ諸々の販賣(或は購買)即ち諸々の部分轉形を包含する。此部分轉形に於ては、同一貨幣は只だ一回だけ位置を轉換する、或は只だ一回の通用をするに過ぎぬ。他方に於て其流通行程は、一部分は並行し、一部分は互ひに纏れ合ふ所の、多かれ少なかれ關節組織に編成された多數の轉化列を包含する。之らの轉化列に於ては、同一貨幣が多かれ少かれ數多き通用をする。然し流通内に存する總ての同額面貨幣の通用の總回數から、個々貨幣の通用の平均の回數、若しくば貨幣通用の平均速度が判明する。例へば日々の流通行程の始めに其行程内に投入される貨幣分量は、勿論時を同じうして、又空間的に相並んで流通する諸商品の價格總量に依つて決定される。然し此行程の内部に於ては、一の貨幣は謂はゞ他の貨幣に對して責任を負はされる。一方が其通用速度を疾めると、他方は其れを緩められるか、或は全く流通界から脱出してしまふ。なぜならば、流通界はたゞ其個々の要素の平均通用回數を乗ずると實現せらるべき價格總量に等しい金分量だけを吸収し得るに過ぎぬからである。故に個々の貨幣の通用回數が増加

すれば、其流通分量は減少するも、之れに反して其通用回數が減少すれば其分量は増大する。流通要具として働き得る貨幣の分量は、一定の平均速度に於ては一定してゐる故に、流通内から例へば一定數の磅金貨を驅り出すには、それと同じ量の磅紙幣を其處へ投げ入れさへすれば善い。之れは總ての銀行熟知の遣り方である。^[91]

貨幣通用の中には、一般にたゞ諸商品の流通行程のみ、即ち反對した諸轉形を通じての其循環運動のみが現はれるのと同じように、貨幣通用の速度の中には諸商品の形態變化の速度や、諸々の轉形列の連續した纏れ合ひや、社會的代謝機能の迅速さや、流通行程からの諸商品の急速なる消滅や、及び新たな商品をして其れら諸商品の同様に急速なる代置などが現はれる。かくて貨幣通用の速度の中には、對抗し互に補充する諸階段、即ち使用價值の姿より價值の姿への轉化、及び價值の姿より使用價值の姿への再轉化、換言すれば賣買兩行程の、圓滑な一致が現はれる。之れに反して貨幣通用の緩漫の中には、これらの諸行程の分離及び對抗的な獨立化、形態變化の停滯隨つて代謝機能の停滯が現はれる。此停滯が何處よ

り生ずるかは、勿論流通その者の上に看取され得ない。流通はたゞ現象そのものを示すに過ぎぬ。貨幣通用の緩漫なると共に流通界の各所に於て貨幣の出沒が減少するのを見た通説が、此緩漫をば流通要具の分量不足を以て解釋するのはさもあるべき事である(七十七)。(92)

(七十七)「貨幣は……賣買の共通尺度であるので、何でも賣るべき物を持つてゐて而かもそれに對して行商人を得ることの出來ぬ人は誰でも、動もすれば王領内或は國內に於ける貨幣の缺乏が自分の財貨の捌けぬ原因であると考へる。斯くて貨幣の缺乏は世上一般の叫びである。が、之は大きな誤りである……貨幣を叫び求むるこれらの人々は何を要求してゐるか……農民は呟く……彼れは考へる。國內にモット貨幣があるならば、自分の財貨に對して價格が得られる筈である……即ち貨幣は彼れの要求する所てなくて、其穀類や、家畜等に對する價格がそれであるやうに見える。彼れはそれらの物を賣りたいのだが賣ることが出來ぬのである……彼等は何故、價格を得ることが出來ぬか……曰く(一)國內に穀類や、家畜が多過ぎるので、市場に赴く人々は多くは彼れと同じく販賣を要し、そして購買を要するものが減多にない事。(二)運輸に依る國外への販路が缺乏せる事……(三)消費の缺乏せる事。(例へば人々が貧困の爲め、其一家内に於て從來してゐただけは支出しない場合の如き)。之等三つの何づれか原因を成してゐる。故に農民の財貨を兎もかく捌かずものは、特殊貨幣の増加でなく、眞に市場

を壓迫する之れら三原因中の何れでもを除去することである……商人及び店主は亦同様にして、貨幣を要してゐる。即ち彼等は販路が缺乏してゐると云ふ理由で、其商品の捌け口を要してゐるのだ……一國民は富が一方から他方へと絶えず轉動する場合以上に繁榮するとは決してないのである。』(サー・ダドレー・ノース著『貿易論』倫敦一六九一年刊、第二一一五頁(93))。ヘレン・シュヴァンドの欺瞞的所論は、凡て左の點に歸着する。即ち商品の性質より生じ、隨つて又商品流通に於て現はれる諸矛盾は、流通要具の増加に依つて除去され得ると云ふのである。尙また、生産及流通行程の停滞を流通要具の不足に歸せしめるのが世人の幻想だからと云ふて、反對に、例へば『通貨調節』に就ての政府の不手際に基く流通要具の實際の不足が、斯くの如き停滞を呼び起し得ないとは結論されないのである。(94)

されば、各期間内に流通要具として働く貨幣の總量は、一方には流通商品界の價格總量に依つて決定され、他方には其の對抗的流通行程の流れの遲速如何に依つて決定されてゐる。右の價格總量の、どれだけの部分が同一貨幣に依つて實現され得るかは、實に此流れの遲速如何に懸るものである。然し又諸商品の價格總量は、各商品種類の價格に懸る如く、また其分量に懸つてゐる。ところが此の價格運動、流通商品量、最後にまた貨幣の通用速度なる三因子は、種々なる方向に又種々な

る關係に變化し得るものである。されば實現せらるべき價格總量隨つて又それによつて條件付けられる流通要具の分量は、多數の結合をなすのである。我々は茲では只、商品價格の歴史に於て最も重要な結合だけを數へることにする。⁹⁵商品價格がその儘である場合には、流通要具の分量は、流通商品の分量が増加するか、貨幣の通用速度が減少するか、或は其双方が共同的に作用するかによつて増大し得るのである。これと反對に、流通要具の分量は流通商品量が減少するか、或は流通速度が増大するかによつて減少し得るのである。

次に商品價格が一般に昂騰する場合には、流通商品の分量が其價格の昂騰と同じ比例で減少するか、或は流通商品量が不變の儘であるのに貨幣の通用速度が價格昂騰と丁度同じ速力で増大する時、流通要具の分量は其儘であり得る。流通要具の分量は、商品量が價格に比してより急速に減少するか、或は通用速度が價格に比してより急速に増大するかによつて、減少し得るのである。

商品價格が一般に低落する場合には、流通商品量が其價格の低落と同じ比例で増大するか、或は貨幣の通用速度が價格低落と同じ比例で減少する時、流通要具の

分量は其儘であり得る。それは、商品量が商品價格の低落よりも急速に増大するか、或は流通速度が商品價格の低落よりも急速に減少する場合には、増大し得るのである。⁹⁶

種々なる因子の諸變化は互に相殺し得るので、それらの因子が絶えず動搖してゐるに拘はらず、諸商品價格の實現せらるべき總額は變はらずにゐる。随つて流通貨幣量も變はらずにゐる。されば、殊に幾分長い期間を考慮する場合には、各國に流通する貨幣量が我々の一見豫期するであらうよりも遙かに不變的な平均水準を保つてゐること、及び此水準よりの逸離は、生産上並びに商業上の恐慌から、より稀には貨幣價值そのもの、變動から週期的に生ずる強烈な攪亂の場合を除き我々の一見豫期するであらうよりも遙に小さいものである事が見出される。⁹⁷

流通要具の分量が流通諸商品の價格總量及び貨幣通用の平均速度に依つて決定されると云ふ法則は(七十八)また、諸商品の價值總額及び其諸轉形の平均速度が一定してゐる場合には、通用貨幣材料の分量は其れ自身の價值に懸つてゐると云ふ様に言ひ現はされ得る。其反對に、諸商品價格が流通要具の分量に依つて決定

され、後者がまた一國に存在する貨幣材料の分量に依つて決定されると云ふ謬見(七十九)は、其の最初の代表者に於ては、諸商品は價格なしに、又た貨幣は價值なしに流通行程に入り込み、それから其の行程に於て商品價格の割切れる一部分が金屬堆積の割切れる一部分と交換されると云ふ、無味なる假定に根ざしてゐるのである(八十)。(98)

(七十八)「一國民の貿易を運轉するに必要な貨幣には或る分量と割合とがあるもので、それより多すぎたり少すぎたりするならば其の貿易は害はれるであろう。恰も小賣貿易に於て、銀貨を崩す爲に、また最小の銀貨を以てしては處理し得ないような計算にまでも必要なフアイジング銅貨の或割合があるやうに。……さて商業上必要なフアイジング銅貨の個數の比例が人民の頭數や、その取引の頻繁程度や、また主として最小銀貨の價值などから算出さるべきであると同じ様に、我貿易に必要な貨幣(金銀正貨)の割合は交換の頻繁程度及び支拂ひの大小から算出せらるべきである。」(ウキリアム・ベテリ著「各種の租稅論」倫敦一六六七年刊第一七頁)。(99) ヒューム説はジェーム・ス・スチュアート等に對抗して、ア・サ・ヤングによつて其著「政治算術」倫敦、一七七四年刊(33)中に於て辯護されて居る。此書の第一一二頁以下には「價格は貨幣分量に懸る」と題する特別の一章がある。予は「經濟學批評」第一四九頁に於て「彼れ(アダム・スミス)は、貨幣を全く過つて單なる商品として取扱ひつゝ、流通貨幣の分量に關する問題を默過し

ゐる」と述べてゐるが、之れは只スミスが大體の論旨の上に於て貨幣を取扱つてゐる限りに於てのみ當嵌ることである。然し折々は、例へば初期の經濟學諸組織に對する批評に於ては、彼れは正鵠を得たことを言つてゐる。「各國に於ける鑄貨の分量は、其鑄貨によつて流通せしめらるべき諸商品の價值に依つて定めらる。……如何なる國に於てに、せよ年々賣買される財貨の價值は、それを其適當なる消費者に流通分配すべく或分量の貨幣を必要とし、それ以上の如何なる貨幣にも働き口を與へることは出來ぬ。流通の水路は必然に、それを充たすに十分なだけの貨幣額を吸引し、決してそれ以上の額の入り込むことを許さない。」(アダム・スミス著「諸國民の富」第四篇第一章)。(34) 同様に、彼れは其論旨の本體上、分業の崇拜を以て其著の端を開いてゐる。所が後にいたり、國庫收入の財源に關する終篇に於ては、たゞ「其師アダム・フアイガソンの分業攻撃論を
100
持出してゐるのである。」

(七十九)「一般物價は各國に於て、金銀が民間に増大するから、確かに昂騰するのである。だから、如何なる國に於ても金銀が減少する所に在つては、一般物價は貨幣の斯くの如き減少に比例して低落しなければならぬ。」(ジェー・コブ・ヴァンダーリント著「貨幣はすべての物に應ず」倫敦、一七三四年刊、第五頁)。(35) ヴァンダーリントの著書をヒュームの「論集」と詳しく比較して見ると、ヒュームがヴァンダーリントの此重要書を知つて居り、又それを利用したことは些も疑を容れない。流通要具の分量が價格を決定すると云ふ見解は、バーボン及び其れよりズット古い諸著者に於ても發見される。ヴァンダ

プリントは言ふ。『無拘束なる貿易に於ては何等の害を齎らさず、却つて大なる利す。……なぜならば此貿易に依つて一國民の現金は減少するとしても（保護關稅と輸入禁止は此現金減少を防止す可き筈のものであるが）現金を得る方の諸國民は其現金が増大するので、確かに一般物價が昂騰することを發見するであろう。そして……我製造品及び其他一切の物は總て、廉價となつて輸出を超過せしめ、それによつて貨幣を取り返すであろう。』〔前掲書第四頁〕^[101]

（八十）各個々の商品種類が其の價格に依つて總ての流通商品の價格總量の一要素を成すと云ふことは自明である。然し互に通約し得ざる諸使用價值が、如何にして一國に存する金乃至銀分量と一括して交換されるかは、全く解し難きことである。今、商品界を單一の總商品となし、箇々の商品は只その割切れる一部をなすに過ぎぬとして見るならば、次の如き見事な計算式が成立する。即ち

$$\frac{\text{各商品の種類} \times \text{その分量}}{\text{總商品の種類} \times \text{その分量}} = \frac{\text{その商品の價格}}{\text{總商品の價格}}$$

之はモンテスキューに於ては眞面目に現はれてゐる。曰く『世界に存する金銀の分量を現存商品の分量と比較するならば、夫々の財貨或は商品は、之れを金銀の總量の一部と比較することが出来るであろう。若し世界に財貨或は商品が只一つしかなく、一つしか買はれる物がないとして見よ。そして其れが貨幣の如く分割され得る者として見よ。さうすると、此商品の或一部は貨幣總量の或一部に相當し、前者の半量は後者の半量に相當するであろう。……物の價格の決定は、其根本に於て、其物の總量と其表章の

總量との割合に支配される。』^[102]（モンテスキュー前掲書第三篇第一二及一三頁）リカ
 ルド及其門徒ジェームス・ミルや、ロード・オーヴアーストーンなどによる此說の發達に
 就ては『經濟學批評』第一四〇、一四五頁及一五〇頁以下を参照せよ。ジョン・スチュア
 ト・ミル氏は其慣用の折衷論理を以て、父ジェームス・ミルの見地に與すると共に又其反
 對の見地にも與するの術を解してゐる。試みに彼れの『經濟學原論』なる入門書の本文を
 其序文（第一版）（彼れは此序文に於て、みづから現代のアダム・スミスだと揚言してゐる）
 と比較するときは、我々は彼れ自身の無邪氣さと、彼れを眞面目にアダム・スミスとして
 買受ける公衆の無邪氣さと、いづれをより多く嘆賞して善いか分らないのである。蓋
 し彼れとアダム・スミスとの關係は、カアス⁽³⁷⁾のウキイリアム・カアス將軍とウエリン
 トン公との關係に同じいのである。經濟學の範圍に於けるジョン・スチュアイト・ミル
 の獨創的研究（それは廣範圍でもなく、また内容が充實しても居らぬ）は、總て其一八四四
 年公にされた小著『經濟學の或未解決問題』⁽³⁸⁾中に網羅されてゐる。ロツクは金銀の無
 價值性と分量に依る其價值決定との關係を卒直に言明してゐる。彼れは言ふ。『人類
 は金銀に假想の價值を賦與す可く合意したので……之れらの金屬に於て考慮に入る
 固有價值とは分量の外にはない。』〔利子低減の結果に關する論考一六九一年一七七七
 年版『全集』第二卷、第二五頁〕^[103]

c 鑄貨、價值章表

流通要具としての貨幣の職分から、その鑄貨姿容⁽⁴⁾が發生する。諸商品の價格

即ち貨幣名の中に假想されてゐる金重量は、流通内に於て同名稱の金片即ち鑄貨として、それらの商品に對立して來なければならぬ。價格標準の設定と同様、貨幣鑄造の仕事は、國家に屬してゐる。金銀が鑄貨として着用し、然し世界市場に於てまた脱ぎ棄てる所の種々なる國民的制服の中に、商品流通の内部的或は國民的範圍と其の一般世界市場的範圍との分離が現はれる。^[104]

「されば金貨と、地金ちかねとは、本來たゞ態容に依つてのみ區別されるものであつて金は絶えず其一方の形態から他方の形態に轉化し得るのである(八十一)。然し造幣局よりの出路は、同時にまた鑄鍋への入路である。即ち金貨は、或ものは比較的多く、或ものは比較的少く、通用中磨滅する。斯くて金の名義と實體、即ち名目上の内容と實質上の内容とは、その分離行程を開始する。同じ額面の諸金貨でも重量を異にするが故に、價值が不同になる。斯くて流通要具としての金は、價格標準としての金と一致しなくなり、それと共にまた金によつて價格を實現される諸商品の實際の等價でなくなる。此混亂の歴史は、中世紀及十八世紀に至る迄の近世の鑄貨史を成すものである。鑄貨の金實體を金假現に、或は鑄貨を其法定金屬内容の

象徴に轉化せしめやうとする、流通行程の自然的傾向は、金片を通用不能ならしめ、或は法貨たる資格を無効たらしむ可き、量目磨損の程度に關する近世の法律に依つて認容されてゐる。^[105]

(八十一) 鑄造料などの如き細目を取扱ふは、固より全然予の目的外である。然し「英吉利政府が無償で貨幣を鑄造する」その『大規模の宏量』を嘆賞した浪漫的詔諛者アダム・ミユラーに對しては、サー・ダドレー・ノースの左の批判を掲げよう。「他の諸商品と同じく、金銀には其滿干運動がある。スペインから其若干分量が到着すると……それは倫敦塔ロンドン塔に運ばれ、そして貨幣に鑄造される。やがて地金の需用が現はれて再び輸出される。輸出すべき地金がなく、恰も總てが鑄貨状態にある場合には何うするか。それを再び鑄き潰さず。それには何等の損耗がない。なぜならば、貨幣鑄造は所有主に、何等の費用をもかけないからである。斯くの如く國民は購されて來たのだ。驢馬に食はせる爲に藁を糶ふ費用を拂はされて來たのだ。若し商人が(ノース其人はチャールズ二世時代の最大商人の一人であつた)貨幣鑄造の價格を支拂はねばならぬとしたならば、彼等は決して無造作に其銀を倫敦塔には送らなかつたであらう。そして鑄貨は常に、鑄造せられざる銀以上の價值を保つてあらう。」(ノース前掲書第一八頁)^[106]

貨幣通用その者が、鑄貨の實質上の内容を名目上の内容から分離せしめ、その金屬上の存在を其機能上の存在から分離せしめると云ふことは、金屬貨幣の鑄貨職

分は、他の材料を以て作つた表章⁽⁹⁾又は象徴⁽¹⁰⁾を代用することの出来る可能性を潜勢的に包藏して居る。金或は銀の微量を貨幣に鑄造するに就ての技術上の困難及びより低級の金屬が其初めより高級の金屬の代りに、即ち銀が金の代りに銅が銀の代りに、價值尺度として役立ち、随つて其れが高級の金屬に依つて廢位される當時に於て貨幣として流通してゐると云ふ事情——凡そこれらの事柄は、金貨の代用物としての銀表章及び銅表章の役目を歴史的に説明するものである。これらの代用貨幣は商品流通のうち鑄貨の最も迅速に流通し、随つて最も迅速に磨滅する方面、即ち賣買が絶えず極小規模に於て繰返へされる方面に於て金に代はるのである。これらの衛星が金の位置に固座してしまふことを妨げる爲に、それらが専ら金の代りに支拂に於て受け取られねばならぬ極く低い割合が法律的に規定される。いろ／＼な種類の鑄貨が通用する特殊の諸方面は、固より互ひに交錯して居る。補助貨は最小金貨の端數の支拂用として、金と並んで現はれる。金は絶えず小賣流通に入り込むが、然し補助貨と換へられることによつて、同様に絶えず流通外に投げ出される⁽¹¹⁾。^[107]

(八十二) 若し銀が小口の支拂に要する分量程度を決して超えないとすれば、それは大口の支拂に充分なる分量に集められ得ない。……主なる支拂に金を使用することは、また必然に小賣取引にそれを使用することを含む。金貨を使用する人々は、小口の買物に金貨を提供して、購つた商品と共に銀の釣錢を受取るので、之れに依つて、若し此事なかりせば小賣商人の妨げとなるであろう所の、銀の餘分は引出されて、一般流通界に散布される。が若し、金からは獨立に小口支拂を處辨するに足るだけの銀が存在してゐるとすれば、小賣商人は小口購買に對して銀を受取らねばならぬ。斯くて銀は必然的に小賣商人の手中に集積されなければならぬことになる。(デヴィッド・パカナン著「大英國の租税及商業政策の考究」エヂンバラ、一八四四年刊第二四八及二四九頁)^[108]

銀乃至銅表章の金屬内容は、法律によつて任意に定められてゐる。これらのものは通用中、金貨よりも尙ほ一層急速に磨損する。されば其れらのもの、鑄貨としての職分は、事實上その重量から、即ち總ての價值から全く獨立のものとなる。金の鑄貨存在は、其價值實體から全然分離する。斯くて、紙券の如き、相對的の無價値な物が、金に代り鑄貨として働くことが出来る。金屬の貨幣表章に於ては、この純象徴的性質は尙ほ或程度まで隠されてゐる。紙幣に於て其れは明瞭に現はれて來る。茲に於て知る、困難は最初の一步のみに存することを⁽¹²⁾。^[109]

茲では専ら、強制通用力を有する國家紙幣⁽⁸⁾が問題である。斯くのごとき紙幣は、金屬流通から直接生ずるものである。之れに反して信用貨幣は、單純なる商品流通の立場からはまだ全く我々に知られて居らぬ事情を前提にしてゐる。然し序でに一言したいことは本來の紙幣が、流通要具としての貨幣の職分から生ずる如く、信用貨幣は支拂要具としての貨幣の職分に其自生の根を有することは是れである^{(8十三)。}^[110]

(八十三) 支那の財務官ワン・マオ・イン(王孟尹?)は、一日、支那の帝國紙幣を内々兌換銀行券たらしめやうと云ふ計劃を天子の前に陳上しやうと思ひ立つた。それで一八五四年四月の帝國紙幣委員會の報告書に於て、彼れはシタ、カヤリ込められてゐる。但し、彼れが所定の苦刑を受けたか何うかは報告されて居らぬ。其報告書の結論には斯う書いてある。『委員會は彼れの計劃を慎重に商査し、其の一切が結局商人の利益の爲となるべきも帝室の爲めには何等利益あることにあらざるを發見したり』(『支那に關する北京駐在露西亞帝國公使館の調査研究ドクトル・アー・アーベル及エフ・アー・メクレンブルヒ獨譯、伯林一八五八年』第四七頁以下)。(分)。通用に依る金貨の絶え間なき磨損に關して、英蘭銀行の某總裁は『上院の(銀行條例)委員會に於て證人として述べてゐる。』(『年毎に磅金貨⁽⁹⁾の新種類は輕きに過ぎて來る。或年に充分の量目を以て通用する種類は、磨

損に依つて翌年には反對の秤皿が釣り下げられるに充分なだけ其の量目を失ふ』と。

(一八四八年上院委員會報告書、第四二九號)^[111]

一磅五磅等の如き貨幣名の印刷されてある紙券は、國家に依つて外部的に流通行程内へ投入される。之れらの紙券が實際、同じ額面の金量に代つて流通する限りに於ては、其運動の中には只だ金通用その者の諸法則のみが反映されてゐる。紙幣流通に特殊の一法則はたゞ金に對する其代表關係からのみ生じ得るものである。而して此法則の要旨は、紙幣の發行は、紙幣なき場合それに依つて象徴的に代表されてゐる(或は銀)が實際流通せねばならぬであらう分量に限られねばならぬと云ふにある。固より流通界の吸収し得る金分量は、絶えず一定の平均水準を上下してゐる。然し一國內に於ける流通媒具の分量は決して一定の最低限度を降ることはないのである。そして此最低限度は經驗によつて確定される。此最低量が絶えず其成分を變へる事即ちいつも別な金貨から成ると云ふ事は、固より其の範圍及び流通界に於ける其不斷の運動を少しも變ずるものではない。故に其れは紙の象徴を以て代用され得るのである。^[112]

之れに反して今日、總ての流通路がその貨幣吸收能力の及ぶ限り紙幣を以て充たされるならば、それは明日、商品流通の動搖の結果として溢れ出すかも知れぬ。斯くて一切の限度は失はれる。然し、紙幣が其限度を超えるとき、即ち紙幣のない場合に實際流通し得るであらう同額面金貨の分量を超えるときは、一般的不信用の危険は別として、商品界の内部に於ては只だ商品流通の諸法則に従つて決定されてゐる。随つて又専ら紙幣に代表され得るだけの金分量を代表する。例へば紙幣分量が夫々一オンス金の換りに二オンス金を代表するやうになつたとすれば、事實上一磅は例へば四分の一オンスでなく八分の一オンスの貨幣名となる。其結果は、價格標準としての金の職分に變化の生じた場合と同じである。斯くて以前には一磅といふ價格に依つて表章された價值は、今や二磅といふ價格に依つて表章されることになる。^[113]

紙幣は金表章或は貨幣表章である。商品價值に對する其關係は只、紙幣に依つて象徴的に感性的に代表される其金分量に於て、商品價值が觀念的に表章される點にのみ存してゐる。紙幣は、他の總ての商品分量と同じく又價值分量である金

分量を代表する限りに於てのみ、價值表章である(八十四)。^[114]

(八十四) 第二版註。貨幣の實體に關する一流の著述家でさへも、貨幣の種々なる職分を如何に不明瞭に解してゐたかは、例へばフライトンの著書中次の箇所が之れを示してゐる。『我が國內交換に關する限り、通常金銀貨によつて爲されてゐる總ての貨幣的職分が、法律から得る人工的な又傳習的な價值の外に何等の價值をも有せざる不換紙幣の流通に依つて、金銀貨と同様有効に全うされ得ると云ふことは、予の見るところによれば何等の否定を許さざる事實である。此種の價值は之れを固有價值の總ての目的に應ぜしめ得るもので、發行高さへ正當の限界を越えなければ、本位貨幣の必要をも無くし得るのである。』(フライトン著『通貨の調節』第二版倫敦、一八四五年刊、第二一頁)。(前)。即ち、貨幣商品は流通内に於て單なる價值表章を以て代用され得るものであるが故に、價值尺度及び價格標準としての貨幣商品は不要だと云ふのである!^[115]

最後に、金は何ゆゑそれ自身の單なる無價值な表章に依つて代用され得るかが問題である。然し既に論じた如く、金は只鑄貨或は流通要具としての其職分において孤立し或は獨立する限りに於てのみ、斯くの如く代用され得るものである。所で此職分の獨立化は、磨損した金片の引續いての流通に於ては現はれるが、箇々の金貨に對しては行はれぬ。金片は實際通用してゐる間のみ、單なる鑄貨或は流

通要具なのである。然し箇々の金貨に對して行はれぬことは、紙幣に依つて代用され得る最小量の金に對しては行はれる。此最小量の金は絶えず流通界に止まり、引續き流通要具として働き、随つて専ら此の職分の負擔者としてのみ存在してゐる。されば其の運動は單に、商品轉形 $M \rightarrow R \rightarrow M$ の對抗した行程の連續的な交互轉換を表現するに過ぎぬ。此轉形に於て、商品の價值姿容は商品と對立するが應て復た消え失せてしまふ。商品の交換價值の獨立した表現は、此場合單に一時の事柄に過ぎぬ。それはやがて他の商品に依つて代はられる。されば甲の手から乙の手へと絶えず貨幣を遠ざけてゆく一の行程に於ては、貨幣の單に、象徴的な存在だけでも十分である。貨幣の機能上の存在は、謂はゞ其物質的存在を吸収してしまふのである。貨幣は諸商品價格の唯だ一時的に客觀化した反映であるので、茲にはたゞ自分自身の表章として役立つに過ぎず、随つてまた表章によつて代用され得るのである(八十五)。只貨幣の表章はそれ自身の客觀的に社會的な通用力(8)を必要とする。そして紙象徴は強制通用に依つて此通用力を與へられる。この國家的強制は、一の團體の限界によつて限定せられたる、或は其限界内の、流通

界の中に於てのみ有效である。所がまた、此流通界の中に於てのみ貨幣はその流通要具或は鑄貨としての職分の中に全然溶け入つてしまひ、随つて紙幣に於て、自身の金屬實體からは外部的に引き離された、そして單なる機能的の存在様式を受けることが出来る。(116)

(八十五) 鑄貨としての金銀或は専ら流通要具としての職分に於ける金銀が、自分自身の表章となると云ふ事實を以て、ニコラス・バーボンは、政府の「貨幣價值引上げ」權、即ち「グロシエン」と呼ばれる銀分量に其れよりも大きな銀分量の名稱「ターレル」の如き(を與へ、斯くしてターレルの代りにグロシエンを債權者に返済する權の基く所以なりとしてゐる。「貨幣は屢々出納されることに依り、磨損して輕くなる。賣買に於て人々が考慮するものは、貨幣の名稱及び通用であつて、銀の分量ではない。金屬を貨幣たらしめるものは、金屬に對する公の權力である。」(ニコラス・バーボン前掲書第二九、三〇及二五頁)(117)

(3) 貨幣

價值尺度として、随つてまた自分みづから或は代理物を介し流通要具として働く商品は貨幣である。故に金(或は銀)は貨幣である。即ち一方に於ては、自己の黃金(或は白金)の現身を以て、即ち價值尺度に於けるが如く單に觀念上だけのものでもなく、又流通要具に於けるが如く他のものに代理され得るものでもなく、貨幣

商品として現はれねばならぬとき、又た他方に於ては、其の職分をみづから盡すにしろ、或は代理物を介して盡すにしろ、それを唯一の價值姿容として、或は交換價値の唯一の適當な存在として、單なる使用價値として、他の總ての商品に對立して確定するとき、金は貨幣として働くのである。^[118]

a 貨幣の退藏^[119]

二つの對立した商品轉形の連續的循環運動、即ち販賣と購買との流れやまざる轉換は、貨幣の不休的通用、即ち流通の絶え間なき働子としての其職分の中に現はれる。轉形列が中斷し、販賣がそれに續く購買に依つて補はれなくなるや否や、貨幣は不動化する、或はポアギユベールの言ふように動體から不動體へ、即ち鑄貨から貨幣へ轉化してゆく。

商品流通その者の最初の發展と共に、第一轉形の産物を、商品の轉化したる姿容即ち商品の金蛹⁽⁸⁾を固く保持する必要及び熱求が生じて來る(八十六)。商品は、商品を買ふ爲でなく、貨幣形態を以て商品形態に代はらしめる爲に、賣られるのである。この形態變化は、社會的代謝機能の單なる手段から、其れ自體が目的となる。商品

の外衣を脱いだ姿容は、其無條件的に讓渡され得る姿容として、或は單に一時的な貨幣形態として働くことを妨げられる。貨幣は斯くして化石して退藏貨幣⁽⁹⁾となり、商品の販賣者は貨幣退藏者⁽¹⁰⁾となる。^[126]

(八十六)「貨幣としての富は……貨幣に換算したる生産物としての富に外ならざるものである。」(メルシエード・ラリヴキエール前掲書第五五七頁)「生産物としての價値は、形を變へるに過ぎぬ」(右書第四八六頁)^[121]

正に商品流通の初期に於ては、使用價値の餘剰のみが貨幣に轉化する。金銀は斯くておのづから、餘分のもの、即ち富の社會的表章となる。貨幣退藏⁽¹¹⁾の斯くの如き素樸な形態は、傳統的、自足的な生産方法に一の固く局限された欲望範圍が應當する諸民族に於て、永久的のものとなる。亞細亞人殊に印度人に於て然り。諸商品價格が一國に存する金若しくは銀の分量に依つて決定されると想像して居るヴァンダーリントは、印度の諸商品が何故かくも安いかと、みづから問ふてゐる。答へて曰く、それは印度人が貨幣を埋藏するからである。彼れは言ふ。一六〇二年から一七三四年の間に、印度人は其初め亞米利加から歐羅巴に來た銀一億五

千萬磅を埋藏した(八十七)。一八五六年から一八六六年までの十年間に、英吉利は印度及び支那に(支那に輸出されたものは、大分部また印度に流れて行くのである)。一億二千萬磅を銀で輸出した。之は以前に濠洲の金と交換して得たものであると。

(八十七)『彼等が其すべての財貨及び製造品を斯くも安價に保つのは、此常習に依るのである。』(ヴァンダーリント前掲書第九五及九六頁)^[122]

商品生産が尙ほ一層發展すると共に、各商品生産者は、諸物の神經即ち、『社會的質權』を自身へ確保しなければならなくなる(八十八)。彼れの欲望は絶えず更新され、絶えず他人の商品の購買を必要ならしめる。然るに彼れ自身の商品の生産及び販賣は時間を要し、また偶然に支配されてゐる。そこで賣ることなしに買ふ爲には、彼れは前以て買ふことなしに賣つて置かなければならぬ。此行程は一般的規模に行はれるときは、自家撞着するように見える。^[123]

(八十八)『貨幣は質權である。』(ジョン・ペラリス著『貧民、製造品、貿易、拓殖、不道德等に關する諸論文』倫敦、一六六九年刊第一三頁)^[123]

所が貴金屬は、其産源に於て、直接他商品と交換される。此場合には購買なしの

(金銀所有者側に於て)販賣(商品所有者側に於て)が行はれる(八十九)。そして購買の伴はない其後の販賣は單に、貴金屬を更に總ての商品所有者の間に配分することを仲介するものに外ならぬ。

(八十九)つまり固有の意味での購買は既に商品の轉形した姿容としての、即ち販賣の所産としての金或は銀を前提してゐる。^[124]

斯くて交通⁽⁸⁸⁾の有らゆる點に、種々様々な範圍の退藏金銀が生ずるのである。商品と交換價值として或は交換價值を商品として固く保持するの可能と共に、貨幣に對する渴望が目覺めて來る。商品流通の擴大と共に、貨幣の力即ち何時でも使用できる様に準備のできてゐる絶對的に社會的な富の形態の力が増大する。『金は不思議な物だ。それを有する者は自身の求むる一切の物の支配者である。しかのみならず、金に依つて我々は魂を天國に達かせることも出来る。』(コロンプスのジャマイカからの書翰、一五〇三年貨幣を見ても、何がそれに化したのかを知り得ないから、商品であると否とを問はず、一切のものは貨幣に轉化する。一切のものは賣買され得るようになる。流通は其中に一切のものが入り込み金結晶

體となつて再び出て来る所の大きな社會的レトリックとなる。此練金術に對しては、聖骨も尙逆はない。況や更らに精緻な非流通聖物に於てをや(九十)。^[125]貨幣に於て諸商品の有らゆる質的差異が消滅してゐる如く、貨幣は又極端なるレヴェラー(黨平等論者)の如く一切の差別を抹去する(九十一)。然し貨幣は其れ自體が一箇の商品である。即ち何人の私有物ともなり得る一の外的物件である。斯くて社會的の力は私人の私力となる。それ故に古代社會は貨幣を、其經濟上及び道德上の秩序を破壊するもの⁽⁹²⁾として排斥した(九十三)^[127]。然るに其幼少時に於て既に富の神プルートウスを其の髪の毛を捕へて大地の腹から引張り出した(九十三)近世社會は、其自己特有の生活原理の光り輝く權化として黄金の聖杯⁽⁹⁴⁾を迎へてゐる。

(九十)最もキリスト教的な佛王安リ三世は、修道院その他から靈寶を奪つて貨幣に變へた。かのフォシス人がしたデルファイ神殿の寶物の掠奪が、希臘史上如何なる役目を演じたかは、人の知る所である。古代人の間では、神殿は人の知る如く商品の神の住居に役立つた。それは『聖き銀行』であつたのだ。かの、とりわけ商業民族であつたフェニシヤ人に取つて、貨幣は萬物の外衣を脱した姿容であつた。されば愛の女神の祭りに際して、見知らぬ男に我身を任かせた女たちが、其報酬として受取つた錢を女神に獻

げたのは、當然のことであつた。^[128]

(九十一)『金！黄色な、キラ／＼と光輝く貴き金！』

それのみにて、黒は白となり、醜きは美しくなり、

邪は正に、賤しきは氣高く、老いたるは若く、怯者は勇者となる。……

……神々よ、之は何！何故に之は

汝等の祭司と下僕とを汝等の側より引離し、

逞しき人々の枕を其頭の下より挽ぎ取る。

此黄色な奴隷めは、

諸々の宗教を縫つては破り、咀はれたるを祝福し、

白き癩者を崇めしめ、盗人らを座せしめて、

彼等に位を興へ、跪き讃む

座席に連なる元老院議員と共に。これぞ

悲しむ寡婦を再び嫁がしむる者。……

忌々しき現世、

汝、人類共通の娼婦。(シエークスピヤアゼンの隠者)^[129]

(九十二)『それは人の作れるものの内、如何なるものも、

銀の如く人を害ふものなければなり。金銀は

都市を破壊し、人を屋外に追ひ出だす。

そはまた、正しき心を穢れに向けしめ、

神に背ける總ての業を理解せしむべく、

人を教へそゝのかす。』(ソフォクレス著『アンチゴネ姫』)〔62〕

〔130〕

(九十三)「人の貪慾は、プルートウス神をも地中より引張り出す。』(アテナウス著『學者の晩餐』)〔63〕

使用價值としての商品は特殊の一欲望を満たし、物質的富の特殊の一要素を爲すものである。然し商品の價值は、物質的富の總ての要素に對する其牽引力の程度、隨つて其所有者の社會的富を測る。所で野蠻的に單純なる商品所有者〔64〕に取つては—西歐の農民に取つて—さへも—價值は價值形態から分離され能はぬものであり、隨つて退藏金銀の増大は即ち價值増大を意味してゐる。固より貨幣の價值は、それ自身の價值變動の結果にしる、諸商品の價值變動の結果にしる、いづれにしても變動するものであるが、然しそれは一方に於て、二百オンスの金が以前と同じく百オンスの金よりも一層多くの價值を含み、三百オンスが二百オンスよりも一層多くの價值を含むと云ふ事實を妨げない。また他方に於て、此物の金屬としての自然形態が、依然として他の總ての商品の一般的等價形態であり、總ての人

間的労働の直接に社會的な體化であると云ふ事をも妨げない。貨幣退藏の衝動は、本來無際限のものである。貨幣は直接他のすべての商品に換へられ得るものであるから、質的に或は形態的に無制限のものである、即ち物質的富の一般的代表である。所がそれと同時に、各現實の貨幣額は分量的に制限されてゐる、隨つて限られた効力の購買要具たるに過ぎぬ。貨幣の量的制限と質的無制限との此矛盾は、貨幣退藏者を常に蓄積の際限なき労働に逐ひかへす。彼れは恰も、一國を得る毎に一の新たる國境を得たに過ぎぬと見る世界征服者の如きものである。〔131〕

金を貨幣、隨つて退藏の要素として保持する爲には、それを流通すること、或は購買要具として享樂資料に化してしまふことを妨げられなければならぬ。されば退藏者は其肉の樂しみを黄金の物神〔65〕に献げる。彼れは眞面目に禁欲の福音を守る。他方に於て彼れは、商品の形で流通に投入したゞけのものを貨幣の形で流通から取り出し得るに過ぎぬ。多く生産すればする程、彼れはますます／＼多く賣ることが出来る。斯くて勤勉と節儉と貪慾とは、彼れの主徳となり、多く賣つて少なく買ふことは彼れの經濟學の一切となるのである。(九十四)〔132〕

(九十四)物の販賣者の數を出来る丈け増し、購買者の數を出来る丈け減ずること、是れ經濟學の諸施設が回轉する樞軸である。[133] (ヴェリ前掲書第五二頁)

退藏貨幣なる直接の形態と並立するものは、金銀商品の所有てふその審美的形態である。此所有は、ブルジョアの社會の富と共に發達するものである。「富者とならう。然らずんば富者と見せかけよう」(デプロ)。斯くて一方には、金銀の貨幣職分からは獨立に、絶えず擴大する所の金銀に對する市場が形成され、他方には貨幣の隠れたる供給源泉が形成される。此源泉は特に社會的激動期に於て流れ出すのである。[134]

貨幣退藏は金屬流通の經濟に於て種々なる職分を盡くす。第一の職分は、金貨或は銀貨の通用諸條件から生ずるものである。我々は既に、商品流通の範圍及び速度並びに商品價格に於ける不斷の動搖と共に、如何に貨幣の通用分量が休みなく増減するかを知つた。即ち此分量は伸縮し得るものでなくてはならぬ。或時には、貨幣は鑄貨の形で引き着けられ、或時は鑄貨は貨幣の形で撥ね反へされねばならぬ。實際に通用する貨幣分量が常に流通界の飽滿程度に相應する爲には、一

國に存する金乃至銀分量は現在鑄貨として働いてゐる其れよりも大きくてはならぬ。此條件は、退藏貨幣の形態に依つて充たされる。退藏貯水池は同時に、流通貨幣を送り込んだり送り出したりする通溝として役立つ。斯様にして流通貨幣は、決して其の通用溝から溢れ出すことはないのである。(九十五)。[135]

(九十五)國民の貿易を續けてゆくには、一定額の特殊貨幣が必要である。此の額には變化あるもので、我々が置かれてある事情の要求する所に従ひ、或時はより多く、或時はより少ないのである。…貨幣の此滿干運動は何等政治家の助力なしに、おのづから處理調節される。…一個のバケツは代る代る働く。即ち貨幣の乏しき時には地金が貨幣に鑄造され、地金の足りない時には、貨幣が鑄造される。(ダドレーノ、前掲書第二二頁)久しく東印度會社の吏員であつたジョン・スチュアート・ミルは、印度に於て相變らず尙ほ銀の裝飾品が、直接退藏貨幣として働いてゐることを確説してゐる。「金利歩合の高い時には、銀の裝飾品は取り出されて貨幣に鑄造され、金利歩合が低落すると又元に戻る。」(一八五七年の銀行條例に關する 告中ミルの證述。第二〇八四號)印度の金銀輸出入に關する一八六四年の一議會文書に依れば、一八六三年に於て金の輸入は、一千九百三十六萬七千七百六十四磅だけ輸出を超過した。一八六四年に先だつ八年間に於て、貴金屬の輸入超過は一億九百六十五萬二千九百七十七磅に上つた。そして十九世紀中、印度に於て二億磅よりも遙かに多くの額が貨幣に鑄造された。[136]

b 支拂要具⁽⁶⁸⁾ [137]

これまで考究した商品流通の直接の形態に於ては、同一の價值の大きが一方の極に於ては商品として、其の反對極に於ては貨幣として、いつも二重に存在してゐた。されば商品所有者等は相互的に存在する等價の代表者としてのみ接觸に入つた。然るに商品流通の發展と共に、商品の讓渡を其價格の實現から時間的に引離す諸事情が發展して來る。茲ではそれらの事情のうち、最も單純なるものを暗示すれば足りる。

或種の商品は其生産に比較的長時間を要し、他の種の商品は比較的短時間を要する。種々なる商品の生産は種々なる季節に結びつけられてゐる。或る商品は其市場地で生れ、他の商品は遠隔の市場へ旅して行かなければならぬ。斯くて或る商品所有者は、他の商品所有者が購買者として現れ出る前に、既に販賣者として現れ出ることが出来る。同じ取引が同じ人々の間に絶えず繰返される間に、商品の販賣條件は其生産條件に従つて調節される。^[138]

他方に於て、或種の商品例へば家の利用は、一定期間を限つて賣られる。期限の

満了後始めて、購買者は實際に商品の使用價值を受取つたのである。即ち彼れは支拂をする前に其商品を買ふのである。^[139]

一方の商品所有者は、現存の商品を賣り、他方の商品所有者は、貨幣の單なる代表者として、或は將來の貨幣の代表者として買ふ。斯くて販賣者は債權者とり、購買者は債務者となる。商品の轉形、或は其價值形態の發展が此場合變化するので、貨幣も亦一の別な職分を受ける。即ちそれは支拂要具となるのである。^(九十六) [140]

(九十六) ルーテルは購買要具としての貨幣と支拂要具としての貨幣とを區別してゐる。「汝は高利業者⁽⁶⁹⁾からして予が此所では支拂ふことが出来ず、彼所では買ふことが出来ぬといふ双兒を予に造るのであ」と。(マルチン・ルーテル著『僧侶等』。高利業に反對して説教すべく。)「キツテンベルヒ、一五四〇年刊」⁽⁷⁰⁾ [141]

債權者若しくは債務者の性質は、此の場合、單純なる商品流通から生じて來る。此流通の形態變化は販賣者及び購買者に之等の新しき性質を刻みつけるのである。されば之等の役目は最初、販賣者及び購買者のそれと同じく、ホンの一時的のもので、且つ同じ流通當事者に依つて代る代る演ぜられてゐる。然るに債權者債務者の此對立は、今や販賣者購買者のそれほど快よきものには見えない。そして

後者よりも一層結晶することに適してゐるのである(九十七)。然し此同じ性質は、商品生産から獨立にも生じ得る。例へば古代世界の階級闘争は、主として債權者と債務者との争ひの形でなされ、羅馬に於ては平民債務者(五)の没落を以て終つた。而して奴隸が代つて起つたのである。中世に於ては、此闘争は封建債務者の没落を以て終つた。彼れは自身の政權を其經濟的基礎もろ共に失つたのである。然し貨幣關係は——債權者と債務者との關係は、一の貨幣關係の形を帯びてゐる——此場合ただ、一層深く横はる經濟的生活條件の矛盾を反射してゐるに過ぎぬ。(142)

(九十七)十八世紀初期の英吉利商人の間に於ける債務者對債權者關係に就ては「茲英吉利に於ては商人等の間に、他の如何たる人間社會に於ても、世界の他の如何たる國に於ても見出されないやうな殘虐の精神が蔓びこつてゐる。」(匿名者著「信用及び破産條例に關する一論文」倫敦、一七〇七年刊第二頁(七))

我々は商品流通の方面へ戻らう。販賣行程の兩極に商品及び貨幣なる等價が同時に現はれることはモウ無くなつた。貨幣は今や先づ、販賣された商品の價格決定に於ける價值尺度として働く。其商品の契約に依つて固く定められた價格は、購買者の債務即ち彼れが一定期日に於て支拂ふ義務ある貨幣額を測るのであ

る。(143)

第二に、貨幣は觀念上の購買要具として働く。其は只購買者の貨幣約束の中のみ存在するものであるが、商品の所有者移動をなさしめる。支拂期日の満期となつた時に始めて、支拂要具は事實上流通内に入り込むのである。即ち購買者の手から販賣者の手に移り行くのである。流通行程が第一階段で途切れたが故に、即ち商品の轉化した姿容が流通界から引去られたが故に、流通要具は退藏貨幣に轉化したのである。支拂要具は流通内に入り込むが、然しそれは商品が既に流通内から脱出した後のことである。貨幣は最早流通行程を仲介しない。其れは交換價值の絶對的存在として、或は一般的商品として、獨立に其行程を終了させる。販賣者は貨幣に依て何等かの欲望を充たす爲に、商品を貨幣に轉化した。貨幣退藏者は商品を貨幣形態に於て保存する爲に、又債務を負つてゐる購買者は支拂ひ得る爲に、同じとをした。此購買者が若し支拂をしないならば、其所有品の強制販賣が行はれるのである。商品の價值姿容即ち貨幣は、かくして今や、流通行程その者の諸關係から生ずる一の社會的必然に依て、それ自體が販賣の目的となる。(144)

購買者は商品を貨幣に轉化する以前に、貨幣を商品に再轉化する。即ち第一轉形に先だつて第二轉形を全うする。販賣者の商品は流通するが、然したる貨幣に對する一の私法上の權利としてのみ其價格を實現するのである。それは貨幣に轉化する前に、使用價值に轉化するのである。其第一轉形の完成は、後になつて始めてなされるのである(九十八)。^[145]

(九十八) 第二版註。一八五九年に公にされた拙著からの左の引抄に依つて、予が何故本文に於て上述のものとは反對の一形態に何等の注意を拂はないかと判明するであらう。『反對に』なる行程に於ては、貨幣の使用價值が實現される前に、即ち商品が讓渡される前に、貨幣は現實の購買要具として引渡され、かくして商品の價格は實現され得るのである。之れは例へば、前拂の日常形式で行はれる。或は英吉利政府が印度の農民から阿片を買ふ場合の形式で行はれる。……然し此場合には、貨幣はたゞ我々の既知る購買要具の形で働くに過ぎぬのである。……資本も亦固より貨幣の形で前拂される。……然し此見解は單純なる流通の水平には落ちない。『經濟學批評』第一一九及一二〇頁^[146]

流通行程の各一定期間に於て、其期間に満期となる諸債務は、自身の販賣が之れらの債務を喚び起したる諸商品の價格總量を代表する。此價格總量の實現に必

要なる貨幣量は、先づ支拂要具の通用速度に懸つてゐる。それは二つの事情に條件づけられてゐる。即ち債權者と債務者との關係が連鎖をなしてゐて、例へば自身の債務者Bから貨幣を受取つたAが、其れを其債權者Cに支拂ふといふ風になつてゐること。——それから種々なる支拂期日の間の時期の長短是れである。前後相續く諸支拂又は事後的の第一諸轉形の連鎖は、先きに考究した諸轉形列の錯綜とは本質的に異なるものである。流通要具の通用の中には、販賣者と購買者との間の連絡が單に表章されるのみではない。此連絡その者は、貨幣通用の中に、また其れと共に始めて生じて來るのである。之に反して支拂要具の運動は、それ以前に既に完成してゐる一の社會的連絡を表章する。諸々の販賣の同時性と並行性とは、鑄貨分量が通用速度に依つて補はれ得る範圍を制限する。それらは他方に於て支拂要具の節約に對する一の新しい槓杆となる。諸支拂が同一場所に集中すると共に、其の清算に對する特殊の設備及び方法が自然に發達して來る。かくて例へば中世のリオン市に於けるヴァイルマン(振替支拂^[147])の如きがそれである。Bに對するAの、Cに對するBの、Aに對するC等の債務請求權は、單に相互

對照されさへすれば或る程度まで正量(貸方)及び負量(借方)として互ひに相殺される。かくて只償却さるべき債務残高のみが残る。支拂の集中が大きければ大きいほど、此残高は相對的にますます小となり、随つて流通する支拂要具の分量はますます小となる。^[148]

支拂要具としての貨幣の職分は一の直接なる矛盾を含む。諸々の支拂が相殺する限りに於て、貨幣はたゞ觀念的に計算貨幣として或は價值の尺度として働くに過ぎぬ。現實の支拂を爲す限りに於ては、それは流通要具として、即ち社會的代謝機能の唯だ一時的な仲介的な形態としてではなく、社會的勞働の個人的體化として、交換價值の獨立の存在として、即ち絕對的商品として現はれ出るのである。此矛盾は生産上及び商業上の恐慌の貨幣恐慌⁽⁹⁹⁾と呼ばれる時期(九十九)に於て著しくなる。此貨幣恐慌は、諸々の支拂の連鎖と其清算の人工的組織とが充分に發展したる所にのみ生ずる。此機械仕掛のより一般的な攪亂、それが如何なる原因から生ずるにもせよと共に、貨幣は突然にまた仲介なしに、計算貨幣としての單なる觀念上の姿から現實の貨幣に一變する。それは、尋常一様の諸商品によつては

代用され得なくなる。商品の使用價值は無價值となり、其價值は自身の價值形態の面前に消え失せる。ツイ今しがたまで、ブルジョアは好景氣に酔つた啓蒙的自負心⁽¹⁰⁰⁾を以て貨幣を空しき幻像と言明してゐた。彼等は言つた。單り商品のみが貨幣であると。然るに今や單り貨幣のみが商品だ！と云ふ叫びが、世界市場の到る處に響き渡る。鹿が鮮かな水を喘ぎ求むる如く、彼れの靈は唯一の富なる貨幣を喘ぎ求める⁽¹⁰¹⁾。恐慌に於ては、商品と其價值形態即ち貨幣との對立は、絶對の矛盾にまで高められる。随つてまた、貨幣の現象形態などは、此場合どうでも宜いのである。支拂が金でされるにしても、或は銀行紙幣の如き信用貨幣でされるにしても、貨幣飢饉は依然として同じである⁽¹⁰²⁾。^[149]

(九十九)本文に於てすべての生産上及び商業上の一般的恐慌の特殊階段なりとした貨幣恐慌は、同じく貨幣恐慌の名を以て呼ばれては居るが、獨立に發現し得て只反作用的に商工業に影響する、かの特別種類の恐慌とは明かに區別せねばならぬものである。此種の恐慌の運動中心は貨幣資本であつて、随つて銀行、取引所、金融市場等は其直接の活動範圍である。(第三版へのマルクスの自註)^[150]

(百)『信用組織から現金組織への斯くの如き急轉は、實地の恐慌の上に更に理論上の恐怖を附加へる。斯くて流通當事者等は、自身の關係の測り知るべからざる秘密の前に身慄ひする。』(カール・マルクス前掲『經濟學批評』伯林一八五九年刊第一二六頁)。「貧者等は何もしないでゐる。なぜならば富者等は——曾て有してゐたと同じ、衣食を供給すべき土地及び人力を有してはゐるが——彼等を雇ふべき貨幣を少しも持たないからである。そして此土地及び人力こそ一國民の眞の富であつて、貨幣はそれではない。』(ジョン・ベラース著『産業大學設立の議』倫敦、一六九六年刊第三頁、75)

(百一)斯くの如き利那が、謂ゆる商業の友等に依つて如何に利用されるかについては『或時(一八三九年の)貪慾なる一人の(倫敦の)老銀行家は、其私室で自分が今座に就てゐる机の蓋を開けた。そして一束の銀行紙幣を取り出して一人の友に見せた。頗る上機嫌の體で斯う言ひ乍ら——茲に六十萬磅の銀行紙幣がある。之は金融を逼迫せしめるために保持してあるのだ。今日の午後三時過にはそれは皆んな市中に放出せられるだらうと。』『手形の理論。一八四四年の銀行特許條例倫敦、一八六四年刊第八一頁』(76)『半官紙』(オプザーヴー)は一八六四年四月二十四日に次ぎの如く述べてゐる。『銀行紙幣の拂底を生ぜしめる爲に用ひられた手段に就て或る妙な風説が傳はつてゐる。……此種の如何なる奸策でもが採用せられるであらうと信ずるは、果して正當か何うか危ぶまれるが、何しろ此報道は實際記述に値する程に廣く傳つてゐたのである。』(152)

所で一定の期間内に通用する貨幣總額を考察すると、其れは、流通要具及び支拂

要具の速度が一定してゐる場合、實現せらるべき諸商品價格の總和に其期間中滿期となるべき諸支拂の總和を加へたものから、互に相殺する諸支拂を減じ、最後に同一鑄貨が或時は流通要具として或時は支拂要具として交互に働く通用の度數を減じたものに等しい。例へば農夫は其穀物を二磅に賣れば、此二磅は流通要具として役立つのである。滿期日には彼れは、其二磅で先きに職工から引渡されたリンネルの支拂をする。かくて同じ二磅は、今度は支拂要具として働くことになる。所で職工は右の二磅を以て一冊のバイブルを現金買ひする。茲に於て、右の二磅は、またも流通要具として働くことになる。以下之れに準ず。(153)

されば價格や、貨幣通用の速度や、支拂の節約程度等が一定してゐる場合でも、一定期間内、例へば一日中に通用する貨幣量と其間に流通する商品量とは、もはや到底一致しない。久しい以前に流通から脱出した諸商品を代表する貨幣が、今なほ通用し、其貨幣等價が將來に於て始めて現はれる商品が、今すでに流通してゐる。他方に於て、毎日契約される諸支拂と、其同じ日に滿期となる諸支拂とは、到底比較することの出来ぬ大きさのものである。(百二)。(154)

(百二)どんな日でも其日の中に取り結ばれた販賣或は契約の額は、其同じ日に流通してゐる貨幣の分量に影響しないであらう。然し大多数の場合に於てはそれは結局、其時から多かれ少なかれ隔つた諸々の後日に流通すべき貨幣の分量に對する様々な爲替手形と同じ事に歸着するであらう。……今日振出された諸手形、或は今日開かれた諸信用は、總額に於ても、各個の金額に於ても、期限に於ても、明日或は明後日に於けるそれらと何等類似する所あるを必要としない。否、今日の手形及び信用の多くは其満期となつた時に於て、過去の諸々の日(いづれも不定な)に其起源が亘り、斯くして十二ヶ月拂ひ、六ヶ月拂ひ、三ヶ月或は一ヶ月拂ひの諸手形が一定の日に集つて來て、其一日に満期となる債務總額を高からしめるのである。……」 「通貨問題批判、スコットランド人に與ふる一書翰、イングラランドの一銀行家著」エデンバラ一八四五年刊、第二九及三〇頁、其他隨所(7) [155]

信用貨幣は、支拂要具としての貨幣の職分から直接に生じて來る。それは販賣された商品その者に對する債務證書が、また債權移轉用として流通するによるのである。他方に於て、信用組織の擴大するに伴ひ、支拂要具としての貨幣の職分は擴大する。貨幣は支拂要具として、大規模商取引界に地歩を占む可き其の特殊存在形態を受け、金貨或は銀貨は主として小規模取引界に逐ひ遣られる(百三) [156]

(百三) 正貨が本來の商取引に入り込むこと如何に稀なるかの例證として、茲に倫敦最大商館の一たるモリソン・ヂロン商會(8)の年収入計算書を紹介する。一八五六年に於ける同商會の取引は、幾百萬磅に及んでゐるが、左表ではそれを一百万磅の標準に換算してある。

收 入		支 出	
(單位磅)		(單位磅)	
日附後拂銀行及商人手形	五三三・五九六	日附後拂手形	三〇二・六七四
一覽拂銀行其他小切手	三五七・七一五	倫敦銀行宛小切手	六六三・六七二
地方銀行券	九・六二七	英蘭銀行券	二二・七四三
英蘭銀行券	六八・五五四	金	九・四二七
金	二八・〇八九	銀及銅	一・四八四
銀及銅	一・四八六	合計	一・〇〇〇・〇〇〇
郵便爲替	九三三		
合計	一・〇〇〇・〇〇〇		

『銀行條例特別調査委員會報告』一八五八年七月第七一頁(9)

商品生産が一定の高度及び範圍に達すると、支拂要具としての貨幣の職分は、商品流通の領域を超えて、諸々の契約の一般的商品となる(百四)。諸々の賃子、租税等は現物給付から貨幣支拂に轉化する。 [157]

(百四)「貿易の進路は、斯様に財貨と財貨との交換から、或は引渡と受取とから、販賣と買拂とに一轉したので、總ての取引は……今や貨幣に現はれた價格を基礎として取り定められる」(匿名者著『公債論』第三版、倫敦一七一〇年刊第八頁)。

此轉化が生産行程の全姿容に依つて如何に支配されるかは、例へば羅馬帝國が總ての租税を貨幣で徴收しようとして試みて、兩度の失敗を招いた事實が之れを證明してゐる。ポアギユベールや元帥ゾーバンなどが雄辯に非難してゐる、ルイ十四世治下の佛蘭西農民の驚くべき窮乏は、單に苛斂誅求にのみ因るのでなく、同時に現物租税が貨幣租税に變へられたことにも因るのであつた(百五)。

(百五)「貨幣は總ての物の死刑執行人である。」財政技術は「此大事な沈澱物(貨幣)を得る爲に、諸々の財貨や商品を蒸餾する蒸餾器である。『貨幣は全人類に戦を宣する。』(ポアギユベール著『富、貨幣及租税性質論』テール編ギョーマン全集、第一卷、財政經濟學者篇、巴里一八四三年刊、第四一三、四一九及四一七頁)。

他方に於て、同時に國家の租税の主なる要素たる地代の物納形態は、自然關係の不易性を以て繰返さるゝ生産事情に基くものであるが、此の如く支拂形態は又た反作用的に舊式の生産形態を維持する。此支拂形態は土耳其帝國の自己保存の

秘密の一たるものである。歐羅巴から強制された日本の外國貿易が、現納地代から金納地代への轉化を招致するとすれば、日本の標本的農業はおしまひである。

其農業の狹隘なる經濟的存在條件は解體するであらう。

どの國でも一定の一般的支拂期日が確定して來る。それは、再生産上の他の循環運動は別として、一部分は季節の變化に結びついてゐる生産上の自然的諸條件に基くものである。之等の自然的條件は又諸々の租税、賃子等の如き直接には商品流通から生じない諸支拂を左右する。一年内の諸々の一定日に於て社會の全面に分散してゐる之等の諸支拂に必要な貨幣量は、支拂要具の節約に於ける周期的な、然し全く表面的な攪亂を惹起する(百六)。支拂要具通用速度の法則からして總ての周期的支拂に對して、其源泉の如何を問はず、支拂要具の必要量は支拂期間の長短に逆比例すると云ふ結論が生ずる(百七)。

(百六)クレীগ氏は、一八二六年の英吉利議會調査委員會に對して述べてゐる。「一八二四年の聖靈降臨祭の月曜日、エヂンバラ市の諸銀行券に對する巨大の需用があつて、十一時には既に一枚も我々の手許にはなかつた。そこで諸銀行は、總てのいろ／＼な銀行に借り遣つたが、得ることが出来なかつた。そして多くの取引は、單に傳票紙だ

けて處理された。然るに三時にはモウ銀行券の總ては元の發券銀行に戻つて來た。それはたゞ手から手に傳つて行つたに過ぎなかつたのだ」と。スコットランドに於る銀行券の實際平均流通高は三百萬磅に及ばないが、而も一年内の一定した支拂諸期日に於ては、總計約七百萬磅に上る、諸銀行所有に屬する各銀行券が流通する。此う云ふ場合には、銀行券は唯一の特別な任務を盡すのであつて、それをして仕舞ふや否や夫々もとの發券銀行に流れ歸るのである。(ジョン・フラー・トントン著『通貨の調節』第二版、倫敦一八四五年刊第八六頁註⁽⁸⁾)。尙、説明のため、フラー・トントンの當時、スコットランドに於ては預金に對して小切手でなく、只銀行券のみが發行されてゐたことを附言して置く。

(百七)『商業取引に於て年々四千萬磅の金額を取引する必要あるに對し、流通金貨僅かに六百萬磅で足りるか否か』といふ問に對して、ペーテリは例の巧妙を以て答へてゐる。『然り。と予は答へる。なぜならば支出額四千萬磅であるけれども、若し循環が極めて短期なると、毎土曜に工賃を受取つて直ぐ之を支拂ふ貧しき手工職人や職工等の間に行はれる如くであるとすれば、一百萬磅の五十二分の四十⁽⁹⁾で右の目的に應じ得るであらう。反之、地代の支拂や租稅徵收の場合の如く、循環期間が年四期とあるとすると、一千萬磅を要するであらう。そこで一般支拂は一週と十三週⁽¹⁰⁾との混合循環によるものとすれば、一百萬磅の五十二分の四十に一千萬磅を加へた額の二分の一、即ち概算五百五十萬磅あれば充分であらう。』(ウキリアム・ペーテリ著『愛蘭の政治的解剖』一六七二年稿、倫敦、一八九一年刊、第一三及一四頁)⁽⁸⁾ [162]

支拂要具としての貨幣の發展は、債務額の満期日に對して貨幣の蓄積し置かれることを必要ならしめる。獨立の致富形態としての貨幣退藏は、ブルジョアの社會の發達するに従つて消滅するが、反對に支拂要具の準備金の形でブルジョアの社會の發展と共に發達する。⁽¹⁶³⁾

c 世界貨幣

國內流通界から脱出すると共に、貨幣は其處に發芽した、價格標準、鑄貨、補助貨、價值表章などの地方的形態を脱ぎ捨て、貴金屬の本來の地金形態に戻つてゆく。世界貿易に於ては、諸商品は其價值を普遍的に開展する。斯くて其獨立の價值姿容は、此貿易に於ては又世界貨幣として諸商品に對立してゆく。世界市場に在つて始めて、貨幣は完全な範圍に於て、その自然形態が同時に抽象的人間労働の直接に社會的な實現形態である商品として働く。その存在様式は、その概念と充分一致したものになる。⁽¹⁶⁴⁾

國內流通界に於ては、只一商品のみが價值尺度、隨つて貨幣として役立ち得る。世界市場に於ては、金と銀との二重の價值尺度が行はれる(百八)。⁽¹⁶⁵⁾

(百八)此事からして一國の諸銀行はたゞ自國內に於て貨幣として働いてゐる貴金屬のみを準備すべしと規定する總ての立法の不都合が生じて來るのである。例へば英蘭銀行が斯様にして自ら造つた「快よき故障」は、人の知る所である。尙ほ金と銀との相對的價值變動の偉大なる史的諸時代に就ては、前掲拙著第一三六頁以下を見よ。第二版補註—サーロバート・ピールは、其一八八四年の銀行條例に於て、銀地金に對して紙幣を發行することを(而も銀準備が決して金準備の四分の一を超えないように)英蘭銀行に認可する事に依つて、難境を切り抜けようとした。銀價值は此際倫敦市場に於ける其の市場價格(金での)に從つて評價されるのである。(第四版註—今や又も金銀の強激なる相對的價值變動に會してゐる。約二十五年前には、銀に對する金の價值比例は「二」であつた。然るに今はそれが約「一」である。そして銀は尙引續き金に對して低落してゐる。之れ其の根本に於て兩金屬の生産方法に革命の行はれた結果である。以前には、金は殆ど只だ、合金岩の風化の産物たる合金沖積層を洗滌することに依つてのみ得られたのであつた。然るに今や此方法は最早充分でなく、合金石英層その者の採掘に依つて壓倒せられた。此の新方法は古代人にも熟知されてゐた(チオドルス史書第三卷第十二編乃至第十四編)ものであるが、從來は只だ副的のみに行はれてゐたのである。他方に於て、亞米利加ロッキーマウンテンの西部に巨大なる新銀層が発見されたのみでなく、之等の銀層及びメキシコの銀坑は鐵道に依つて開かれた。此鐵道は近代の機械と燃料との供給を可能ならしめ、それに依つて最小の費用を以て最大の銀産額を得る

ことを可能ならしめたのである。然し金銀兩金屬が鑛石層中に存する状態には、大なる差異がある。金は多くは純粹の形で発見されるが、其代り極少量づゝ石英の中に散在してゐる。故に合金層は全部粉碎され、金は洗滌され或は水銀で抽出されなければならぬ。斯くして一百万グラムの石英中に、漸く一乃至三グラムの金を発見するに過ぎないことは屢々であつて、三十乃至六十グラムを得ることは滅多にない。銀は純粹の形で発見されること稀であるが、其代り岩層から比較的容易に引き離すことの出来る特殊の諸鑛石中に存し、之等の鑛石は多くは四十乃至九十九パーセントの銀を含んでゐる。或はそれ自體として既に採掘に價する銅や鉛などの鑛石中により、少量づゝ含まれてゐる。既に之等の事實からして、銀の生産労働は確かに減少したが、金の生産労働は寧ろ増大したこと、隨つて銀の價值低落は全く當然であることが判明する。そして此價值低落は、銀價格が今尙ほ人爲的方法に依つて高められてないならば、今後は一層な價格下落として現はれるであらう。然し亞米利加の銀源は、まだ僅か小部分人力の支配する所となつたに過ぎない。それ故に銀の價值は尙ほ久しく低落のまゝであることは確かである。また有用品及び贅澤品に對する銀の需要の相對的減少や、被金品、アルミニウム等を代用することは、此傾向を尙も助長するに違ひない。之に依つて、國際的強制通用が銀を再び「1:15」なる始の價格比例に引上げるであらうと説く、複本位論者の見地の空想を判断せよ。寧ろ銀は、世界市場に於ても益々其貨幣性を失ふであらう。— F. E. 166

世界貨幣は、一般的支拂要具として、一般的購買要具として、また一般的富⁽⁶⁾の絶對的に社會的な體現物として働く。就中國際的差額の清算に對する支拂要具としての職分は、特に重要なものである。そこで重商主義の合言葉が生ずる。曰く貿易の差額！(百九)。種々なる國民間に於ける社會的代謝機能の在來の平衡が突然攪亂される時毎に、金銀は本質上國際的購買要具に役立つのである。最後に購買も支拂も問題でなく、富を一國から他國に移轉することが問題である場合、そして商品形態に於ける此移轉が、商品市場の景況若しくは充たさるべき目的の者に依つて不可能となる場合に、金銀は富の絶對的に社會的な體現物として働くのである。(百十)^[167]

(百九)餘剰の貿易差額を金銀で清算することを、國際貿易の目的と見做してある重商主義に反對する論者等は、また全く世界貨幣の職分を誤解した。流通要具の分重を規定する諸法則に對する謬つた解釋が、如何に貴金屬の國際的運動に對する誤つた解釋の中に反射するに過ぎないかは、予ボリカルドに就て詳しく論證した所である。(前掲拙著第一五〇頁以下)「輸入超過は決して過剰なる諸通貨以外からは生じない。……諸貨の輸出は、其廉價に基因するものであつて、輸入超過の結果ではなく、原因である」と

云ふリカルドの誤れる獨斷説は、既にパーボンに於て發見される。曰く、「貿易の差額は(若しあるとすれば)一國民から貨幣を送出すことの原因ではない。それは各國に於ける地金の價値の差異から生ずるものである」と。(パーボン前掲書第五九及六〇頁)マカロツクは其の『經濟學文獻倫敦一八四五年』⁽⁸⁾に於て、パーボンの此先見を賞揚してゐるが、然し、パーボンが『通貨主義』(カーレンシープリンシプル)⁽⁹⁾の不合理な前提を有することを示す素朴な形式あることに就ては、用心深くも之に言及することさへ避けてゐる。右書の無批判と(甚しきは)不誠實とは、貨幣説の歴史に關する諸節に於て絶頂に達してゐる。なぜならば、彼は茲では彼が『押しも押されぬ銀行家』^[169]と稱へるオーヴァーストーン卿(元は銀行家ロイド)の追従者として尻尾を振つてゐるからだ。^[170](百十)例へば補助金や、戰爭を續ける爲、或は銀行をして現金支拂を再開せしむる爲めの現金貸附等に於ては、價値は正に貨幣形態に於て要求され得るのである。^[171]

各國は其國內流通に對すると同じく、世界市場流通に對しても、一の準備金を必要とする。従つて退藏貨幣の諸職分は、一部分は國內の流通要具及び支拂要具としての貨幣の職分から、一部分は世界貨幣としての其職分から生ずる(百十)そして此後の方の役目に於ては、常に現實の貨幣商品即ち現身のまゝの金銀が必要である。故にジェームス・スチュアートは、金銀を其單なる地方的代理物と區別して、

明瞭に『世界の貨幣』⁽⁹⁾と特徴づけてゐる。^[172]

(百十^a) 第二版註。『貨幣退蔵の組織が、一般的流通から何等相當な援助なくして、國際債務の決算上すべての必要なる用務を盡し得ることに就ては、予は實に、佛蘭西が外國から受けた一の破壞的侵略の恐しさからやつと回復しかけた時、二十七ヶ月以内に聯合國に對して約二千萬の強制賠償を爲し了へ、而も此金額の著しき部分を正金で支拂つて、尙國內の通貨には目に見えざるほどの收縮或は攪亂を來たさしめず、其爲替にも何等警戒すべき動搖を生ぜしめなかつた、其實例以上に適切な証據を要望しない。』(フラー
トン前掲書第一九一頁) ^[173] (第四版註——之れよりもモット適切な實例は、其同じ佛蘭
西が一八七一年より七三年に至る三十ヶ月の間に、右の十倍以上の戰爭賠償を、矢張り
其著しき部分は前同様金屬貨幣で手軽に支拂ひ得たこと是れである。 F. E.) ^[174]

金銀の流れは二重の運動である。一方に於て、それは其産源を發して全世界市場に流れ擴がり、此世界市場で種々なる範圍で種々なる國民の流通界に吸收され斯くして其國內流動溝に流れ込んだり、磨損した金銀貨に取つて代はつたり、贅澤品の材料を供給したり、凝結して退蔵貨幣となつたりするのである(百十一)。此第一の運動は、諸商品に實現した諸々の國民的労働と金屬に實現した金銀産出諸國の

労働との直接の交換によつて仲介される。他方に於て、金銀は種々なる國民の流通界の間を、絶え間なくあちこちと走つてゐる。之れ即ち、爲替相場の絶え間なき變動に伴ふ運動である(百十二)。^[175]

(百十一)『貨幣は、各國民の所要に應じて、各國民の間に分たれる。……そして常に生産によつて誘引される。』(ルトロー前掲書第九一六頁)『絶えず金銀を與へてゐる鑛山は、各國民に斯くの如き必要な超過量を供給するに充分な分量を實際に與へてゐるのである。』(ヴァンダーリント前掲書第四〇頁) ^[176]

(百十二)爲替相場は週毎に騰落してゐる。そして一年内の或特殊な時期には一國に對して順に昂騰し、他の諸時期にはそれと反對に同じだけ逆に昂騰する。』(バーボン著『新貨幣論』第三九頁) ^[177]

ブルデオアの生産の發達したる國々は、銀行の貯水池に多量に集中した退蔵貨幣を、其特殊の諸職分に必要なだけの最小量に制限する。(百十三)。或る若干の場合を除き、退蔵貨幣貯水池が其平均水準を越えて著しく溢れ出すことは、商品流通の停滯或は商品轉形の流れの中絶を示すものである(百十四)。^[178]

(百十三)之れらの種々なる職分は、銀行券に對する兌換準備金たる職分が附け加はるや否や、危険な衝突に陥り得るのである。^[179]

(百十四)『國內貿易のために絶対に必要なる以上の貨幣は不用蓄積であつて、……それが輸出され併びに輸入される場合を除いては、それを保持する國に何等の利益を齎らさなむ』(ジョン・スミス前掲書第一二頁)。「若し我々が餘りに多くの鑄貨を持つてゐる場合は何うするか。我々は即ち其の最も重いものを鑄潰して、光りまばゆき金銀の食器や什器に變へてしまふか、或はそれが缺乏してゐる所又は願望されてゐる所へ、一の商品として送り出すか、乃至は利子の高い所へ利付て貸出すかも知れぬ。」「ウキリアム・ベテ」著『貨幣問答』第三九頁)。「貨幣は國家なる身體の脂肪に過ぎぬ。それが多すぎる爲に實際國家の敏活を障げることは、それが少な過ぎる爲に國家を病氣にするのと同じくしばしばある事である。……脂肪が筋肉運動を滑かにし、營養を供給し不揃ひな空窩を埋め、身體を美しくするやうに、國家の貨幣は其動作を活潑にし、國內が飢饉の時は國外から養ひ、諸々の債務を決済し、……そして國家の全體を美にする——尤も』(と、著者は皮肉に結論する)。「殊に貨幣を甚だ豊かに有してゐる人々を」と(ウキリアム・ベテ」著『愛蘭の政治的解剖』第一四頁(92) [180]

第二篇 貨幣の資本化

第四章 貨幣の資本化

(一) 資本の一般公式

商品流通は資本の出發點である。商品生産と發達したる商品流通即ち商業とは、資本の依つて成立する歴史的前提を成すものである。世界商業及び世界市場は、十六世紀に於て資本の近代生活史の端を開く。^[1]

商品流通の實材的内容即ち種々なる使用價値の交換を問題外に置き、只だ此行程から生ずる經濟的諸形態のみを考へるときは、我々は其最終の産物として貨幣を見出す。商品流通の此最終生産こそ、資本の最初の現象形態である。^[2]

歴史的には、資本は何處に於ても先づ貨幣の形で、貨幣財産⁽¹⁾、商業資本⁽²⁾及び高利貸付資本⁽³⁾として土地所有に對向して居る⁽¹⁾⁽³⁾。然し貨幣を資本の最初の現象形態として認識する爲には、資本の成立史を回顧するに及ばない。其同じ歴史は現に日々我々の眼前に演ぜられてゐる。總ての新資本は先づ、今日でも尙貨幣

として、一定の行程に依り資本に轉化すべき貨幣として、舞臺即ち市場——商品市場、勞働市場、或は貨幣市場——に上つて来る。

(一) 人格上の隷屬關係及び支配關係に基礎を置く土地所有の權力と、貨幣の非人格的權力との對立は、二箇の佛蘭西の諺の中に明瞭に言現はされてゐる。曰く、『領主なき土地はない』(4)。曰く、『金錢に主人なし』(5)。(4)

貨幣としての貨幣と資本としての貨幣とは、最初は只だ其異なる流通形態に依つてのみ區別される。(5)

商品流通の直接の形態は、 $W—G—W$ である。即ち商品から貨幣への轉化、及び貨幣から商品への再轉化である。換言すれば、買ふ爲に賣ることである。然し此形態と並んで又、今一つの之とは格別に異つた形態が発見される。それは $G—W—G$ 即ち貨幣から商品への轉化、及び商品から貨幣への再轉化である。換言すれば、賣る爲に買ふことである。其運動に於て此後の流通を畫く貨幣は、資本に轉化する、資本となる。そして其性質上既に資本である。

$G—W—G$ なる流通を、尙詳しく考へて見やう。此流通は單純なる商品流通と

同じく、二つの對抗した階段を通過する。第一階段 $G—W$ 即ち購買に於ては、貨幣は商品に轉化する。第二階段 $W—G$ 即ち販賣に於ては、商品は貨幣に再轉化する。が、此兩階段を統一したものは、貨幣を商品と交換し、其同じ商品を再び貨幣と交換する處の、即ち商品を賣る爲に買ふ所の、或は賣買の形式的區別に構はないことにするならば、貨幣で商品を買ひ商品で貨幣を買ふ所の總運動である(二)。そして此の全行程が消えて行く結果は、貨幣と貨幣との交換、即ち $G—G$ である。予がもし百磅で棉花二千斤を買ひ、此二千斤の棉花を更らに百十磅に賣るならば、結局予は百磅を百十磅と交換したことになる。即ち貨幣に貨幣を交換したことになる。(6)

(二) 『貨幣を以て商品を購入し、商品を以て貨幣を購入す。』(メルシエード・ラリヴキエール著『政治的社會の自然的及び本質的秩序』第五四三頁)(7)

さて $G—W—G$ といふ流通行程は、若し此迂路に依つて、同じ貨幣價值を同じ貨幣價值に交換しやうとするのであれば、例へば百磅を百磅と交換しやうとするのであれば、全く馬鹿々々しい無内容のものであることは固より明かである。之れよりは寧ろ、百磅を流通の危険に晒らさないうで固く握りしめてゐる貨幣退藏者の

やり方の方が比較にならぬ程單純確實であらう。〔8〕

他方に於て、商人が百磅で購買した棉花を百十磅で再び販賣するにしても、或は百磅なり甚だしきは五十磅なりで賣り飛ばして了はねばならぬにしても、何づれにしても彼れの貨幣は單純なる商品流通の場合例へば穀物を賣り其賣上げ貨幣を以て衣服を買ふ農夫の掌中にある場合とは、全く別種類の獨特斬新なる一運動を畫いたことになる。そこで先づ、 $M—C—M$ 及び $C—M—C$ なる循環運動の間の形態差異の特徴を考へて見なければならぬ。之れに依つて同時に、此形態差異の背後に隠れてゐる實質上の差異が明かになるであらう。

先づ此兩形態に共通のものを調べて見よう。

之等の循環運動は、いづれも同じ二つの對抗した階段 $M—C$ 販賣と、 $C—M$ 購買とに分れる。そしてこれらの階段のいづれに於ても、同じ二つの物的要素、即ち商品と貨幣とが對立して居り、又同じ經濟的扮装をした二人の登場人物、即ち購買者と販賣者とが對立してゐる。いづれの循環運動も同じ對抗した階段の統一であつて、いづれの場合にも此統一は、三人の契約當事者に依つて仲介される。其一人

は只だ賣るのみ、他の一人は只だ買ふのみであり、そして、他の今一人は買つたり賣つたりする。

然し $M—C—M$ 及び $C—M—C$ なる兩循環運動を初めから區別立てゝゐるものは、同じ對抗した流通階段の反對な順序である。單純なる商品流通は、販賣で始まつて購買で終り、資本としての貨幣の流通は、購買で始まつて販賣で終る。前者に於ては商品が、後者に於ては貨幣が、運動の起點及び終點を成す。前者に於ては貨幣が、後者に於ては反對に商品が、全運動を仲介する。

$M—C—M$ なる流通に於ては、貨幣は結局使用價值として役立つ所の商品に轉化する。即ち貨幣は確定的〔8〕に費されてゐるのである。其反對の循環形態 $C—M—C$ に於ては、購買者は販賣者として收入せんが爲めに貨幣を支出するのである。彼れは商品を購入する際に貨幣を流通内に投げ入れるが、それは其同じ商品を販賣することに依つて、再び貨幣を流通から引出さんが爲である。彼れは貨幣を再び自分のものにしようと云ふブルイ考を以てのみそれを手放すのである。即ち貨幣は只だ前貸し〔8〕されるに過ぎない〔三〕〔9〕

(三)「物が再び賣られる爲に買はれる時には、それに使用された金額は前貸しされた貨幣(2)と呼ばれ、それが賣られる爲でなしに買はれる時には、其貨幣額は支出(3)されたものと言はれ得る。」(ジエームス・ステュアート全集。息ジエネラル・サー・ジエームス・ステュアート編、倫敦、一八〇一年刊、第一卷第二七四頁)(10)

W—D—Mなる形態に於ては、同一貨幣が二度位置を換へる。販賣者はそれを購買者から受取つて、更らに他の販賣者に拂ひ渡すのである。商品に對する貨幣の領收を以て始まる全行程は、商品に對する貨幣の拂渡しを以て終る。

所がD—M—Dなる循環形態に於ては反對である。茲では同じ貨幣でなく同じ商品が、二度位置を換へる。即ち購買者は販賣者の手から商品を受取つて、他の購買者の手へ引渡すのである。單純なる商品流通に於て、同一貨幣の兩度の位置轉換が、一の手から他の手への其れの終局的移動を來たすと同じく、此場合には同一商品の兩度の位置轉換は、其最初の起點への貨幣の轉歸を來たす。

貨幣が其起點へ轉歸することは、商品が買はれた時よりも高く賣られるか何うかには拘らない。此事情はたゞ轉歸する貨幣額の大小に影響するだけである。

轉歸その者の現象は、買はれた商品が再び賣られるや否や、即ちD—M—Dなる循環運動が完全に畫かれるや否や、行はれるのである。かくて茲に、資本としての貨幣の流通と、單なる貨幣としての其流通との間に、明瞭に認知され得る差別があるのだ。

M—D—Mなる循環運動は、一の商品の販賣によつて得られた貨幣が、他商品の購買に依つて再び取り去られるや否や、全うされるのである。それでも尙ほ貨幣が其起點に轉歸するとすれば、それはたゞ全過程の更新或は反覆にのみ由るのである。例へば予が一クオターの穀物を三磅に賣り、此三磅を以て衣服を買ふとすれば、其三磅は予に取つて確定的に支出されたのである。予はもはや、それと何等關する所がない。それは衣服商のものである。

所が又新たに一クオターの穀物を賣るとすれば、貨幣は予の手許に戻つて來る。然しそれは最初の取引の結果としてではなく、只だ其れを繰返した結果としてに過ぎぬ。予が此第二の取引を結了して新たに購買するや否や、其貨幣は再び予を遠ざかつてゆく。さればM—D—Mなる流通に於ては、貨幣の支出は其轉歸と何

等關する所がないのである。之れに反して $Q-M$ に於ては貨幣の轉歸は其支出その者の方法に依つて條件づけられてゐる。此轉歸なくんば運動は失敗に終る。或は行程は中絶して未完了である。なぜならば其第二の階段、即ち購買を補充し終結する所の販賣が缺けてゐるから。^[11]

$W-M$ なる循環運動は一商品の極から出發し、そして流通を脱出して消費に歸するところの他の一商品の極を以て結了する。されば消費が欲望の充足が、一口に言へば使用價值が、此循環運動の最後の目的である。之れに反して、 $Q-M$ なる循環運動は、貨幣の極から出發して結局また其同じ極に戻つて來る。故に此循環運動の促進動機及び決定目的は、交換價值その者である。^[12]

單純なる商品流通に於ては、兩極は同じ經濟的形態を有してゐる。即ち何づれも商品である。また同じ大さの價值の商品である。然しそれは質的に異つた使用價值、例へば穀物と衣服とである。生産物の交換、即ち社會的勞働がその中に表現されてゐる異なつた物質の交換は、此場合、運動の内容を成してゐる。

所が $Q-M$ に於ては別である。此循環運動は一見、同じ事の反覆であるが

故に無内容なるかのように見える。兩極とも同じ經濟的形態を有してゐる。即ち何づれも貨幣であり、隨つて何等の質的に異つた使用價值でない。なぜならば、貨幣は正に、諸商品の特殊の使用價值が消え去つてゐる所の、其商品の變容であるから。^[13]

先づ一百磅を棉花と交換し、それから同じ棉花を一百磅と交換するのは、即ち迂路をして貨幣を貨幣に、同じ物を同じ物に交換するのは、馬鹿々々しい又無目的な方法であるかに見える^(四)。一の貨幣額は一般に只だ其大小に依つてのみ、他の貨幣額と區別され得るのである。されば $Q-M$ なる行程は、其内容を自身の兩極の質的差異に負はないで（それはいづれも貨幣であるから）只だ其量的差異にのみ負ふてゐる。最初に投入されたよりも、多くの貨幣が最後に流通から引出されるのである。百磅で買はれた棉花は、例へば $100+10$ 即ち百十磅で再び賣られる。故に此行程の完全なる形態は $Q-M-Q$ である。茲で、 Q は $Q+ΔQ$ 即ち最初前貸しされた貨幣額に一の附け加へをしたものに等しい。そして此附加へ、或は最初の價值以上の餘分を、予は餘剩價值^[14] と呼ぶ。斯くて最初に前

貸された價值は流通に於て自己を保存するのみでない。それはまた流通に於て其價值の大きさを變更する一の餘剩價值を附け加へる、或は自己の價值を増殖する¹⁵⁾。[15] そして此運動が最初に前貸しされた價值を資本に轉化するのである。

(四)。「貨幣に貨幣を交換する者はない」と、メルシェー・ド・ラ・リウキエールは重商主義者等に向つて言ふてゐる(前掲書第四六八頁)。公然「貿易」及び「投機」を取扱つた一書の中に斯う書いてある。「總ての貿易は種類の異つた物の交換に存してゐる。そして利益(商人の?)は正にこの種類の差異から生ずるものである。一斤のパンと一斤のパンとを交換するのでは……何等の利益も無いであらう……故に貿易は有利にも賭博(それは貨幣對貨幣の交換に外ならぬ)と對照させられてゐる。(トマス・コルベット著「個人の富の原因及び様態に關する研究」一名原理貿易及び投機の説明「倫敦、一八四一年刊第五頁」[14])。コルベットは「即ち貨幣に貨幣を交換すること」が、單り商業資本のみならず一切資本の特徴をなす流通形態であることを見ないとはいへ、少なくとも此形態が貿易の一種即ち投機にも又賭博にも共通であることを承認してゐる。所がマカロツクがやつて來て販賣する爲の購買が投機であり、隨つて投機と貿易との區別がなくなることを見出す。「或一人が再び賣る爲に生産物を買ふ所の總ての取引は、實に投機である」と。(マカロツク著「商業實用辭典」倫敦、一八四七年刊、第一〇五八頁[15])。アムステルダム取引所のビンダー(叙情詩人)なるビントは、尙一層無邪氣に斯う述べてゐる。

「商業は賭博で」まつて、(此文句はロツクから借りたものである、貧困者を相手にしては利のないものである。長い間、すべての者を相手に利を得るには、利潤の大部分を適當に合して更らに賭博を開始しなくてはならぬ。)(ビント著「流通及び信用論」アムステルダム、一七七一年刊第二三二頁[16])

勿論「 $M-D-M$ 」に於て其兩極即ち商品と商品、例へば穀物と衣服とが、互ひに量的に異つた價值の大きさであることもあり得る。農夫は其穀物を價值以上に賣り又は衣服を價值以下に買ふかも知れぬ。彼れは又衣服商に瞞されるかも知れぬ。然しながら斯くの如き價值差異は、此流通形態其者に取つては純粹に偶然的たるを失はない。此流通形態は、双方の極例へば穀物と衣服とが互に等價である場合 $D-M-D$ なる行程の如く全然意味を失つてしまふものでない。その双方が等價であると云ふとは、寧ろ此流通形態に於て順當な成行き条件なのである。¹⁷⁾ 購買する爲の販賣の反覆若しくは更新は、此行程それ自身と同じく、其外部に存する終局目的によつて、消費によつて一定の諸欲望の充足に依つて局限される。之に反して販賣の爲の購買に於ては、發端も結末も同じである。即ち貨幣であり、交換價值である。そして既に此事に依つて、右の運動は無限である。成るほど、¹⁸⁾は

① + Δ②となり、100 磅は 100 + 10 磅となる。然し單に質の方面から考へるときは、百十磅は百磅と同じ物、即ち貨幣である。又、之れを量の方面から考へるときは、百十磅は百磅と同じく一の限定された價值高である。若し此百十磅が貨幣として支出されるならば、それは其役目を演じなくなるであらう。資本たることを止めるであらう。流通界から引出されると、それは退藏貨幣に化石する。そして最終審判の日まで其儘に保存されてゐても、それは鏹一文も増大しないのである。^[18]

斯くて苟くも價值の増殖^③が問題である場合には、百磅の價值増殖に對すると同じ要求が、百十磅の價值増殖に對して存してゐる。なぜならば、双方とも交換價値の限定された表章であり、随つて双方とも容積擴大に依つて素面の富^④に近づかうと云ふ同一の使命を帯びてゐるからである。成るほど最初前貸しされた價值百磅は、流通内に於てそれに附け加へられた餘剩價值十磅から、暫らくの間區別されてゐる。然し此區別は纏てまた消へ失せてしまふ。行程の結末に於て、一方には百磅の原價值、他方には十磅の餘剩價值が結果するといふ譯ではない。結果するのば、百十磅と云ふ一箇の價值である。此價值は價值増殖行程を開始すべく、

初の百磅と全く同一の適當した形態に於て存してゐる。貨幣は循環運動の結末に於て、再び其發端として現はれ來たるのである。^[19]

(五)「資本は……原資本と利潤即ち資本の増殖分とに區分される……尤も實地には此利潤は纏て再び資本に組込まれ、それと合せて運用されるのである」(エンゲルス著『國民經濟批評斷片』(アーノルド・ルーゲ及カール・マルクス發行、獨佛年報所載、巴里、一八四四年刊第九九頁)^[20])

斯くて販賣の爲の購買が全うされる各個々の循環運動の結果は、おのづから一の新らしき循環運動の發端を成すのである。單純なる商品流通、即ち購買の爲の販賣は、流通外に存する一の終局目的の爲の、即ち使用價值の占有、或は欲望の充足の爲の手段として役立つ。之れに反して、資本としての貨幣の流通は、それ自體が目的である。なぜならば、價值の増殖は、只、此常に更新される運動の内部にのみ存するものであるから。されば資本の運動は無際限である。^[21]

(六)アリストテレスはクレマチスチーク(貨殖學)にエコノミーク(家計術)を對立させてゐる。彼れはエコノミークから出發する。エコノミークは獲得術である限り、生活に必要な、又家庭若くは國家に有用な財貨の調達に限られてゐる。『眞の富(オ・アレチ)』

ス・プルトス⁽²¹⁾は斯くの如き諸々の使用価値より成る。なぜならば、善き生活をなすに足る此種の所有物の分量は、無制限ではないからである。所が茲に、もう一種の獲得術がある。それは特に又た當然に、クレマチスチクと呼ばれべきものであつて、之によれば富及び所有物には何等の制限が存しないように見える。商品貿易(エ・カピリケ⁽²²⁾)は字義通りに云へば小賣商業と云ふことである。そしてアリストテレースが此形式を採用した所以は、其中に使用価値が優越の地位を占めてゐるからである(は本来クレマチスチクに屬するものではない。なぜならば、其處では交換は只だ、彼等自身(購買者及び販賣者)に必要な物にのみ關係してゐるからである。『彼れは更に説明する。それ故にまた、商品貿易の本来の形態は物々交換であつた。然し其れが擴大すると共に、必然的に貨幣が生じて來た。貨幣の發明と共に、物々交換は必然的にカピリケ、即ち商品貿易に展化しなければならなかつた。そして此貿易は其本来の傾向に反對してクレマチスチク、即ち貨殖の術に成化した。そこでクレマチスチクは左の點に於てエコノミーと區別される。即ち『クレマチスチクに取つては、流通は富の源泉である⁽²³⁾。そしてクレマチスチクは貨幣を中心として回轉してゐるように見える。なぜならば貨幣は、此種の交換の發端であり又結末であるから⁽²⁴⁾。斯くてクレマチスチクの努力が追求する如き富もまた無制限である。目的への手段のみを追求する諸技術は無制限ではない(目的その者がそれに限界を置くから)のに、其標的を手段としてでなく、終局の目的として追求する總ての技術が其努力に於て無制限である(それは常に

ますます其標的に近づかうと努めるから)如く、うに、此クレマチスチクにあつても亦、其標的には何等の制限もなく、其標的は絶対の致富と云ふことである。クレマチスチクでなく、エコノミーに一の制限があるのである。……後者は貨幣そのものとは異つたものを目的とし、前者は貨幣の増殖を目的としてゐる。……互に折り重つた之等の兩形態を混交することから、或人々は貨幣を無限に保存し増殖することを、エコノミーの終局標的と考へるようになった。』(アリストテレース著『共和論』ベツカー版、第一篇、第八章及隨所)⁽²⁵⁾⁽²²⁾

此運動の意識的負擔者として、貨幣所有者は資本家となる。彼れの人格、或は寧ろ彼れのポケットは、貨幣の出發點であり又た歸着點である。かの流通の客觀的内容即ち價値の増殖は、彼れの主觀的目的である。そして抽象的の富をます／＼多く占有することが彼れの活動の專一の促進動機である限りに於てのみ、彼れは資本家として、即ち人格化された意志と意識とを附與せられた資本として働く。故に使用價値は決して、資本家の直接の目的として取扱はるべきでない^(七)。個々の利得も亦そのように取扱はるべきでなく、只だ利得行爲の不休の運動のみが左様に取扱はるべきである^(八)。此絶対的の致富衝動、價値に對する此熱情的な追求

(九)は、資本家にも貨幣退藏者にも共通のものである。然しながら貨幣退藏者は只だ狂氣の資本家に過ぎないのに、資本家は正氣の貨幣退藏者である。貨幣退藏者が貨幣を流通から救ひ出さうと努めることに依つて追求する價値の休みなき増殖を(十)彼れよりも一層利口な資本家は常に新たに貨幣を流通に委することに依つて達成するのである(十一)。(23)

(七)『商品』は使用價値の意味は貿易資本家の究竟目的でない。…貨幣が彼れの究竟目的である。(トマス・チアーマース著『經濟學に就て』第二版、倫敦一八三二年刊、第一六六頁)(24)

(八)『商人は過去既得の利益を無視する譯ではないけれども、彼の標的は常に將來に向けられてある』(アントニオ・ヂエノヴエジ著『民事經濟教課』一七六五年刊、クスドチ編、伊太利經濟名著集、近世篇、第八卷第一三九頁)(25)

(九)『利潤に對する消し難き熱情、呪ふべき黄金渴望』が、常に資本家を指導する。『マカロツク著『經濟學原論』倫敦、一八三〇年刊、第一七九頁)(26)。勿論此見解はマカロツク及び其一味の者共が理論上の諸々の難境、例へば生産過多の取扱ひに際して、右の同じ資本家をば、只だ使用價値のみを念頭に置き、加ふるに靴、帽子、玉子、キャラコ、その他極めて有りふれた種類の使用價値に對して眞個の吸血鬼的渴望を展開する所の、一の善良なる

市民にしてしまふことを妨げないのである。(26)

(十)『ツザイン』Masse は貨幣退藏に對する希臘語獨特の言現はしである。其れと同じく英語の『ツ・セーヴ』to save は同時に『救ふ』、『貯える』の兩意義を有してゐる。(27)

(十一)『物は、其發展に於て有せざる無限性を其循環に於て有してゐる。』(ガリアニ)(28)

商品の價値が單純流通に於て取る獨立の形態即ち貨幣形態は、たゞ商品交換のみを仲介するに過ぎぬ。そして其は運動の最後の結果に於て消え失せる。之に反しての——なる流通に於ては、商品及び貨幣の双方はたゞ價値その者の異つた存在様式として働くに過ぎぬ。即ち貨幣は價値の一般的な存在様式として、商品は其特殊の謂はゞ假裝したる存在様式として(十二)。價値は絶えず一の形態から他の形態に推移し——此運動に於て失はれるとなしに——斯くして一の自動的主體に化するのである。自ら増殖する價値が其生涯の循環運動に於て代る取る特殊の現象形態を確と掴むときは、次の如き命題が得られる。曰く、資本は貨幣である、資本は商品である(十三)(29)。然し實際のところ、價値は此場合、貨幣及び商品と云ふ形態の絶えざる變化のもとに、みづから自身の大さを變更する所の、

原價值としての自分自身から餘剩價值としての自分自身を分出する所の、即ちみづから價值を増殖する所の一行程の主體となるのである。なぜならば、價值が依つて餘剩價值を附け加へる運動は、其の價值自身の運動であつて、随つて其増殖は自己増殖であるから。價值は、それが價值である故に、價值を附け加へると云ふ玄妙な性質を得たのである。それは生きた雛を産む。或は少なくとも黄金の玉子を産むのである。⁽³⁰⁾

(十一)『資本を形成するものは物質でなく、其物質の價值である。』(ジアン・パチスト・セー著『經濟學』巴里、一八一七年刊、第一卷第四二八頁)⁽³¹⁾

(十二)『生産上の目的に使用される通貨(カレンシー)は資本である。』(マクラウド著『銀行業の理論及實地』倫敦、一八五五年刊、第一卷第一章)⁽³²⁾。『資本は商品である。』(ジェームス・スミル著『經濟學要論』倫敦、一八二一年刊、第七四頁)⁽³²⁾

價值は斯様な貨幣形態及び商品形態を或時は取り或時は脱ぎ捨て而も此變化に於て自己を保存し擴大する行程の能動的主體⁽³³⁾として、先づ第一に、其れに依つて自己同一性⁽³⁴⁾が確認せらるゝ獨立の一形態を必要とする。そして此形態を、價值はたゞ貨幣に於てのみ有してゐる。それ故に貨幣は、總ての價值増殖行程の起

點及び終點を成すのである。價值は百磅であつたが、今では百十磅である。然し貨幣それ自體は、この場合價值の一形態として働くに過ぎぬ。價值は二つの形態を有してゐるからである。商品形態を取らないでは、貨幣は資本にならぬ。されば貨幣は茲では、貨幣退藏の場合の如く、商品に對抗しては現はれて來ない。資本家は知つてゐる。有らゆる商品は如何に見すばらしく見えても、如何に惡臭を放つてゐても、眞實に貨幣であり、內的に割禮を受けた猶太人であり、その上貨幣からいふ多くの貨幣を造り出す奇蹟的手段であることを。⁽³³⁾

單純なる流通に於ては、諸商品の價值はその使用價值に對して、高々貨幣てふ獨立的な形態を受ける丈なのに、其同じ價值は茲では突然、一の進行しつゝある、自身自身を動かしてゆく實體として現はれる。此實體に取つて、商品も貨幣も共に單なる形式に過ぎないのである。

だが、それのみではない。價值は商品關係を表現する代りに、今や謂はゞ自分自身との私的關係に入る。彼れは恰も父なる神が子なる神としての自分自身から分化すると同じく、餘剩價值としての自分自身から原價值として分化する。然し双

方とも同年齡であつて、事實上一人格をなしてゐる。なぜならば、十磅といふ餘剰價値に依つてのみ、前貸しされた百磅は資本となるからである。そして其れが資本となるや否や、即ち子が生れ、また子に依つて父が生れるや否や、其双方の差別は再び消え去り、二者は一となる、即ち百十磅となる。

斯くて價値は進行しつゝある價値、進行しつゝある貨幣となり、そして斯くの如きものとして資本となる。それは流通より來たつて再び流通に入り、流通に於て自己を保存し増大し、より大きなものとなつて流通から引つ返し、常に新たに同じ循環運動をやり直す(十三)。 $G-W-G'$ 、即ち貨幣を生む貨幣⁽³³⁾、之れ資本の最初の通譯者、即ち重商主義者の口から出た資本の定義である。(34)

(十三)「資本……即ち永劫の、自己を倍加する價値。」(シスモンデ著『經濟學新原理』第一卷、第九〇頁)⁽³³⁾。

賣る爲めに買ふこと、或は一層完全に言ふなら、より高く賣る爲に買ふこと、即ち $G-W-G'$ は、成るほど資本の一種なる、商業資本⁽³⁵⁾にのみ特有の形態であるよ

うに見える。然し工業資本⁽³⁶⁾も亦た、商品に轉化し、そして商品の販賣に依つて、より多くの貨幣に再轉化する貨幣である。購買と販賣との間だに、流通界の外になされる諸行爲は、運動の此の形態に些かも變化を與へぬ。最後に利付資本⁽³⁷⁾に於ては、 $G-W-G'$ なる流通は短縮されて現はれる。即ち中間段階なしに直接その結果に於いて、謂はゞ碑銘文體⁽³⁸⁾で、 $G-W-G'$ として、換言すれば、より多くの貨幣に等しい貨幣として、即ち自分自身よりも大きな價値として表現されるのである。

されば實際に、 $G-W-G'$ は直接流通界に現はれた儘の資本の、一般的公式である。⁽³⁵⁾

(二) 一般的公式の矛盾

貨幣が資本に轉化する流通形態は我々が之まで説いて來た、商品や價値や貨幣や、流通その者やの性質に關する總ての法則に矛盾してゐる。此流通形態を單純なる商品流通から區別するものは、同じ二つの對抗した行程、即ち販賣と購買との轉倒された順序である。斯くの如き純形式上の區別が、如何にして之等の行程の

性質を魔法的に變更せしめ得るであらうか。

そのみではない。此轉倒は、互ひに取引する當事者三人の中たゞ一人にとつてのみ存在してゐるのである。予は資本家として、Aから商品を買ひ、それを再びBに賣る。然るに單純なる商品所有者としては、予はBに商品を賣り、然る後にAから商品を買ふ。予の取引先なるA、B兩人に取つては、此區別は存在して居らぬのである。彼等は只、商品の購買者或は販賣者としてのみ現はれ來たるに過ぎぬ。予自身はいづれの場合にも、單純なる貨幣所有者或は商品所有者、即ち購買者或は販賣者として彼等に對立してゐる。そしてまた實に双方の取引に於て、一方の人に向つては只だ購買者としてのみ、他方の人に向つては只だ販賣者としてのみ、即ち一方に向つては只だ貨幣としてのみ、他方に向つては只だ商品としてのみ對立してゆくのであつて、双方のいづれに向つても、資本若くは資本家として、或は貨幣若しくは商品以上の何物かの代表者として、或は貨幣若くは商品の効果以外の他の効果を及ぼし得べき何者かの代表者としては、對立してゆかないのである。³⁶予に取つて、Aからの購買とBへの販賣とは、一の系列を成してゐる。然しこの

兩行爲の間の聯絡は、單り予にとつてのみ存在してゐるのである。Aは予とBとの取引に就て氣をもまない。又たBは予とAとの取引に就て氣をもまない。若し予が彼等に向つて、兩取引の順序を轉換することに依つて、予の得るべき特別の利益のことをでも明かにするならば、彼等は予に證明するであらう。予が取引の順序について間違へてゐること、また全取引は購買に始まり販賣に終つたのでなく、それと反對に、販賣に始まり購買に終つたのであることを。實際、予の最初の行爲即ち購買は、Aの立場からすれば販賣であつた。そして予の第二の行爲即ち販賣は、Bの立場からすれば購買であつた。之に満足しないで、AとBとは更らに説明するであらう。此取引の全系列は餘計なこと、まだベテンであつたと。

Aは商品を直接Bに賣り、Bはそれを直接Aから買ふであらう。斯くて全取引は普通の商品流通の一方的行爲、即ちAの立場からすれば單なる販賣に、又Bの立場からすれば單なる購買に萎縮する。されば我々は、取引順序の轉倒に依つて、單純なる商品流通の範圍を越えなかつたのである。で我々は寧ろ、此單純流通がそ

れに入り込む諸價値の増殖、即ち餘剩價値の形成を許すか何うかを見なければならぬ。(37)

「流通行程が、單なる商品交換として表現される場合の形態に於ける流通行程を取つて見よう。双方の商品所有者が互ひに商品を購入し合ひ、其相互の貨幣請求權の残高を支拂日に清算する場合が、いつも其れだ。貨幣は此場合、諸商品の價値を其價格で表章すべく計算貨幣として役に立つ。が、諸商品それ自體に向つて物的に對立してゆかない。使用價値が問題である限り、どちらの交換者も利得しうることは明かである。どちらも使用價値として自分に不用な商品を讓渡し、自分が使用に要する商品を受取るからである。而も此利用は唯一つのものではないかも知れぬ。葡萄酒を賣つて穀物を買ふAは、恐らく、穀物を作る農夫Bが同じ労働時間で生産し得るよりも一層多くの葡萄酒を生産するであらう。そして農夫は同じ労働時間に於て、葡萄栽培者Aが生産し得るよりも一層多くの穀物を生産するであらう。かくてA、B各自が交換なしに、夫々葡萄酒と穀物とを自分の爲に生産しなければならぬような場合に、比ぶれば、同じ交換價値に對してAは、より多

くの穀物を受け、Bは、より多くの葡萄酒を受ける。されば使用價値に關しては「交換は双方とも利得する取引である」(十四)と言ひ得る。(38)

(十四)「交換は當事者双方とも常に(一)利する玄妙な取引である。」(デスチユット・ド・トラシイ著『意志及び其効果論』巴里、一八二六年刊、第六八頁)。(註)此書は同著者の『經濟學論』よりも後に現はれたものである。(39)

交換價値の場合は違ふ。「澤山の葡萄酒を所有し、少しの穀物をも所有して居らぬ一人の男が、澤山の穀物を所有し、少しの葡萄酒をも所有して居らぬ一人の男と取引する。そして彼等の間で五十の價値ある小麦が、葡萄酒に於ける五十の價値と交換される。此交換は一方に對しても他方に對しても、交換價値の何等の増大でない。なぜならば交換以前に既に、彼等の名は此取引に依つて得た價値に等しい一の價値を有してゐたからである」(十五)。貨幣が流通要具として商品の間に介在するやうになり、購買と販賣との行爲が明に別々のものとなるに至つても、問題は少しも變化を受けない(十六)。商品價値は、商品が流通に入る以前既に其價格に於て表現されてゐる。従つてそれは流通の前提であつて、結果ではない(十七)。(40)

(十五)メルシエード・ラ・リヴキエール前掲書第五四四頁(40)

(十六)之れらの兩價值の一方が貨幣であつても、或は其双方とも普通の商品であつても、それは何うでも宜いのである。(メルシエード・ラ・リヴキエール前掲書第五四三頁)

(十七)「價值を決定するものは契約者ではない。價值は契約前にすでに決定されるものである。」(ルトローヌ前掲書第九〇六頁(41))

抽象的に觀察すれば、換言すれば、單純なる商品流通の内在的諸法則から流れ出たのでない諸事情を問題外に置くならば、其流通の中に於ては一の使用價值が他の使用價值に代はられることを除き、商品の轉形即ち單なる形態變化の外に何事も行はれないのである。同じ價值は即ち體化したる社會的勞働の同じ分量は、同じ商品所有者の掌中に、最初は彼れの商品の姿に於て、次には其商品が轉化してゆく貨幣の姿に於て、最後に其貨幣が再轉化してゆく商品の姿に於て、其まゝ存してゐる。此の形態變化は、價值の大小に於ける何等の變化をも含まない。然し商品の價值その者が此行程に於て受ける變化は、其貨幣形態の一變化に限られてゐる。此貨幣形態は先づ販賣に提供された商品の價格として存在し、次ぎに一の貨幣額として(但し此貨幣額は既に價格に於て表章されてゐたものである)最後に

一の等價商品の價格として存在してゐる。此形態變化が、それ自體として、價值大小の變化を含まざることは、五磅紙幣をソヴェレオン貨、半ソヴェレオン貨及び志貨に兩替する場合と同じである。かくて商品の流通がたゞ其價值の形態變化のみを條件づける限りに於て、それは現象が純粹に進行する場合には、等價と等價との交換を條件づける。されば俗學的經濟學は價值の何物たるやを知らないといへ、その一流のやり方で流通現象を純粹に考察しやうとする時には、いつも需要と供給とが一致すること、即ち其影響が一般に止むことを假定してゐる。されば使用價值に關しては、交換者は双方とも利得しうるのに、交換價值の上には彼等は双方とも利得しえないのである。交換價值に於ては寧ろ、「均等の存する所、何等の利潤なし」(十八)。成るほど商品は、其價值とは一致しない價格で販賣され得る。然し此の不一致は、商品交換の法則の侵害として現はれる(十九)。其純粹の姿に於ては、商品交換は等價との交換である。随つて價值を増殖する何等の手段でもないのである(二十)。(42)

(十八)ガリアニ著『貨幣論』クストヂ編伊太利經濟名著全集近世編第四卷第二四四頁(40)(43)

(十九)『外部の事情が價格を増し又は減ずる時は、交換は交換當事者の一方に不利となる。即ち均等の利益に侵害される。然し此侵害は右の外部の事情に由るのであつて、交換其ものから生ずるものではない。』ル・トロイヤ前掲書第九〇四頁〔44〕

(二十)『交換は其性質上均等の價值の間に行はるゝ均等の契約である。随つてそれは受取つただけと與へるものであるから、致富の方法ではない。』(ル・トロイヤ前掲書第九〇三頁)〔45〕

されば、商品流通を餘剩價值の源泉として示そうとする企ての背後には、多くの場合一の物對物使用價值と交換價值との一の混同が潜んでゐる。かくて例へばコンヂアツクは斯う言つてゐる。『商品交換に於て等しき價值に對して等しき價值が交換されると云ふは誤りである。それと反對に、兩契約者の各は、常に、より大きな價值に對してより小さな價值を提供する。若し實際いつも等しき價值が交換されるならば、何方の契約者も何等利得する所がないであらう。然るに双方共利得してゐる、或は利得すべき筈である。なぜか。物の價值は單に我々の欲望に對する其物の關係の中にのみ存してゐる。一方に取つてより多くある物は他方に取つてより少き物一方に取つてより少い物は他方に取つてより多き物で

ある。我々は自身の消費に缺くべからざる物を販賣に付すとは、假定されないのである。我々は自身に必要な物を受け取る爲めに、自身に不用な物を手放すやとする。我々はより多くの爲めに、より少しを與へやうとする。交換された物の各々が價值に於て同一量の金に等しかつた場合にはいつも、交換に於て等しき價值に對して等しき價值が提供されると判斷するは當然であつた。しかし他方今一つの考察が、計算の中に入らねばならぬ。問題は、我々が双方とも、何か必要なものに對して餘計なものを交換するか何うかといふことである。』(二十一)〔46〕

(二十一)コンヂアツク著『商業と政府』(一七七六年刊)ギョーマン全集經濟雜纂篇、巴里一八一七年刊、第二六七頁〔47〕

以上によつて如何にコンヂアツクが使用價值と交換價值とを混用したばかりでなく、又眞に小供らしく、商品生産の發達した一の社會に、生産者がみづから其生活資料を生産したゞ自家の必要を超えた過剩部分、即ち餘分のみを、流通内に投ずると云ふ一の状態を押しつけてゐるかゞ分る(二十二)。而かも此コンヂアツクの論

法は近世經濟學者の間にしばしば繰返される。殊に商品交換の發達したる姿容即ち商業が餘剩價值を産出するものであるとを示そうとする場合に於て、そうである。例へば斯う言ふ者がある。「商業は諸生産物に價值を附加へる。なぜならば同じ諸生産物は生産者の手中に於てよりも消費者の手中に於て、より多くの價值を有してゐるからである。故に商業は嚴密に生産行爲と見做さねばならぬ」と(二十三)。然し商品は、始めには使用價值に對し、次ぎには其價值に對してと云ふ風に、二重に支拂はれるものではない。そして商品の使用價值は販賣者に取つてよりも購買者に取つて、より有用であるとするならば、その貨幣形態は購買者に取つてよりも販賣者に取つて、より有用である。それでなくて、販賣者は其れを賣るであらうか。そこで同様に斯うも言ひ得るであらう。即ち購買者は例へば商人の靴下を貨幣に轉化することに依つて、嚴密に一の『生産行爲』を全うするのであると。(48)

(二十二) さればルト・トロイヤは、其友コンチヤツクに對して頗る正當に答へてゐる。「一の形成された社會に於ては、如何なる種類の物にも過利はない。」同時に又、彼れはコンチ

ヤツクを揶揄して言ふ。「若し双方の交換者が同じ額のより少ないものに對して、同じ額のより多いものを受けると、彼等は双方とも同じ額を受けると。」コンチヤツクは、交換價值の性質に就てまだ些かの豫感をも有してゐないので、それでウキルヘルム・ロツシアー先生は自分のあどけなき思想の適當な保證人に彼れを選んだ次第である。ロツシアー著『國民經濟原論』第三版一八五八年刊(49)を見よ。

(二十三) エス・ビー・ニューマン著『經濟學要論』アンドヴァー及ニューヨーク、一八三五年刊、第一七五頁(49)

等しい交換價值の諸商品、或は諸商品と貨幣、即ち諸々の等價が交換される場合何人も明かに自身が流通に投入するより以上の價值を流通から引出さない。此場合には、餘剩價值の何等の形成も行はれぬ。所が商品の流通行程の純粹の形に於ては、諸々の等價の交換を必要とする。が、物事は實際には、純粹の形では進行しない。そこで我々は諸々の非等價の交換を假定して見よう。

如何なる場合にも、商品市場に於ては只だ商品所有者が商品所有者に對立してゐる。そしてこれらの人々が相互に對して行使するところの力は、畢竟彼等の商品の力に外ならないのである。諸商品の實材上の差異は、交換の實材的動機であ

つて、商品所有者をして互ひに相倚らしめる。なぜならば彼等の中の誰もが、自身自身の欲望の對象を己が掌中に有せず、彼等の中の各が他人の欲望の對象を己が掌中に有してゐるからである。諸商品の使用價値の斯くの如き實材的差異の外に、尙た一つの區別が諸商品の間に存してゐる。それは即ち商品の自然形態と商品の轉化した形態との間の、即ち商品と貨幣との間の區別である。斯くて諸々の商品所有者はたゞ、販賣者即ち商品の所有者として、及び購買者即ち貨幣の所有者として區別されるに過ぎぬ。

そこで今、何等かの説明し難き事柄に依つて、商品を其價値以上に賣る特權、例へば百に値してゐる商品を百十で、即ち十パーセントの名目上の價格引上げを以て賣る特權が、販賣者に與へられたとして見よ。販賣者はかくして、十の餘剩價値を收得する。然し彼れは、販賣者であつた後に購買者となる。今度は第三の商品所有者が、販賣者として彼れに出くわす。そして此商品所有者も亦、商品を十パーセント方高く賣る特權を樂むのである。斯くて右の人が販賣者として十を利得したのとは、畢竟また購買者として十を失ふ所以であつたのである(二十四)。かくて全體

の歸する所は、實際に於て結局左の通りである。即ちすべての商品所有者は、其商品を互に十パーセントだけ價値よりも高く賣り合ふのである。此事は彼等が商品を價値通りに賣ると全く同じとなのである。諸商品の斯くの如き一般的な名目上の價格引上げは、商品價値が、例へば金の代りに銀で評騰される場合と同じ結果を齎らすのである。諸商品の貨幣名、即ち價格は昂騰するであらう。然し其の價値比例は不變の儘であらう。

(二十四)『生産物の名目價値の増大に依つて……販賣者は富まされぬ……なぜならば彼等は販賣者として利得する所のものを、購買者としての資格に於て正に支出するからである。』(匿名著『諸國民の富の根本的諸原理』倫敦、一七九七年刊第六六頁)⁽⁵⁰⁾

之れと反對に、今度は諸商品を價値以下に買ふことが、購買者の特權であると假定して見よう。此場合にはもう、購買者が再び販賣者となることを考へるに及ばない。彼は購買者となる前に販賣者であつた。彼は購買者として十パーセントを利得する前に、既に販賣者として十パーセントを損失してゐたのである(二十五)。斯くて一切はまた元の儘である。⁽⁵⁰⁾

(二十五) 或人が二十四リールヴルの價值ある一定量の生産物を、十八リールヴルで販賣することを餘儀なくされたとするならば、彼れも此賣上げを以て購買せんとする時、從來二十四リールヴル拂つてゐたものを十八リールヴルで得るであらう。(ル・トロイヤ前掲書第八九七頁)

かくて餘剩價値の形成随つてまた貨幣の資本化は、販賣者が其商品を其價値以上高く賣るといふことに依つても、また購買者がそれを其價値以下に安く買ふといふことに依つても説明され得ない(二十六)。(51)

(二十六) 故に各販賣者は、他の販賣者の商品を常に高く買ふことを承認の上、自分の商品を常に價上げすることが出来る。之れと同じ理由に依り、消費者は其販賣する品の一定の價格低減を承認して始めて、其購買する品に對し常に、より安く支拂ふことが出来るのである。(メルシエード・ラリウグキエール前掲書第五五五頁)

問題は決して筋違ひの事柄を持たむことに依つて、即ちトレンス大佐等に從つて次の様に言ふことに依つて、單純化されるものでない。「有效なる需要は、直接の交換に依つてにせよ、或は間接のそれに依つてにせよ、消費者が諸商品に對して：其生産に要するよりもより大きな或る資本部分を提供すると云ふ其能力及び意向(1) (5) の中に存してゐる」(二十七)。流通に於て、生産者と消費者とは只販賣者及

び購買者としてのみ對立してゐる。生産者にとつての餘剩價値は、消費者が商品に對して其價値以上に高く支拂ふことから生ずると主張するのは、商品所有者は販賣者として餘りに高く賣る特權を有してゐると云ふ、單純な命題に粉飾を施すことに外ならぬ。販賣者は商品を自身で生産した。或は其生産者を代表してゐる。然し購買者もそれに劣らず、自身の貨幣に表現されてゐる商品のみづから生産した。或は其生産者を代表してゐる。随つて生産者が生産者に對立してゐるのである。彼等を區別立てるものは、一方が買ひ、他方が賣ると云ふことである。商品所有者が生産者なる名義のもとに商品を其價値以上に高く賣り、消費者なる名義のもとに商品に對して餘りに高く支拂ふと云ふことは、問題の解決に向つて唯の一步も我々を近づけて呉れるものではない(二十八)。(52)

(二十七) ロバート・トレンス著『富の生産に關する一論文』(倫敦、一八二一年刊、第三四九頁)

(二十八) 利潤が消費者に依つて支拂はれると云ふ考は、確に不條理極まるものである。消費者とは誰れのことだ? (デヨー・ヂ・ラムセー著『富の分配に關する一論文』エヂンバラ、一八三六年刊第一八四頁)

されば、餘剩價值が名目上の價格引上げから、或は商品を餘りに高く賣ることの販賣者の特權から生ずると云ふ妄想の徹底的代表者等は、賣ることなしに只だ買ふのみなる、随つてまた生産することなしに只だ消費するのみなる一階級を假定する。斯くの如き一階級の存在は、我々の之れまで到達した立場、即ち單純なる商品流通の立場からは、尙いまだ説明され得ないのである。然し我々は先きを見越さう。即ち斯くの如き一階級が依つて絶えず購買する貨幣は、交換なしに、無料で權利上及び暴力上の隨意の名義に基いて、商品所有者その者から絶えず此の一階級へ流れて行かなければならぬ。斯くの如き階級に向つて商品を價值以上に高く賣りつけることは、無料で渡された貨幣を一部分吳魔化し取り返すと云ふに過ぎぬのである(二十九)。小亞細亞の諸都市は、斯くの如くにして古羅馬に年貢金を納めてゐた。そして此貨幣を以て羅馬は彼等から諸商品を買つた、餘りに高く買つた。即ち小亞細亞人等は其の征服者たる羅馬人等から、商業の方法によつて年貢金の一部分を欺き取り返しつゝ、彼等羅馬人に一杯食はせたのだ。それでも小亞細亞人等は依然として一杯食はされた人々たるを免れなかつた。彼等の商品は、

依然として彼等自身の貨幣で支拂はれてゐたのである。斯くの如きは決して致富、或は餘剩價值形成の方法でない。(54)

(二十九)「或人が(其賣品に對する)需要が無くて困つてゐる場合、マルサス君は其財貨を買つて貰ふ爲に、誰れかに貨幣を與へることを、彼れに薦めるであらうか」と、或リカルド學徒は憤然としてマルサスに問ふてゐる。蓋しマルサスは其の門弟なる技師チアーマースと同じく、單なる購買者或は消費者の階級を経済學的に讚美してゐるのである。(匿名者著「最近マルサス氏の唱道したる、需要の性質及び消費の必要に關する諸原理の研究」倫敦、一八二一年刊、第五五頁(55))

されば我々は、販賣者は購買者であり、購買者は販賣者である所の、商品交換の限界内に止まらう。我々の困難は恐らく、我々が諸々の關係者を個人として、只だ人格化した範疇としてのみ解した結果であらう。(56)

商品所有者Aは其仲間のB、或はCが如何に熱心に之れを欲するも(56)Aに對して報復することが出來ないで其翻弄する所となる程に、しかく機敏であるかも知れぬ。Aは四十磅の價值ある葡萄酒をBに賣り、それと交換に五十磅の價值ある穀物を獲得する。Aは其四十磅を五十磅に轉化した。より、少ない貨幣からより

多くの貨幣を造つた。そして其商品を資本に轉化した。そこで尙、立入て考へて見やう。

交換以前には、我々はAの手中に四十磅分の葡萄酒、Bの手中に五十磅分の穀物即ち九十磅の總價值を持つてゐた。交換後には、我々には矢張り九十磅と云ふ同じ總價值を持つてゐる。流通價值は鏗一文も増大しないで、其A・B間への配分が變化したのである。他方に取つて減損價值である者は、一方に取つて餘剩價值として現はれ、他方に取つて負數として現はれる者は、一方に取つて正數として現はれる。若しAが交換と云ふまぎらかす形式なしにBから直接十磅を盗んだとしても、右と同じ變化が生じたであらう。諸々の流通價值の總高が、其配分上の如何なる變化に依つても決して増大しないことは明かである。之れ恰も一ユダヤ人がアンナ女王時代のファージング貨⁽⁵⁶⁾一箇を一ギニー⁽⁵⁷⁾に賣つても、それで一國内の貴金屬の分量が少しも増大しないのと同じである。一國に於ける資本家階級全體は、自分みづからを出しぬいて儲けることは出来ないのである⁽³⁰⁾。

(30) デスチユト・ドラシーは、佛蘭西學士會員であつたけれども、恐らくは、それであつ

たが故に、之れと反對の見地を抱いてゐた。彼れは言ふ。工業資本家は「總ての物を其生産に要したよりも高く賣る」ことに依つて其利潤を得る。『然らば彼等は誰れに賣るか。先づ互に賣り合ふのである』と。(前掲書第二三九頁)

されば如何ほど廻はしても捻つても、事實は依然として同じに止まつてゐる。

諸々の等價が交換される場合には、何等の餘剩價值を生じない。また諸々の非等價が交換される場合にも、何等の餘剩價值を生じない⁽³¹⁾。流通或は商品交換は何等の價值を創造しないのである⁽³²⁾。

(31) 『二の等しい價值の交換は、社會に存する價值の總量を増減しない。等しからざる價值の交換も亦……一方の富を奪つてそれを他方の富に加へるにしても、決して社會的價值の總量を増減しない。』(ジアン・バチスト・セー前掲書第四三四及四三五頁)。セーは此命題を(勿論その結果に頓着なく)、殆ど一語一語重農派から借りて來てゐる。彼れが、當時忘れられた重農派の著書文章を、自分自身の『價值』の増大の爲に如何なる風利用したかは、次ぎの例證に依つて明かであらう。セー君の『最も有名な命題』生産物を以てのみ生産物を買ふ(前掲書第四三八頁)は重農派の原文では『生産は生産を以てのみ支拂はれる』(ルト・ローヌ前掲書第八九九頁)となつてゐる。⁽⁵⁸⁾

(32) 『交換は生産物に少しも價值を附與しない。』(エフ・ウエーランド著『經濟學の要素』ボストン、一八五三年刊、第一六八頁)⁽⁵⁹⁾

斯くて、資本の基本形態に對する、即ち資本が近世社會の經濟的組織を決定する所の形態に對する、我々の分解に於て、何ゆゑ其の通俗的な謂は、洪水前期の姿容即ち商業資本⁽⁶⁰⁾及び高利資本⁽⁶¹⁾が、最初全く顧みられずに置かれてあるかは、今や明かになつてゐる。⁽⁶⁰⁾

固有の商業資本に於ては、 $\frac{C}{M}$ なる形態、即ちより高く販賣する爲の購買は、最も純粹に現はれる。他方に於て、此資本の全運動は流通界の域内に行はれる。然し流通その者から、貨幣の資本化を、餘剩價値の形成を説明するとは不可能であるから、諸々の等價が交換されるや否や、商業資本は全く不可能の者として現はれる。隨てそれは、只、購買する商品生産者と販賣する商品生産者との間に寄生蟲的に割込んだ商人が、其双方に對して二重に利得すると云ふとにのみ基因する者のように見える。此意味に於て、フランクリンは言つてゐる。「戦争は盜掠である。商詐業は偽である」と⁽³⁴⁾。商業資本の價値増殖が、商品生産者に對する單なる詐偽と云ふことから説明されない爲めには、中間段階の長い連鎖が必要である。其連鎖は、商品流通と其單純なる諸要因とが我々の唯一の前提を成してゐる今の

場合、まだ全く缺けてゐるのである。⁽⁶¹⁾

(三十三)「諸々の不變的な等價の支配下にあつては、商業は不可能であらう。」(ジイ・オプダイク著經濟學論、紐育、一八五一年)⁽⁶²⁾。「實體價値と交換價値との區別には、一の事實が其根柢に横つてゐる。即ち一物の價値は、商業に於て其物に對し與へられる、謂ゆる等價とは異なるものであること、即ち此等價は何等の等價でない」と云ふことである。」(フリードリヒ・エンゲルス前掲書第九六頁)⁽⁶²⁾

(三十四)ベンジアミン・フランクリン全集第二卷、スバークス版、「國民的富に關して吟味せらるべき諸々の位置」の中⁽⁶³⁾。

商業資本に通用することは、高利資本には尙更ら通用する。⁽⁶³⁾ 商業資本に於ては、兩極即ち市場に投ぜられる貨幣と、市場から引出される増大した貨幣とは、少なくとも賣買に依つて流通の運動に依つて、仲介されてゐる。高利資本に於ては、 $\frac{C}{M}$ なる形態は、仲介なしの兩極 $\frac{C}{M}$ 、即ちより多くの貨幣と交換される貨幣に短縮されてゐる。之は貨幣の性質に矛盾し、隨つて商品交換の立場からは説明すべからざる一形態である。故にアリストテレスは言ふ、「クレマチスチクは二重のものであつて、一部は商業に屬し、他の一部はエコノミクに屬するも

のであり、そして後者は必要にして賞讃に價する者であるが、前者は流通に基礎を置き當然に擯斥せらるべきものである(なぜならばそれは自然に基かず相互の詐欺に基く者であるから)が故に、高利業は最も充分の理由を以て忌み嫌はれてゐる。なぜならば高利業に於ては、貨幣その者は利得の源泉であつて、其發明せられた眞目的の爲に使用されないからである。蓋し貨幣は商品交換の爲に生じたのであるが、利子は貨幣からより、多くの貨幣を造る。そこで其名稱 (Tornos) 利子及生れたるもの) ある所以である。なぜならば生れたるものは、生むものに似てゐるからである。が、利子は貨幣の貨幣であつて、總ての生業方面の中で最も反自然的のものである程である』(三十五)。(64)

(三十五) アリストテレス前掲書第一〇章

我々の研究の進むに従ひ、我々は商業資本と同様に利子を生む資本を派生の形態として見出すであらう。そして同時に、何故それらの資本が歴史上資本の近世形態に先つて現はれてゐるかを見るであらう。

餘剩價值が流通からは生じ得ないこと、隨つて餘剩價值の形成に際しては流通

その者の中に於ては目に見えない何ものか、其背後に行はれねばならぬとは、既に之れを明かにした(三十六)。然し餘剩價值は流通からでなくて、他の何處からか生じ得るか。流通は商品所有者の有らゆる相互關係の總和である。流通の外部に於ては、商品所有者はまだ自分自身の商品との關係に立つてゐるに過ぎぬ。それの價值に就て云へば、この關係は只商品が其所有者自身の労働の一定の社會的諸法則に従つて測られた或分量を含むといふ事に限られてゐる。労働の此分量は、彼れの商品の價值の大小に於て表章される。そして價值の大小は計算貨幣に於て表現される者であるから、右の労働量は例へば十磅といふ價格に依つて表章される。然し彼れの労働は、商品の價值と其價值以上の餘剩とに於ては表現されない。即ち同時に十一と云ふ價格である所の十と云ふ價格に於ては、同時に自身よりも大きな一の價值に於ては表現されない。商品所有者は、其労働に依つて價值を形成するとは出来るが、然し自己を増殖する所の何等の價值をも形成するとは出来ぬ。彼れは新たなる労働によつて現存の價值に新價值を附け加へるとに依つて、例へば、革を深靴に造り上げるとに依つて、一商品の價值を高め得る。

斯くて同じ材料が今やより多くの価値を持つてゐる。それはより大きな労働量を含んでゐるからである。されば、深靴は革よりも多くの価値を持つてゐるが、革の価値は元ありし通りに止まつてゐる。それは自己を増殖しなかつた。深靴製造中に一の餘剰価値を併合しなかつた。それ故に商品生産者が流通界の外に於て、他の商品所有者等と接觸し始めることなしに、価値を増殖し随つて貨幣或は商品に資本に轉化することは不可能である。⁽⁶⁵⁾

(三十六) 市場の常態に於ては、利潤は交換することからは造られない。若しそれが取引以前に存しなかつたならば、取引以後にも存することは出来ぬであらう。(ラムゼー前掲書第一八四頁)

「されば資本は、流通からは生じ得ない。同様に流通から生じないと云ふこともあり得ない。それは同時に流通の内に生じなければならず、流通の内に生ずるものであつてはならぬ。⁽⁶⁶⁾」

斯くて二重の結果が生じたのである。貨幣の資本化は、商品交換に内在する諸法則に基いて、諸等價の交換が出發點を

なすものとして、展開す可きである^(三十七)。尙いまだ資本家のホンノ青蟲として存在してゐる我が貨幣所有者は、商品を其の價值通りに買ひ價值通りに賣り、而かも其行程の終りに於て、最初投入したよりも、多くの價值を引出さなければならぬ。彼れが完全なる資本家の蝶に發育することは、流通界の内で行はれねばならぬ、また流通界の内に行はれてはならぬ。之れが問題の條件である。茲にロズス島あり、茲に踊れ。⁽⁶⁷⁾

(三十七) 如上の説明に依つて讀者は、之れが只、此う云ふだけのことであることを理解するであらう。即ち資本形成は、商品價格が商品價值と同じである場合にも、尙可能でなければならぬと云ふのである。資本形成は商品價格と商品價值との不一致からは説明され得ない。若し價格が實際に於て價值と一致しないならば、先づ之れを價值に約元しなければならぬ。即ち此不一致狀態を、偶然的の狀態として問題外に置かなければならぬ。之れは、商品生産の基礎上に於ける資本形成の現象を純粹に捕捉し、其觀察に於て攪亂的な、固有の經過に無關係な附帶事情に妨げられない爲に必要なことである。尙ほまた、我々は斯くの如き約元が決して單なる科學的な手續でないことを知つてゐる。市場價格の不斷の動搖は、其騰落は、相殺し互に平均して、其内的原則としての平均價格に自己を歸せしめる。之れは長期間に亘る總ての企業に於て、例へば商人なり工

業家なりのしるべの星を成すのである。斯くて彼等は長い期間を全體として觀察するときは、商品は實際、其平均價格以下でもなく以上でもなく、正に其平均價格で賣られると云ふことを知つてゐる。それ故に利害關係なき思想が一般に彼れの興味であるとするれば、彼れは資本形成の問題を次の形で提出しなければならなかつたであらう。曰く、價格が平均價格に依つて規定される際に、即ち結局商品の價值に依つて規定される際に、資本は如何にして發生し得るが。予は「結局」と言ふ。なぜならば商品の平均價格は、アダム・スミスやリカルドなどの信ずる如く、直接には其價值の大小と一致するものでないから。〔68〕

(三) 労働力の賣買

資本に轉化すべき貨幣の價值變化は、此貨幣自體の上には起り得ない。なぜならば、此貨幣は購買要具として及び支拂要具として、たゞ其れを以つて購はれ、或は支拂はれる商品の價格を實現するに過ぎず、又それ自身の形態に止まつてゐては、それは變化することなき價值の大小に化石してゐるからである〔三十八〕。同様に右の價值變化は、第二の流通行爲、即ち商品の再販賣からも生じ得ない。なぜならば此行爲は、商品を單に自然形態から貨幣形態に再轉化せしむるものに過ぎぬか

らである。〔69〕

〔三十八〕貨幣の形態に於ては……資本は毫も利潤を生じない。〔リカルド著「經濟原論」第三版第二六七頁〔70〕

故に右の價值變化は、第一行爲即ちC—Mに於て購はれる商品の上に起らなければならぬ。但し、其商品の價值の上に起つてはならぬ。なぜならば此の場合等價同志が交換され、商品は其價值通りに支拂はれるからである。されば問題の價值變化は、其商品の使用價值その者から、即ち其商品の消費からのみ生じ得るのである。然るに一商品の消費から價值を引出だす爲には、我が貨幣所有者は幸ひにも、流通界の内部に於て、即ち市場に於て、使用價值その者が價值の源泉であるといふ一種特別の性質を有する、即ち實際の消費がそれ自體に於て労働の體化であり價值創造〔66〕である所の一商品を發見しなければならぬであらう。そして貨幣所有者は市場で、斯くの如き特殊の一商品を見出す。労働能力〔67〕或は労働力〔68〕が即ちそれである。〔71〕

労働力或は労働能力と云ふは、人の現身即ち生きた人格の中に存する所の、そし

て何等かの種類の使用價值を生産する都度、人が運用する所の身心能力の總計を指すのである。

然し貨幣所有者にして勞働力を商品として市場に見出す爲には、種々なる條件が充たされてあらねばならぬ。商品交換はそれ自體としては、自己の性質より生ずる從屬關係以外には何等の他の從屬關係をも含まぬ。此前提のもとに、勞働力はそれ自身の所有者に依つて、其れが其人の勞働力である所の當人に依つて、商品として賣物にさるか或は販賣される限りに於てのみ、又其理由によつてのみ、商品として市場に現はれることが出来る。其所有者が其れを商品として販賣する爲には、彼れは其れを自由に處分することが出来なくてはならぬ。随つて其勞働能力の、其人格の自由な所有者でなければならぬ(三十九)。彼れと貨幣所有者とは互ひに市場で出くわし、同權の商品所有者として相互の關係に入る。たゞ異なる所は一方は購買者、他方は販賣者であると云ふ一點のみである。随つて双方とも、法律上同等な人である。右の關係の持續は、勞働力の所有者が其れを常にたゞ一定時間だけ賣ることを必要とする。なぜならば、彼れが若しそれを一括して賣り放し

にするとすれば、彼れは自分自身を賣ることになる。即ち彼は、一の自由人から一の奴隸と化し、一の商品所有者から一の商品と化してしまふ。彼れは人として絶えず、其所有物としての、随つて彼れ自身の商品としての其勞働力に自己を關係せしめなければならぬ。そして彼れは、其勞働力を常にたゞ一時的にのみ、即ち一定期間を限つて、購買者の處分に委ねる限りに於てのみ、消費に任す限りに於てのみ、即ち其商品の讓渡によつてそれに對する自己の所有權を斷念しない限りに於てのみ、斯くすることが出来るのである(四十)。(72)

(三十九)古代希臘、羅馬に關する百科諸辭典に於て、我々は斯んな謔言を讀むと出来る。即ち古代世界に於ては、『自由勞働者と信用組織の缺けてゐたことを除けば』資本は既に充分發達してゐたと云ふのである。モムゼン氏も、其著『ローマ史』に於て、此點に關し錯誤に錯誤を重ねてゐる。(73)

(四十)されば各國の種々なる立法は、勞働契約に對して一の最高限度を確定してゐる。自由勞働諸民族間に於ける總ての法典は、此の契約の解約通告條件を規定してゐる。種々なる國々殊にメキシコに於ては、(南北戰爭以前には又たメキシコから割き取つた諸領土に於ても、又事實上、グーザの革命當時にいたる迄はドナウ諸地方に於ても)、

奴隷制度はベオナーヂ⁽⁶⁸⁾の形式のもとに隠されてゐる。労働をして返還すべき筈の、そして代々ころげ傳つて行く前借金のために、個々の労働者のみでなく、其一家全體が、事實上、他人及び其一家の所有物となるのである。メキシコ大統領ジュアレフ⁽⁶⁹⁾は此制度を廢止したが、僭帝マキシミアンは一の勅令に依つて之れを復興した。此勅令はワシントン議會に於て、妥當にも、メキシコに於ける奴隷制度復興の勅令として非難された。『子の獨特な心身の熟練及び活動能力に就て予は……時間的に制限された一の使用を他人に譲渡することが出来る。なぜならば此制限によつて其れらのものは予の全體及び一般性に對して在外關係(離權)に立ち得るからである。労働中を通じての具體的な予の全時間と、予の生産の全體とを譲渡するときは、予はそれらの物の本質、予の一般活動及び現實性、予の人格を他の所有物たらしめることになる。』(ヘーゲル著『法理哲學』伯林一八四〇年刊第一〇四頁、第六七節⁽⁷⁰⁾〔74〕)

貨幣所有者が市場に於いて労働力を商品として見出す爲の第二の根本的條件は、労働力の所有者が、自身の労働の體化したる諸商品を販賣し得ることの代りに寧ろ其生きた、現身中にのみ存する其労働力その者を、商品として賣物に出さねばならぬと云ふこと、是れである。

誰れか其労働力とは異なる諸商品を販賣する爲には、彼は勿論生産機關、例へ

ば原料、労働器具などを有して居らなければならぬ。彼れは革なしに如何なる深靴も造ることは出来ぬ。彼れは其ほかに生活資料を必要とする。何人も、如何なる未來の音楽家でも、未來の生産物を費して生きることが出来ぬ。随つて又、生産未完成なる使用價值を費して生きることが出来ぬ。而かも人は地球の舞臺に現はれた最初の日に於けると同じく、現に尙ほ毎日其生産の以前に、又た其生産中に消費しなければならぬ。諸生産物が商品として生産されるときは、それは生産された後で賣られなければならぬ。そして賣られた後に始めて、生産者の欲望を充たすことが出来るのである。斯くて生産時間の上に、尙販賣に必要な時間が加はるのである。

されば貨幣を資本化する爲には、貨幣所有者は商品市場に於て自由労働者を發見しなければならぬ。其の自由と云ふ意味は二重である。即ち労働者は自由人として、彼れの労働力を彼れの商品として處分すること。次には彼れは他に賣るべき何等の商品をも持たず、徒手空拳であること、即ち彼れの労働力の實現に必要な一切の物から自由であること、是れである。⁽⁷⁵⁾

斯くの如き自由労働者が、何ゆゑ流通界に於て貨幣所有者に對立して居るかの問題は、労働市場を商品市場の特殊の一部門と見做してゐる貨幣所有者にとつて興味あることではない。そして今のところ此問題は、我々にも興味あることではない。貨幣所有者が實地の上から事實に執着すると同じく、我々は理論の上から事實に執着する。が、茲に一の明白なるものがある。自然は一方に貨幣所有者若しくは商品所有者を造り、他方に自身の労働力のほか何物をも所有せざる人を造るものではない。此の關係は何等の自然史的關係でなく、同様にまた總ての歴史的時代に共通の社會的關係でもない。それ自身が明かに過去に於ける歴史的發達の結果であり、幾多の經濟的革命的產物である、社會的生產のより古き一揃ひの諸形態の消滅の所産である。⁷⁶

我々が曩きに考究した經濟的諸範疇も亦、その歴史的痕跡を帯びてゐる。商品としての生産物の存在の中に、一定の歴史的諸條件が包まれてゐる。商品となる爲には、生産物は生産者自身の爲の直接の生活資料として生産されてはならぬ。我々が更に一步を進めて、如何なる事情のもとに、總ての生産物が或は少くとも生

産物の多數が、商品の形を帯びるかを研究するときは、之れがたゞ一の全く特殊なる生産方法、即ち資本制生産方法の基礎上にのみ行はれることが見出さる可きである。然し斯くの如き研究は商品の分解に無關係であつた。大部分の生産物が直接生産者の自己必要に向けられてゐても、商品化されなくても、隨つて社會的生產行程がまだ、其全體に亘つて交換價值に支配されて居らないでも、それでも商品生産及び商品流通は行はれ得るのである。生産物が商品として表現されるには、社會内部の分業が充分に發達して、物々交換に端を開くところの使用價值と交換價值との分離が既に完成されて居ることを必要とする。然し斯くの如き發達階段は、歴史的に多種多様な經濟的社會諸形態に共通のものである。⁷⁷

或は貨幣に就て考へて見ると、それは商品交換の一定の高さを前提してゐる。單なる商品等價にしる、流通要具にしる、支拂要具にしる、或は退藏貨幣及び世界貨幣にしる、諸々の特殊な貨幣形態は、一の職分或は他の職分の範圍の差異及び相對的優勢に從つて、社會的生產行程の頗る多様な諸階段を指示する。然し經驗上から、之等總ての形態の成立には比較的發達微弱な商品流通で足りるのである。

資本にあつては其うでない。資本の歴史的な存在諸條件は、決して商品流通及び貨幣流通と共に存するものではない。資本は只生産機關及び生活資料の所有者が市場に於て、其労働力の販賣者としての自由労働者を見出す所のみ成立する。そして此一の歴史的條件は一の全世界史を包括してゐる。されば資本は最初より、社會的生產行程の一新時期を聲明してゐるのである(四十一)。(78)

(四十一) されば資本制的時代を特徴づけるものは、労働力が労働者自身に對して、彼れの所有する商品でふ形を受けるといふこと、隨つて、彼れの労働が貨幣労働の形を受けるといふことである。他方に於て、此瞬間から始めて労働諸生産物の商品形態が一般化する。(79)

そこで此特殊の商品、即ち労働力を更らに詳しく考究せねばならぬ。此は他の總ての商品と同じく一の價值を有してゐる(四十二)。其價值は如何にして決定されるか。(80)

(四十二) 或一人の價值若しくは値打は、他の總ての物に於けると同じく、彼れの價格である。即ち彼れの力の使用に對して與へらる可きものに當る。(トマス・ホップス著『レイアサン』モールスウオース編ホップス全集、倫敦、一八三九—四四年刊、第三卷、第七六

(頁) (81)

労働力の價值は、他の總ての商品のそれと同じく、此特殊の物品の生産隨つて又た再生産に必要な労働時間に依つて決定される。労働力は價值である限り、それに體化してゐる社會的平均労働の一定量を代表するに過ぎぬ。労働力は只、生きた個人の力能としてのみ存在してゐる。故に労働力の生産は、生きた個人の存在を前提する。その個人の存在が一定してゐるとすれば、労働力の生産は彼れ自身の再生産或は生存維持と云ふ事に存してゐる。生きた個人は其の生存維持の爲に、一定量の生活資料を必要とする。されば労働力の生産に必要な労働時間は結局この生活資料の生産に必要な労働時間に歸する。或は労働力の價值は、労働力の所有者の生活維持に必要な生活資料の價值である。然るに労働力は其れを發揮することに依つてのみ實現される。労働に於てのみ其實を示す。然るに其實を示すこと即ち労働に依つて、人間の筋肉、神經、臟腑などの一定量が支出される。それは回復されねばならぬものである。所が此の増大した支出はまた増大した収入を必要ならしめる(四十三)。労働力の所有者が今日労働すれば、彼れは明日

また力及健康の同じ条件のもとに、同一行程を繰返し得なくてはならぬ。それ故に生活資料の分量は、労働する個人を労働する個人として其尋常の生活状態に維持して置くに足るものでなくてはならぬ。衣食住、燃料などの如き自然的欲望そのものは、一國の風土的その他の自然的特徴に従つて様々である。他方に於て、謂ゆる必要な欲望の範囲は、それを充たす方法と同じく、それ自身が一の歴史的産物であつて、随つて大部分は一國の文化程度、就中また本質的には、自由労働者の階級が如何なる条件のもとに、また随つて如何なる習慣と生活上の要求とを以て形成されたかに懸つてゐる(四十四)。されば労働力の價值決定は、他の諸商品の場合と反對に、一の歴史的及び道徳的要素を含んでゐる。然し一定の國に取つて、一定の時期に於ては、必要な生活資料の平均範囲は一定のものである。(82)

(四十三) されば古代羅馬のグリクス(83)は農業奴隸の監督者として、『後者よりも貧弱な給與を受けた。なぜならば後者よりも輕易な労働をしたから。』(テオドル・モムゼン

『羅馬史』一八五六年刊、第八一〇頁(84)

(四十四) トマス・ソントン著『人口過多及び其救治』倫敦、一八四年刊(85)を参照せよ。(85)

労働力の所有者は死を免れない。されば彼れの市場への出現が、貨幣の永續的な資本化がそれを前提する如く永續的である爲には、労働力の販賣者は『總ての生きた個體がみづから不滅にすると同じように、生殖に依つて』(四十五)みづからを不滅にしなければならぬ。磨滅と死亡との爲に市場から取除かれた労働力は、せめて其れと同數の新なる労働力に依つて絶えず補充されなければならぬ。故に特殊の商品所有者なる此種族が、商品市場にみづからを不滅にする爲めに(四十六)は、労働力の生産に必要な生活資料の高は補充労働者即ち労働者の子女の生活資料をも含んで居る。(86)

(四十五) ウヰキリアム・ベター

(四十六) 其の(労働者の)自然價格は……風土の性質上及び國の習慣上、労働者を維持するに必要であり、また彼れをして市場に減損せざる労働供給を維持し得るような家族を扶養し得せしめるに必要な生活上の必需品及び慰安物の分量に存してゐる。(87) (ロバート・トレレンス著『對外穀物貿易論』倫敦、一八一五年第六二頁(87))。労働と云ふ言葉は、茲では誤つて労働力の意味に用ゐられてゐる。(87)

一般的に人間的なる本性を改造し、一定の労働部門に於て熟練と手際とを獲得

して發達した特殊の勞働力となるやうにするには、一定の修練若しくは教育が必要である。そして此修練若しくは教育はまた、商品等價の大なり小なりの高を必要とする。勞働力の複雑性の大小に應じて、其教育費は様々である。かくて此教育費は、普通の勞働力に對してはホンノ小額であるとは云へ、その生産に支出された諸價値の範圍内に這入つて行くのである。(88)

勞働力の價値は、一定量の生活資料の價値に歸着する。故にそれは、此生活資料の價値、即ち其資料の生産に要した勞働時間の大小と共に變動する。(89)

生活資料の一部例へば食物や燃料などは、日々新たに消費される。そして日々新たに回復されなければならぬ。また衣服家具類などの如き他の生活資料は一層長き期間に涉つて消耗する。随つて一層長き期間に回復されるれば善い。或種類の商品は毎日買はれるか、或は支拂はれなければならぬ。他の商品は毎週、毎四分の一年などに買はれるか、或は支拂はれなければならぬ。然しこれらの支出の總額が例へば一年内に如何ように割當てられようとも、それは日毎に平均収入によつて支辨されなければならぬ。今、勞働力の生産に毎日要する諸商品の分量を

A、毎週要するその分量をB、四分の一年毎に要するその分量をCに等しいなどとするれば、これらの商品の一日の平均量
$$= \frac{365A + 52B + 4C + u.s.w.}{365}$$
 であらう。

平均日に必要なる此商品量の中に、社會的勞働六時間が含まれてゐると假定するとき、勞働力には毎日、社會的平均勞働半日分が體化されてゐる。或は半日分の勞働が勞働力の日々の生産に必要である。勞働力の日々の生産に必要な此勞働量は、勞働力の一日の價値、或は日々再生産される勞働力の價値を成すのである。若し社會的平均勞働半日分が、同様に三志或は一タールの金分量に表現されるとすれば、一タールは勞働力の一日の價値に相應する所の價格である。故に若し勞働力の所有者が、それを毎日一タールで賣物に出すときは、其販賣價格は其價値に等しく、そして我々の前提に従へば、自分のタールを資本化することに熱中してゐる貨幣所有者は、此價値を支拂ふのである。(90)

勞働力の價値の最終限界或は最低限界は、其日々の供給なくんば、勞働力の負擔者即ち人間が其生活行程を新たにすることが出来ない一の商品量の價値、肉體上缺くべからざる生活資料の價値に依つて形成される。勞働力の價格が此最低限

界まで低落するときは、それは労働力の価値以下に低落する譯である。なぜならば労働力は、斯くてはたゞ不具的形態でのみ維持され發展され得るに過ぎぬからである。然るに各商品の価値は、其商品を尋常の品質のものに産出するに必要な労働時間に依つて決定されてゐる。⁹¹⁾

事の本質から流れ出づる以上の如き労働力の価値決定を以て粗笨なりとし、口ツシと共に斯う悲嘆するなどは、極めて安値な感情論である。曰く『生産行程中に於ける労働の生活資料を抽象し去りながら、労働能力 (puissance de travail) を理解しようとするは空想 (vaine de raison) を理解しようとするものである。労働を云爲する者、労働能力を云爲する者は、同時に労働者及び生活資料、労働者及び労働を云爲するのである』(四十七)と。労働能力を云爲する者は、労働を云爲はしない。恰かも消化能力を云爲する者が、消化を云爲しないように。消化の行程には、人の知る如く善良なる胃腑以上のものが必要である。労働能力を云爲するものは、彼の生存に必要な生活資料を抽象し去らない。その価値は寧ろ、労働能力の価値の中に表章されてゐる。労働能力は、賣られないときは、労働者に對して何の役

もなさぬ。彼れは寧ろ、其労働能力がその生産に一定量の生活資料を要したること、また其れの再生産に常に繰返し新たに其れを要することを、一の残忍なる自然必要事と感ずる。彼れは茲に於て、シスモンデと共に『労働能力は……賣られなければ、なんでもない』ことを發見する(四十八)。⁹²⁾

(四十七) ロツシ著『經濟學教科書』ブルユセル、一八四二年刊、第三七〇頁⁹¹⁾

(四十八) シスモンデ著『經濟學新原理』第一卷、第一一二頁⁹²⁾

労働力と云ふ此特殊の商品の特性は、購買者と販賣者との間に契約が締結された丈けでは、其使用価値は尙いまだ事實上購買者の手中に移轉して居らぬと云ふ事實を伴ふ。労働力の価値は、他の總ての商品のそれと同じく、流通に入り込む前に既に決定されてゐた。なぜならば、一定量の社會的労働が労働力の生産に支出されたからである。然るに其使用価値はやつと、その後から行はれる力の發揮と云ふ點に存してゐる。故に力の讓渡と、其實際の發揮、即ち使用価値としての其存在とは、時間的に隔つてゐる。然し販賣に依る使用価値の形式的讓渡と、購買者への其實際の引渡とが時間的に隔つてゐるやうな商品にあつては、^{四十九)}購買者の

貨幣は多くは支拂要具として働く。資本制生産方法の行はれる總ての國々に於ては、労働力は賣買契約に於て確定された期間内に働いて了つた後例へば各週末に始めて支拂はれる。されば労働者は何處に於ても、労働力の使用價值を資本家に前渡してゐるのである。其價值の支拂を受ける前に、購買者にそれを消費させてゐるのである。即ち労働者は何處に於ても、資本家に掛賣りしてゐるのである。此掛賣が決して空虚な妄想でないことは、資本家の破産した際に、支拂ふべき賃銀の往々失はれることによつて示されるのみでなく(五十一)、また一層永續的な幾多の影響によつても示される(五十二)。然し貨幣が購買要具として働くか、或は支拂要具として働くかは、商品交換その者の性質には何等の變化をも與へぬ。労働力の價値は、家屋の賃貸價格と同様後に至つて始めて實現されるものであるが、それでも契約に依つて固く定められてゐる。労働力は後に至つて始めて支拂はれるものではあるが、それでも販賣されてゐる。が、此關係を純粹に理解する爲に、労働力の所有者が其の販賣と共に其都度また直ちに、契約的に取り極められた價格を受けるものと暫らく假定して置く方が便利である。(93)

(四十九)總ての労働は、其終つた後に支拂はれる。匿名者著『需要の性質に關する諸原理の研究』第一〇四頁(93)『商業上の信用は、生産の第一働き手たる労働者が其貯蓄の御蔭で、一週間なり二週間なり、一ヶ月なり三ヶ月なり其労働賃銀の支拂を待つことが出来るようになった時に起つたものである。』(シアール・ガニール著『經濟學綱領』第二版、巴里、一八二一年刊第一卷、第一五〇頁(94))

(五十)労働者は其勤勞を前渡しする。が、ストルヒは狡猾にも附加してゐる。労働者はたゞ『其の賃銀を失ふ』外に、『何も冒險するものではない……労働者は實質的のものは何も引渡すものではない』と。(ストルヒ著『經濟學教科書』ベテルスブルグ、一八一五年刊、第二卷第三七頁(95))

(五十一)一例、倫敦には二種のパン焼業者が存してゐる。即ちパンを其の値段一杯に賣る“Full priced”と、それを此價格以下に賣る“Undersellers”とがそれである。此後の種類はパン焼業者總數の四分の三強を成してゐる。(『パン焼職人等の不平の諸原因』に關する政府調査委員エイチ・エス・トレメンヒアの報告三二頁、倫敦、一八六二年(96))。これらの Undersellers は殆んど例外なしに、明礬、石鹼、眞珠灰、石灰、ダービシヤイヤー石粉、其他類の氣持よき、營養分に富んだ衛生的の成分を惡混ぜしたパンを賣つてゐる。(前掲青表紙本、並びに『パンの價値に關する一八五五年の委員會』報告、及ドクタア・ハツサルの『發覺したる價値』(97)第二版、倫敦、一八六二年を見よ)。サー・ジョン・ゴルドンは一八五五年の委員會に向つて言明した。『これらの價値の結果として、日に二封度のパンを食

べて生きてゐる貧乏人は、今や其の營養分の四分の一をも實際に受けて居らぬ。其健康に對する諸々の悪影響は別としても」と。何故「労働階級の頗る大きな部分が、之れらの賤造のことを熟知しながらも、尙且つ明礬や石粉などを共に買ひ受ける」かの理由として、トレメンヒア（前掲報告第四八頁）は述べてゐる。彼等に取つて、「其のパン焼業者若しくは雜貨店から、與へられる儘にパンを娶取ることは、避くべからざる事なのだ」と。彼等は労働週を終りに始めて其賃銀の支拂を受けるので、また「其週内に自分の一家が食べたパンの代を來週末でなければ支拂ふことが出来ない。」そしてトレメンヒアは證人の供述を引いて更に附け加へる。「斯くの如き不純物から成るパンが、明かに斯様にして商ふ爲に造られてゐることは、周知の事柄である」と。イングランドの多くの農業地方に於ては（スコットランドの農業地方に於ては尙更らだが）、賃銀は二週間に、甚だしきは一月目に支拂はれる。此長い支拂期間の爲めに、農業労働者は其諸々の商品を掛買ひしなければならぬ。……彼れはより、高い價格を支拂はなければならぬ。そして事實上、自分に掛賣りしてくれる店に縛られてゐる。斯くて例へば賃銀が月拂ひになつてゐるウキルツ州のホーニンガムに於ては、他所で一ストーンに付き一志十片する其同じパン粉が二志四片である。（『公衆健康』に關する『樞密院醫史一八六四年』の報告第六號、第二六四頁）。『ベリスリー及びキルマーノック（西部スコットランド）の更紗捺染工等は、一八五三年、一罷工に依つて月拂を十四日拂に縮めさせた。（一八五三年十月三十一日の工場監督官報告）第三四頁。労働者が資本

家に向つて承諾する信用の更に見事な一結果として、英吉利の多くの炭坑主のやり方を觀察することが出来る。之れに依れば、労働者は月末になつて始めて支拂はれる。そしてそれ迄の間に、資本家から前借するのであるが、それは往々商品であるのであつて、其商品に對して彼れは其市場價格よりも高く支拂はなければならぬ。（トラック制度）『月一度支拂をなし、其月内の各週の終りに労働者に現金を前貸しするとは、炭坑主等の常習である。其現金は賣店（Tommy-shop）即ち炭坑主自身の所有にかゝる雜貨店）で渡される。即ち労働者はそれを一方に受取つて他方に支出するのである。』（『兒童雇傭委員報告第三號、倫敦、一八六四年』第三八頁、第一九二號）⁽⁹⁶⁾

我々は今労働力と云ふ此特殊の商品の所有者に對して貨幣所有者から支拂はれる價值が、如何様にして決定されるかを知つてゐる。貨幣所有者の方で交換によつて受取る所の使用價值は、労働力の實際の消費に於て、消費行程に於て始めて現はれる。原料などの如き此行程に必要な總ての物を、貨幣所有者は商品市場で購買し、その價格一杯に支拂ふ。労働力の消費行程は同時に商品及び餘剩價值の生産行程である。そして労働力の消費は、他の總ての商品の消費と同じく、市場若しくは流通界の外で行はれる。されば我々は、貨幣所有者及び労働力所有者と一緒に此騒々しい上はべに止まつてゐる、そして誰の目にも眺められる領域を去

つて彼等に随ひ其入口に『商用のほか入るべからず』と書き示してある生産の隠れたる場所へ赴くのである。此場所では資本が如何に生産するかと云ふことばかりでなく、また資本それ自體が如何にして生産されるかを示されるであらう。かくて貨殖の秘密は遂に暴露されねばならぬのである。⁹⁷⁾

労働力の賣買が其限界内に行はれてゐる所の流通或は商品交換の領域は、實に天賦人權の眞樂園であつた。専ら此所に行はれてゐるものは、自由と平等と、所有と及びベトナムとである。自由！なぜならば一の商品例へば労働力の購買者及び販賣者は、たゞ其自由意志によつてのみ左右されてゐるからである。彼等は、自由な法律上同權の人として契約する。契約とは、彼等の意志が一の共通的法的表章を與へる所の最後の結果である。平等！なぜならば、彼等は商品所有者としてのみ相互に關係し合ひ、そして等價と等價とを交換するからである。所有！なぜならば、各人はたゞ彼れ自身の物のみを處分するからである。ベトナム！なぜならば、双方のいづれもたゞ自分のことのみを考へてゐるからである。彼等を結合して一の關係に持ち込む所の唯一の力は、彼等の利己の、彼等の特別利益の、彼等

の私的利害關係の力である。そして斯様に各人が只自分自身のことのみのを念頭に置き、誰れも他人を顧みないからこそ、總ての者は事物の豫定された調和に従つて、或は萬事に抜目なき攝理の保護のもとに、たゞ其相互の利益の爲めの、共同の利福の爲めの、全體の利益の爲めの事のみをするのである。⁹⁸⁾

單純なる流通或は商品交換の此領域（此所からして、自由貿易俗論者は、その諸々の見地及び諸々の概念を、また資本及び賃銀労働の社會に對する其の判断の標準を借りて來るのであるが）を去るに際し、我々の登場人物の相貌は既に幾分か變化してゐるように見える。以前の貨幣所有者は、今は資本家として眞先きに進んでゆく。労働力の所有者は、彼れの労働者として彼れに従つてゆく。一方は容體振つて伴り笑ひしながら、業務に熱中した態度で。他方は、自分の皮を市場へ運び、そして今はたゞ其皮を剥がれて糝めされる外に何も期待することのない人のように、ピク／＼と尻込みしながら。⁹⁹⁾

第三篇 絶對的餘剩價值の生産

第五章 労働行程⁽¹⁾及び價值増殖行程⁽²⁾

(一) 労働行程

労働力の使用は、労働その者である。労働力の購買者は其販賣者を働かせることによつて労働力を消費する。労働力の販賣者は之れに依つて、現勢的に活動する労働力即ち労働者——前には單に潜勢的に然りしに過ぎぬ——となる。其労働を諸々の商品に表現せしめる爲には、彼れは先づ第一にそれを諸々の使用價值即ち何等かの種類の欲望を充たす役をなす諸々の物に表現しなければならぬ。されば資本家が労働者に造らせる物は、一の特種な使用價值即ち一の定まつた物品である。使用價值若しくは財貨の生産は、それが資本家の爲に、資本家の管理のもとに行はれると云ふことに依つては、其一般的性質を變更しない。されば、労働行程は先づ總ての一定した社會的形態からは獨立に考察されねばならぬ。⁽¹⁾

労働は先づ人と自然との間の一行程である。即ち人が自然との其代謝機能⁽²⁾

を、彼れ自身の行爲に依つて仲介しつゝ、調節し管理する所の一行程である。人は一の自然力として自然物質⁽²⁾、その者に對立してゆく。人は自然物質を彼れ自身の生活に使用し得る形で占取⁽³⁾する爲に、自身の現身に屬してゐる諸々の自然力即ち腕や脚や頭や手を運轉する。彼れは此運動に依つて、自身の外部にある自然に働きかけて其れを變更しつゝ、同時に彼れ自身の性質を變更する。彼れは自身の性質の裡に眠つてゐる諸々の伏能力⁽⁴⁾を展開し、それらの力の活動を彼れ自身の支配下に置く。⁽³⁾

我々は茲で、労働の、動物的に本能的⁽⁵⁾な最初の諸形態を取扱はうとするのではない。労働者が自身の労働力の販賣者として商品市場に現はれ來たる状態に比べると、人間労働が其最初の本能的形態をまだ脱ぎ捨てなかつた状態は、原始的な背景の中に押しやられてしまふ。我々は、専ら人間だけに屬する形態に於ての労働を假定する。蜘蛛は織工のそれに似た諸々の作業を爲る。蜜蜂は其蠟窠の構造に依つて、幾多の建築師を耻かしめる。然し本來最劣の建築師を最良の蜜蜂から區別だてるものは、前者が窠房を蜜蠟で築くに先だち頭の中に築いてゐるとい

ふことである。斯くて労働行程の結末に於ては、其發端に當り既に労働者の觀念の中に、即ち既に思想的に存在してゐた一の結果が現はれて來るのである。彼れは單に自然物⁽⁶⁾の形態變化を行ふことだけではない。彼れは自然物に於て同時に、彼れが意識してゐる所の、一の法則として彼れの行爲の種類方法を決定する所の、そして彼れの意志をそれに從屬せしめなければならぬ所の自身の目的を實現するのである。そして此意志從屬は何等の孤立した行爲ではない。労働する諸器官の努力⁽⁷⁾の外に、注意として現はれる目的意志が、労働の全繼續に對して必要である。そして此事は、労働が其固有の内容に依り、また其遂行の方法に依つて、労働者の心目を惹くこと少なきに從ひ、即ち労働者がそれを自己心身力の活動として楽しむこと少なきに從つて、ますます著しいのである。⁽⁴⁾

労働行程の單純動因は、目的活動即ち労働それ自體と、其對象と、其器具とである。人類に必需品を直ぐに間に合ふ生活資料を最初供給する土地（此中には經濟的に水も含まれる）は、⁽¹⁾人類の援助なしに、人間労働の一般的對象として存在してゐる。労働によつて只全地球との直接の聯絡から引離されるに過ぎぬ總ての物

は、天然自然に存在する労働対象である。即ち其生活要素たる水から引離され、漁られる魚、或は未開森林に於て倒伐される木材、其鑛脈から引裂かれる粗鑛などがそれである。之れに反して、労働対象が既に謂はゞ過去の労働に依つて濾過され、あるときは、我々は之れを原料と呼ぶ。例へば、既に其鑛脈から引裂かれて今精選されようといふ粗鑛がそれである。總ての原料は労働対象である。然し總ての労働対象は原料といふ譯ではない。労働対象は、労働に仲介された變化を経験した時に始めて原料たるのである。

(一)『土地の自生的生産は少量であつて、且つ人類から全く獨立のものであるので、謂はゞ自然から供給されるように見える——ちようど一人の青年に何か産業をさせ、また身代を造らせる爲に、小額の金が與へられる場合と同じ風に』(ジエームス・スチュアート著『經濟學原理』ダブリン、一七七〇年刊第一卷、第一一六頁(9)5)

労働要具は、労働者自身と労働対象との間に挿入する所の、また此対象に對する彼れの活動の道具として彼れに役立つ所の一の物であり、或はさう云ふ諸々の物の複合體である。労働者は諸々の物を權力手段(6)として他の物の上に自身の目的に従つて作用せしめる爲に、それらの物の機械的、物理的、化學的諸性質を利用す

る(二)。労働者が直接占取する対象は——直ちに間に合ふ生活資料例へば果實などを攫み取る場合は別として(此場合には、彼れ自身の身體諸器官のみが労働要具として役立つのである)——労働対象でなくて労働要具である。斯くて自然物を、の者が彼れの活動の器官となる。即ち彼れが自身の身體諸器官に附け加へ、聖書の教に拘らず其身長を引延ばす所の一の器官となる。(6)土地は彼れの本來の必需品室であると共に、また彼れの本來の労働要具庫である。土地は例へば彼れが依つて投げたり、摺つたり、壓したり、切つたりする所の石を彼れに供給する。土地自體が一の労働要具である。然しそれが農業に於いて労働要具として役立つためには、他の諸々の労働要具の一揃と、労働力の既に比較的高度な發展とを前提する(三)(7)

(二)『理性は強力であると共にまた狡猾である。其の狡猾とは、諸々の対象を各自身の性質に従つて相互に作用せしめ、相互に働き盡さしめ(1)乍ら、みづからは直接この行程に干渉せず、只だ己の目的のみを實現せんとする媒妁行爲の中に總じて存して居る』(ハーゲル著『百科全書』第一部論理學、柏林、一八四〇年刊三八二頁(12)8)

(三)他の點では見ぢめな其著『經濟理論』巴里一八一九年刊に於て、ガニールは重農派に

反對して、本來の農業の前提をなす諸々の労働行程の大列を適切に數へ擧げてゐる。

一般に労働行程が僅かに或程度まで發展するや否や、それは既に加工された労働要具を必要とする。最古の洞穴の中に、我々は石の道具や石の武器を發見する。加工された石や木材や骨や、介殻など、並んで人類史の初期に於てはまた、馴らされた、即ち既に労働に依つて變更された、飼養された畜類が労働要具としての主要な役目を演ずる(四)。労働要具の使用及び創造は、萌芽状態に於ては既に或動物種屬の間に存してゐるにしても、人類獨特の労働行程を特徴づけるものであつて、従つてフランクリンは人間を定義して「道具を造る一動物」(五)と言つてゐる。骨の遺物の構造が既に亡び去つた動物種屬の身體組織の認識に對して有する其の同じ重要性を、労働要具の遺物は、既に亡び去つた諸々の經濟的社會形態の判斷に對して有してゐる。何が造られるか、ではなく、如何にして、如何なる労働要具を以て、造られるか、諸々の經濟的時代を區別立てる(五)。労働要具は單に人間労働力の發達の分度器であるばかりでなく、猶また労働が其中に行はれる社會的事情的の指示器である。(9)

(四)『富の形成と分配に關する考察』(一七六六年)の中で、チュルゴーは文化の諸初期に對する飼畜の重要性を適切に説明してゐる。(10)

(五)總ての商品の中、本當の贅澤品は、種々なる生産時代の工藝的比較に對して最も重要なきものである。(11)

諸々の労働要具そのもの、中では、總括して生産の骨格及筋肉組織と呼ばれ得る所の機械的労働要具は、例へば管や、桶や、籃や、瓶などの如く單に労働對象の保容にのみ役立つような、そして總括して一般に生産の脈管組織と稱せられ得るような労働要具に比ぶれば、一の社會的生產時代の遙かに決定的な特徴を示すものである。(五a)(12)

(五a)第二版註。從來の成史は、物質的生産の發展を、即ち有らゆる社會的生活隨つて有らゆる實歴史の根柢を殆ど知らなかつたけれども、少なくとも有史前期をば、謂ゆる歴史的研究の基礎に、てなく自然科學的研究の基礎に立つて、道具と武器との材料に從つて石器時代、青銅時代、及び鐵器時代に區分してゐる。(13)

廣義に於ては、労働行程は其要具の中に、對象への労働作用を仲介する所の、隨つて何等かの方法に於て活動の導具として役立つ所の諸々の物の外に、其行程が行はれる爲に一般に必要である總ての對象的條件(6)をも算入する。これらの條件

は直接労働行程の中に入り込むものではないが、然し労働行程はそれなしには全然行はれない。或は僅かに不完全にしか行はれない。そして斯種の一般的労働要具は矢張り土地その者である。なぜならば、土地は労働者に立ち場所⁽¹³⁾を與へ、其の労働行程に活動範圍⁽¹⁴⁾を與へるからである。労働に依つて既に仲介された斯種の労働要具は、例へば労働建物、運河、街路等である。⁽¹⁴⁾

斯くて労働行程に於て、人類の活動は労働要具の助けによつて、労働對象の最初より企圖された變化を行ふのである。労働行程は生産物に於て消えてしまふ。その生産物は一の使用價值である。形態變化に依つて人類の欲望に適合せしめられた一の自然物質である。労働は其對象と合體した。労働は對象化し、對象は労働を加へられた⁽¹⁵⁾。労働者の側に於て不休の形で現はれたものは、今や生産物の側に休止的な性質として、在の形で現はれる。労働者は紡いだ。そして其生産物は紡績品である。

此全行程を其結果即ち生産物の立場から觀察するとき、労働要具及び労働對象の双方は生産機關⁽¹⁶⁾として、そして労働その者は生産的労働⁽⁷⁾として現

はれる。⁽¹⁵⁾

(六) 例へば未だ捕はれて居らぬ魚を漁業の一の生産機關と呼ぶは、自家撞着の觀がある。然し之まで曾て、魚の居らぬ河海湖沼の中で魚を捕へる術は發明されて居ない。⁽¹⁶⁾

(七) 單純なる労働行程の立場から生ずる如き、生産的労働の斯様な決定は、資本制生産行程に對しては決して充分でない。

一の使用價值が生産物として労働行程から出て來るときに、以前の労働行程の生産物である他の諸々の使用價值は、生産機關として労働行程の中に入り込むのである。此の労働の生産物である其の同じ使用價值は、彼の労働の生産機關を成す。故に諸々の生産物は労働行程の結果であるばかりでなく、同時に其の條件である。

採鑛、狩獵、漁撈などの如く(農業に於ては、それが先づ處女地その者を開墾する場合に限られてゐる)其労働對象が天然自然に存してゐる採取産業⁽⁸⁾を除き、他の總ての産業部門は、原料即ち既に労働に依つて瀟過された労働對象であり、それ自身が既に労働生産物である所の一の對象を取扱ふ。例へば、農業に於ける種子がそれである。我々が自然産物と見做しつけてゐる動植物は、恐らくその前年の労働

の所産であるばかりでなく、其現在の形に於ては、何代もの間、人間の監理のもとに、人間労働を介して續けられた變化の所産であらう。然しながら特に労働要具に關しては、其大多數は此上なき皮相的な觀察眼にも尙、過去労働の痕跡を示すのである。^[17]

原料は一の生産物の主要材を成し得るか、或は單に助成材として其形成に入り込み得る。助成材は労働要具に消費される。——石炭が汽機に、油が車輪に、秣が輓馬に消費されるように。或は原料に一の實材的變化を生ぜしめる爲に、それに附加へられる。——格魯林を不晒リンネルに、石炭を鐵に、染料を羊毛に附加へるように。或は労働その者の遂行を助ける。——例へば労働場の點燈や保暖に使用される材料のように。主要材と助成材との區別は、本來の化學工業に於ては消え失せる。なぜならば、使用された原料の何れも、生産物の實質として再現しないからである。⁽¹⁸⁾

(18) ストルヒは本來の原料をマチエー (Matière) と呼び助成材をマテリオー (Materiaux) と呼んで、双方を區別してゐる。シエルプユリエは助成材をマチエー・ザンストルマン

タール (Matières instrumentales) と呼んでゐる。^[19]

夫々の物は種々なる性質を具備し、隨つて色々な利用に適する故に、同一の生産物は極めて色々な労働行程の原料を成し得る。例へば穀物は製粉者、澱粉製造者、醸酒者、牧畜者等に對して原料である。それは、種子としては自分自身の生産の原料となる。同様に、石炭は生産物として採炭業より出で來たり、生産機關としてそれに入り込むのである。

同一の生産物が、同一の労働行程に於て労働要具及び原料として役立つ場合もある。例へば飼畜業に於て。——其處では、加工された原料である家畜が、同時に肥料製造の要具である。

いつでも消費され得る形で存在してゐる一の生産物は、新たに他の生産物の原料となり得る。——葡萄の實が葡萄酒の原料となり得るように。或は労働は其生産物を、それが只原料としてのみ再び使用され得るところの形で手放す。此状態に於ての原料は半製品⁽²⁰⁾と呼ばれてゐる。そして一層適當には中段製品⁽²¹⁾と稱すべきである。例へば棉花撚絲、紡絲などがそれである。最初の原料はそれ自身

が既に生産物ではあるが、種々なる行程の一の全階梯を經過しなければならぬかも知れない。此階梯に於て、それは常に變化した姿容に於て、常に新たに原料として働き、斯くして最後の労働行程に達する。そして此労働行程は、それを完成した生活資料、或は完成した労働要具として手放すのである。⁽²⁰⁾

斯くて我々は知る。——一の使用價值が原料として現はれるか、労働要具として現はれるか、或は生産物として現はれるかは、全く労働行程に於ける其一定の職分其使用價值が労働行程内に占むる位置に懸つて居り、そして此位置の變化につれて、其使用價值が右の何れとして、現はれるかと異つて來ることを。

されば、諸々の生産物は生産機關として新なる諸労働行程に入り込むことに依つて、生産物たる其性質を失ふのである。それは只、生きた労働の客觀的因子として働くに過ぎぬ。紡績者は紡錘をたゞ其紡績要具として、亞麻をたゞ其紡績對象として取扱ふに過ぎぬ。勿論、我々は紡績材料及び紡錘なしに紡績することは出來ぬ。即ち此生産物の存在は、紡績の始めに當つて前提されてゐる。然し此紡績行程その者に於ては、亞麻及び紡錘が過去の労働の生産物であると云ふは何うで

も宜いことである。——營養作用に於て、パンが農夫、製粉者、パン焼人等の過程の労働の生産物であると云ふが何うでも宜いことであると丁度同じように、反對に、生産機關が労働行程に於て、過去の労働の生産物としての其の性質を固守するのは、其の生産機關に缺點があるからである。切れないナイフ、絶え間なく千切れる紡絲などは、マザークとAなる刃物師、Eなる紡絲光澤付工を思ひ出させる。出來の善い生産物に於ては、過去の労働による其の諸々の有用性の仲介が消え失せてゐる。⁽²¹⁾

労働行程に於て役をなさぬ機械は無用である。加ふるにそれは、自然的代謝機能の破壊力の犠牲となる。鐵は錆び、木材は朽ちる。織られない、或は編まれない綿絲は無駄になつた棉花である。生きた労働がそれらの物を攪み、それを死から喚び醒まし、單に可能的な使用價值から實際のまた有効な使用價值に變へなければならぬ。労働の火に舐められ、労働の自體として占有され、労働行程に於ける自己の概念的并に職業的職分⁽²²⁾にまで覺醒されて、それらの物は成るほど又消費されてしまふが、然し一定の目的を以て消費されるのである。生活資料として個人

的消費に入り込み、或は生産機關として新なる労働行程に入り込むに適した諸々の新しい使用価値の、諸々の新しい生産物の形成要素として消費されるのである。^[22]

斯くの如く現存の諸生産物は常に労働行程の結果であるばかりでなく、又その存在条件である時に、他方に於て、それらの物が労働行程に入り込むこと、即ちそれが生きた労働と接觸することは、過去の労働の之等の生産物を使用価値として維持し、また實現する爲の唯一の手段である。^[23]

労働は其の實材的諸要素、其對象及び要具を消費する。それらの物を食ひ盡くす。それ故に労働は消費行程である。この生産的消費は左の點に於て、個人的消費から區別される。即ち後者は生産物を生きた個人の生活資料として消費し、前者はそれを労働の、即ち其個人の活動中な労働力の生産資料として消費すると云ふ事情である。されば個人的消費の所産は消費者そのものであり、生産的消費の結果は消費者とは異つた一の生産物である。^[24]

其の要具及び其の對象その者が既に生産物である限りに於て、労働は生産物を

創造する爲に生産物を消費する。即ち生産物の生産機關として生産物を利用する。然し労働行程が本來たゞ人類と其援助なしに存する土地との間にのみ行はれる如く、労働行程に於てはまた依然として天然自然に存在し、自然物質と人間労働との何等の結合を表現しないような生産機關が役をなしてゐる。

我々が既に其基本的な又抽象的な要因に於て示したような労働行程は、使用価値産出の爲の、自然物を人類の欲望に充用する爲の目的活動である。人類と自然との間の代謝機能の一般的条件である。人間生活の永久的な自然条件である。随つて此生活の有らゆる形態から獨立であり、寧ろ、此生活の總ての社會的形態に等しく共通してゐる。だから我々は労働者を他の諸労働者との關係に於て示す必要はなかつたのである。一方には人類と其労働、他方には自然と其諸々の物質、それで充分であつた。我々は小麦を口にして誰れが其れを作つたのかを味分けないように、此行程を眺めて、それが如何なる条件のもとに行はるか、奴隷監視人の残忍な答のもとにか、或は資本家の氣遣はしげな眼のもとにか、或はシンシンナトウス^[25]の如き田園に隠退した人物が其一二の小園を耕すことに依つてそれを行

ふか、それとも石で野獸を打殺す未開人がそれを行ふのかを見分けなむ(九)。(25)

(九)此もつとも高き論理的な論據からして、トレンヌ大佐は未開人の用ゐた石の中に資本の起原を発見した。『彼れ(未開人)が其追跡する野獸に投げ付けるところの最初の石の中に、彼れが自分の手の届かない所にある果物を打ち落す爲に掴む最初の棒の中に、我々は一物を得る目的の他の一物の占有を見る。そして斯様にして、資本の起原を発見するのである。』(ロバート・トレンヌ著『富の生産論』第七〇及七一頁(26))。思ふに斯様な最初のストック(棒)からしてまた、英語では何故ストックと云ふ言葉が資本と同意義であるかを説明し得るであらう。(26)

再び、我が假定の資本家(25)に立ち歸らう。彼れが商品市場で一の勞働行程に必要なる總ての因子を買つた後に、物的因子即ち生産機關及び人的因子即ち勞働力を買つた後に、我々は彼れを見捨てたのであつた。彼れは抜目のない専門家眼を以て、其特殊の事業に、紡績業、製靴業その他に適當な生産機關及び勞働力を選択した。我が資本家は斯くして、彼れが買入れた商品勞働力の消費に取りかゝる。即ち彼れは勞働力の負擔者に、勞働者に、其勞働によつて生産機關を消費させる。勞働行程の一般的性質は、固より、勞働者が其行程を自分自身の爲めでなく、資本家の爲めに行ふと云ふ事に依つては變化しない。尙また、深靴が造られたり或は絲が

紡がれたりするに當つての、一定の方法も最初は資本家の介在し來たることに依つて變化し得ないのである。資本家は先づ、勞働力を市場で見出した儘に取り入れなければならぬ。随つて又、其勞働をまだ何等の資本家の存しなかつた時代に生じた儘のものとして取り入れなければならぬ。勞働が資本の下に從屬することとに因る生産方法その者の轉化は、後になつて始めて生じ得るのであつて、随つて後段に於て始めて考究せらるべきである。(27)

さて、資本家に依る勞働力の消費行程として行はれる儘の勞働行程は、二つの特別な現象を示す。

先づ、勞働者は其勞働の所有主たる資本家の管理のもとに勞働する。資本家は勞働が順當に進行して、生産機關が目的に合して(28)使用されるように、随つて如何なる原料も浪費されず、勞働器具が節用されるように、即ち勞働に於ける其使用が必要とするだけの範圍に限つて攪亂されるに止るよう注意する。(28)

が、第二にまた、生産物は資本家の所有物であつて、直接の生産者即ち勞働者の所有物ではない。資本家は例へば、勞働力の日價値を支拂ふ。斯くて其勞働力の使

用は、他の各商品、例へば資本家が日借りした一頭の馬の使用と同じく、一日間資本家のものである。商品の使用は商品の購買者に属する。そして労働力の所有者は、其労働を與へることに依つて、實際たゞ彼れが販賣した使用價值を與へるに過ぎないのである。彼れが資本家の仕事場に入り込んだ瞬間からして、彼れの労働力の使用價值随つて其労働力の使用即ち労働は、資本家のものである。資本家は労働力の購買に依つて、生産物の生きた酵母としての労働そのものを、その死んだ形成諸要素（矢張り彼れに屬してるところの）に合體させたのである。彼れの立場からすれば、労働行程は、彼れが購買した商品労働力の消費に外ならぬ。然し彼れはそれに生産機關を附加することによつてのみ、此労働力を消費し得るのである。労働行程は、資本家が購買した諸々の物の間の、資本家に屬する諸々の物の間の一の行程である。されば此行程の生産物は、彼れの酒窖に於ける醱酵行程の生産物と全く同様に、彼れのものである（十）。

（十）『諸々の生産物は資本に轉化するに先つて既に占有されてゐる。此轉化はそれらの物を右の占有から引離すものではない。』（シエルプユリエ著『貧か富か』巴里、一八四

一年刊第五三及五四頁）『プロレタリアンは一定量の生活資料（approvisionnement）に對して其労働を賣ることに依つて、生産物に於ける總ての別け前を完全に斷念する。諸諸の生産物の占有は従前の儘になつてゐる。それは右に述べた賣買契約に依つては決して變化しない。生産物は原料と生活資料とを供給した資本家に専ら屬してゐる。これは占有法則の一の嚴重な歸結であつて、此法則の根本原理は右と反對に自身の生産物に對する各労働者の絶對的の所有權と云ふことであつた』（前掲書第五八頁）。ジェームス・ミル著『經濟學要論』第七〇頁）に曰く、『労働者が其労働に對して賃銀を受取る時に……其場合に資本家は單に資本（茲では生産機關のこと）のみの所有者でなくまた労働の所有者である。若し賃銀として支拂はれたものが、普通なされるように資本と云ふ言葉の中に含まれるならば、資本から引離して労働を云ふるのは不條理である。斯様に使用された資本と云ふ言葉は、労働及び資本の双方を含む。』（31）

（二） 價值増殖行程³¹

生産物——資本家の所有物——は一の使用價值、即ち紡絲或は靴などである。然し例へば深靴は或意味に於て社會進歩の基礎を成すにしても、そして我が資本家は一の斷乎たる進歩主義者であるにしても、彼れは深靴それ自身の爲に深靴を造るのではない。使用價值は一般に、商品生産に於て『それ自身の爲めに愛せら

れる』者ではない。諸々の使用價值は商品生産に於ては、それが交換價值の物質的地盤即ち負擔者であるが故にのみ、又その限りでのみ生産される。そして我が資本家には二通りの事柄が問題である。

第一に、彼れは交換價值を有する一の使用價值販賣に定められた一の物品、即ち一の商品を生産しようとしてゐる。そして第二に、彼れは其生産に要した諸商品の（即ち彼れがその爲に商品市場に於て其大事な貨幣を前貸したところの生産機關及び勞働力の）價值總額よりも高い價值を有する一の商品を生産しようとしてゐる。彼れは常に一の使用價值をばかりでなく、一の商品をも生産しようとしてゐるのである。使用價值をばかりでなく、價值をも生産しようとしてゐるのである。そして價值をばかりでなく、また餘剩價值をも生産しようとしてゐるのである。^[32]

實際のところ、茲では商品生産が問題であるから、我々は之まで明かにたゞ行程の一面のみを考究してゐた。商品それ自身が使用價值と價值との合一である如く、商品の生産行程は勞働行程と價值形成行程との合一でなければならぬ。^[33]

そこで生産行程を今度はまた價值形成行程として考究しよう。

我々は、各商品の價值は其商品の使用價值に體現してゐる勞働の分量、即ち其商品の生産上社會的に必要なる勞働時間に依つて決定されてゐることを知つてゐる。此事はまた、勞働行程の結果として我が資本家に生じて來た生産物に對しても通用するのである。それ故に先づ、此生産物に體化した勞働を考量しなければならぬ。

此の生産物が、例へば紡絲であるとせよ。

紡絲の製出には、先づ其原料が必要であつた。例へば十斤の棉花が必要であつた。此棉花の價值如何は差當り問ふに及ばない。なぜならば、資本家はそれを市場で其價值通りに例へば十志で買つたから。

棉花の價格に於て、其生産に要した勞働は既に一般に社會的な勞働として表現されてゐる。我々は更らに、棉花への加工に於て消費された紡錘量（それは茲では、他の總ての費された勞働要具を代表してゐる）が二志の價值を有してゐると假定し度い。で、若し十二志の金分量が二十四時間分の勞働の、或は二日分の勞働